

## 第 10 章 準備書記載内容の変更の概要と理由

### 1 「第 2 章 事業特性に関する情報」に係る変更の概要

「第 2 章 事業特性に関する情報」に係る変更の概要を表 1-1 に示す。なお、準備書における変更前の該当箇所を記載したが、変更後の記載内容の詳細については記載を省略した箇所もあるので、各該当頁を参照されたい（以下、同様）。

表 1-1 「第 2 章 事業特性に関する情報」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由
2	追記	<p>住民意見において、事業の必要性、目的、検討過程等に関する意見が出されたため、より詳細に記述を追記した。</p> <p><u>準備書 p.2 「2 対象事業の目的」に文章を追記(下線：追記)【評価書 p.2～3】</u></p> <p><u>木曾岬干拓事業は、都市近郊農業地帯としての立地条件を生かし、背後地農家の経営規模を拡大し、農業の近代化及び経営の安定化を図ることを目的として、昭和 41 年度に事業着手された。以来、30 有余年経過し、名古屋市を中心とした経済圏が大きく広がり都市化が急速に進展したことからその時代変化に的確に対応して、木曾岬干拓地を農業的土地利用から都市的土地利用に転換しその有効利用を図ることが求められてきた。</u></p> <p><u>一方、木曾岬干拓地は、現在整備が進められている第二名神高速道路に加え、計画中の東海北陸自動車道の南進路線等が整備される将来においては、これらの高速交通網が結節する地域となり、中部国際空港及び名古屋港、四日市港への隣接性など交通便利に恵まれた条件にある。</u></p> <p><u>こうした干拓地を取り巻く状況等を踏まえ、三重県では、平成 9 年の総合計画「三重のくにづくり宣言」(平成 9 年 11 月発行)において、「木曾岬干拓地については、人、モノ、情報の交流創造拠点、自然とのふれあいの場など、多角的な土地利用の検討を進め、広域的な有効活用をめざす」こととした。</u></p> <p><u>さらに平成 16 年度を初年度とする新しい総合計画「県民しあわせプラン」においては、「当面の土地利用計画に沿った木曾岬干拓地の利用を進めるとともに干拓地の将来の活用策についても検討を行う」こととしている。</u></p> <p><b>(1) 当面の土地利用計画に基づく整備</b></p> <p><u>木曾岬干拓地の土地利用については、地元自治体や学識経験者、経済界等で構成する「木曾岬干拓地土地利用検討委員会」が平成 11 年 6 月に取りまとめた「木曾岬干拓地土地利用に関する報告書」において、「当面は現状の地盤高での利用を前提とした適切な利用を図りつつ、将来的には盛土等を前提とした高度な形での都市的な土地利用に発展させていくという段階的な土地利用が現実的に望ましい」とされた。これを受けて三重県は愛知県とともに、それを基本方向として干拓地の当面の土地利用計画を策定し、その有効利用に向け、公的主体として、包括的に用地を確保し、長期的な視点で高度な都市の利用を図る必要から県が買い受け、当面の土地利用計画に沿って、公共の利用を図るべく整備を進めていくこととした。</u></p> <p><u>今回は、概ね 5 年以内に事業着手を予定している干拓地北側の 145.1ha を対象に当面の土地利用計画に基づく整備を行うものである。</u></p> <p><b>(2) 干拓地の広域的な活用のための整備</b></p> <p><u>木曾岬干拓地の立地条件を活かし、広域的な有効活用を図るため、愛知県とともに、干拓地の平坦で広大な空間を生かした余暇活動等が可能な野外体験広場の整備を行うほか、建設発生土の有効活用を図るための建設発生土ストックヤードの整備を行う。</u></p> <p><b>① 野外体験広場の整備</b></p> <p><u>本事業では、野外体験広場として、わんぱく原っぱ、冒険広場、デイキャンプ場といった公園施設の整備を行うこととしている。こうした広場の整備は、平成 10 年以降実施の県のアンケート調査(一万人アンケート)でも、自然に親しむ場の整備、スポーツレクリエーションに対する関心の割合が高い状況となっている。</u></p> <p><u>整備にあたっては、周囲 40m～200m 程度を緑地帯として確保することにより、現存する干拓地の自然を残すとともに、干拓地内にある緑地に連続性を持たせていくという、干拓地の自然環境や生態系に配慮した整備を行う。また、当施設は木曾川河口に位置し、川と海に隣接する広大な場でもあることから、自然に囲まれた広大な野外活動の場の提供を通じ自然とのふれあいの場、自然教育の場として活用するなど、近隣の公園とは異なる性格を持った大規模な広場とすることとする。</u></p>

表 1-1 「対象事業の内容」に係る変更の概要(2)

頁	区分	変更の概要及び理由
	(つづき)	<p>準備書 p.2 「2 対象事業の目的」に文章を追記(下線：追記)【評価書 p.2～3】</p> <p><b>②建設発生土ストックヤードの整備</b>            建設発生土ストックヤードは、建設リサイクルを一層推進する観点のもと、公共事業から発生する建設発生土の有効活用を図るための施設である。平成12年度の土地利用計画策定当時、国は循環型社会形成推進基本法、建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律等、循環型社会の形成を目指す建設リサイクルに関連する法律を公布するなど、全国的に建設副産物のリサイクルを進めていこうとしていた。これを受け、三重県においても、平成11年6月に「三重県における建設リサイクル行動計画」を策定し、建設発生土の再利用についてその推進を図るため、リアルタイムな発生土の情報交換システムを構築するとともに、再利用の時間調整を図るため、仮置場としての建設発生土ストックヤードを設置し、工事間での利用を進め、より一層のリサイクルの推進に取り組んでいくこととした。</p> <p>北勢地区においては、建設発生土の処理が逼迫した状況にあり、環境への負荷の低減、費用の最小化の観点からも必要な施設であることから、近隣で発生する建設発生土の有効活用を図るための仮置場として整備を行う。</p> <p><b>(3) 防災上の観点からの盛土及び現況の自然に配慮した施設整備</b>            伊勢湾岸自動車道(第二名神高速道路)より北側の事業実施区域においては、木曾岬町等が地盤の低い輪中地域となっていることから、台風による洪水、高潮等から住民を守る場所として、また災害時には大規模なサービスヤードとしての機能をも果たす広場として活用するという防災上の観点から、将来の高度な都市的土地利用も考慮して、高さ5m程度の盛土を行う。</p> <p>また、本事業による各公園施設等の整備にあたっては、干拓地内に整備される緑地との連続性・一体性を確保するため、周囲40m～200m程度を緑地帯とすることにより、現存する干拓地の自然を残すとともに、生態系の分断をなくしていくという、干拓地の自然環境や生態系に配慮した整備を行うこととする。</p> <p>また、干拓地で生息・営巣が確認された希少種の猛禽類である「チュウヒ」の保全を図るため、干拓地南端に愛知県とともに約50haの保全区を設置することとする。</p> <p>こうした施設整備に際しては、三重県環境影響評価の手続きに着手した時期以降に策定された景観保全や環境保全を目的とした法律の基本理念も踏まえた整備を行う。</p>
5	追記	<p>ストックヤードの整備について住民意見を考慮し、その目的を追記した。</p> <p>準備書 p.5 「3.4.2 施設の概要」に追記(下線：追記)【評価書 p.7】</p> <p>野外体験広場は、休養・くつろぎのための、あるいは軽スポーツ、デイキャンプなどを楽しむためのオープンスペースや、災害発生時のサービスヤード等の機能を持った広場とし、土地の起伏・形状等に変化をつけることにより、わんぱく原っぱ、冒険広場及びデイキャンプ場の各ゾーンに分け整備する。</p> <p>また、近隣の公共事業から発生する建設発生土の有効活用を図り、環境への負荷の低減、費用の最小化の観点から、建設発生土ストックヤードを整備する。</p>

表 1-1 「対象事業の内容」に係る変更の概要(3)

頁	区分	変更の概要及び理由
5~7	追記	<p>緑地に関して、現存する植生との連続性・一体性について追記した。</p> <p>準備書 p.5~7 「3.4.2 施設の概要 ア〜ク」に文章を追記(下線：追記) 【評価書 p.8~9】</p> <p><b>ア わんぱく原っぱ整備</b> (中略) 広場部分となる草地は整地する程度の整備に留め、広場周囲に設ける緑地については現況を保存することにより、<u>現存する干拓地の自然を残すとともに干拓地内に残る他の緑地との連続性・一体性を持たせるものとする。</u></p> <p><b>イ 冒険広場整備</b> (中略) 広場部分となる草地は整地をする程度の整備に留め、広場周囲に設ける緑地については現況を保存することにより、<u>現存する干拓地の自然を残すとともに干拓地内に残る他の緑地との連続性・一体性を持たせるものとする。</u></p> <p><b>ウ デイキャンプ場整備</b> (中略) キャンピングスペースとなる草地は、整地をする程度の整備に留め、その他の緑地については現況を保存することにより、<u>現存する干拓地の自然を残すとともに干拓地内に残る他の緑地との連続性・一体性を持たせるものとする。</u></p> <p>(中略)</p> <p><b>カ 緑地帯(現況保存)</b> (中略) ○ 緑地帯の位置づけ ・現存する自然景観を残す。 ・堤防や道路に対し、利用者の安全性を確保するための緩衝帯とする。 ・生態系の<u>連続性を確保</u>するため、干拓地全体あるいは隣接緑地とのつながりの一体性を持たせる。 ・自然観察や自然体験の場として利用する。(デイキャンプ場に計画) ・土砂の飛散を軽減する。 ・濁水の流出を軽減する。</p> <p><b>キ 建設発生土ストックヤード整備</b> ストックヤード周辺は、堤防の安定性を考慮し堤防から緩衝幅 80m 以上を確保して現況を保存する。この幅を確保することにより、この緩衝帯には土砂の流出、飛散を軽減させる機能も持たせる(建設発生土の既設排水路への流出を軽減するため、土砂流出防止対策を施す) <u>とともに、緑地の干拓地全体及び隣接緑地との連続性・一体性を持たせる。</u></p>
8	改訂	<p>3.4.4 その他施設整備の記載内容について、記述を改めた。</p> <p>準備書 p.8 「3.4.4 その他施設整備」の記載内容を改訂(下線：追記、取消線：消去) 【評価書 p.10~11】</p> <p>電気供給については、既設の送電線を利用する。電線は、<del>1号幹線道路沿いの既設電柱に添架し</del> <u>適地に移設し</u>、広場内へは、<del>わんぱく原っぱに1ヶ所、冒険広場、デイキャンプ場に1ヶ所引き込み</del> <u>口を設けて地中埋設にて配線を行う。</u> 給水については、水道用水の供給を受ける。</p> <p><u>ゴミの放置によりカラスや野犬等を誘引する懸念があることから、ゴミ箱は設置せず、持ち帰りを原則とし、利用者に対しては啓発看板を設置し注意喚起する。ゴミの散乱・放置についてはパトロールにより巡視する。また、事業区域の南端にはフェンスを設置し、事業区域外の干拓地南部への立ち入りを禁止するとともに、併せてゴミの不法投棄の防止を図る。</u></p>

表 1-1 「対象事業の内容」に係る変更の概要(4)

頁	区分	変更の概要及び理由
9	改訂	<p>3.4.5 施設利用者の想定アクセスルートの記載内容について、わかりやすく記述を改めた。</p> <p>準備書 p.9 「3.4.5 施設利用者の想定アクセスルート」の記載及び、準備書 p.13 の図 2.3.4-4 のアクセスルートの説明をわかりやすく改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.11】            (図 2.3.4-4 については評価書 p.15 を参照)</p> <p>施設利用者の事業実施区域整備区域へのアクセスは、国道 23 号からは鍋田川右岸側の道路を、緑風橋に至るルート及び県道 108 号で源緑輪中、緑風橋を経由するルートを、国道 1 号からは木曾川左岸側の道路を経由し、緑風橋に至るルートを想定した（図 2.3.4-4 参照）。</p>
10	改訂	<p>土地利用計画図について、事業実施区域のみ表示するため、図を改訂した。</p> <p>準備書 p.10 「図 2.3.4-1 土地利用の計画概要」の記載を改訂 【評価書 p.12】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="438 555 885 1243"> <p>図 2.3.4-1 土地利用の計画概要 (平成 13 年時)</p> </div> <div data-bbox="949 555 1380 1243"> <p>図 2.3.4-1 土地利用の計画概要 (平成 13 年時)</p> </div> </div>

表 1-1 「対象事業の内容」に係る変更の概要(5)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																																																											
14	改訂	<p>3.5.1 工事計画の概要の記載及びアクセスルートの説明について、わかりやすく記述を改めた。</p> <p>準備書 p.14 施設利用者の想定アクセスルートの記載及び、準備書 p.15 の図 2.3.4-4 のアクセスルートの説明をわかりやすく改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.16 を参照】</p> <p>図 2.3.5-1 については評価書 p.17 を参照）</p> <p>(1) 工事中資機材の搬出入の概要</p> <p>工事中車両の通行ルートは、国道 23 号から事業地区に至る最短のルートとして、鍋田川右岸の道路、緑風橋を経由し事業区域に至るルートと及び、県道 108 号で源緑輪中、緑風橋を経由するルートを想定している。一方、わんぱく原っぱの盛土に使用する土砂は愛知県で発生することから、この搬入ルートとして県道 103 号（愛知県）を想定している（図 2.3.5-1 参照）。</p> <p>(2) 安全対策、飛散防止対策</p> <p>建設発生土ストックヤードの侵入防止及びわんぱく原っぱ供用時の安全対策のため、ストックヤードの周囲にフェンス等を設ける。また、必要に応じて飛散防止フェンス等を設ける。さらに、気象条件に配慮し、粉じんの発生が予想される場合には必要に応じて散水車による散水を実施する。</p> <p>(3) 土砂流出防止対策</p> <p>建設発生土ストックヤードやわんぱく原っぱに搬入した土砂が降雨等により既設排水路へ流出するのを防ぐため、盛土法尻部に土砂流出防止工を実施する。また、周囲には排水路を、流末部には沈砂池を整備し、濁水の発生を抑制する。</p>																																																																																																																																											
17	追記	<p>3.5.2 工事工程にチュウヒの繁殖に配慮する旨、また、1号幹線道路の工事工程を追記した。</p> <p>準備書 p.17 表 2.3.5-2(4)～2.3.5-2(6)の工事工程の表下に、「※工事の実施についてはチュウヒの繁殖に配慮する。」を追記 【評価書 p.19】</p> <div data-bbox="399 884 1388 1265" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p style="text-align: center;">表 2.3.5-2(6) 標準的な施工による工事工程 (1号幹線道路)</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">工期 工種</th> <th colspan="6">5年次</th> <th colspan="7">6年次</th> </tr> <tr> <th>1月</th><th>2月</th><th>3月</th><th>4月</th><th>5月</th><th>6月</th> <th>1月</th><th>2月</th><th>3月</th><th>4月</th><th>5月</th><th>6月</th><th>7月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>土工</td> <td></td><td></td><td>←→</td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>横断暗渠工</td> <td>←→</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>給水工</td> <td></td><td></td><td>←→</td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>舗装(車道)</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td>←→</td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>舗装(歩道)</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td>←→</td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>排水工</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> <td>←→</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>境界B工</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> <td>←→</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>フェンス工</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td>←→</td><td></td><td></td> </tr> </tbody> </table> <p style="font-size: small;">※工事の実施についてはチュウヒの繁殖に配慮する。</p> </div>	工期 工種	5年次						6年次							1月	2月	3月	4月	5月	6月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	土工			←→											横断暗渠工	←→													給水工			←→											舗装(車道)											←→			舗装(歩道)											←→			排水工							←→							境界B工							←→							フェンス工											←→		
工期 工種	5年次						6年次																																																																																																																																						
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月																																																																																																																																
土工			←→																																																																																																																																										
横断暗渠工	←→																																																																																																																																												
給水工			←→																																																																																																																																										
舗装(車道)											←→																																																																																																																																		
舗装(歩道)											←→																																																																																																																																		
排水工							←→																																																																																																																																						
境界B工							←→																																																																																																																																						
フェンス工											←→																																																																																																																																		

## 2 「第3章 地域特性に関する情報」に係る変更の概要

「第3章 地域特性に関する情報」に係る変更の概要を表 2-1 に示す。

表 2-1 「第3章 地域特性に関する情報」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由
20	追記	<p>関係地域(桑名市長島町)の記載を統一し、その旨を追記した。</p> <p>準備書 p. 20 「地域特性に関する情報」を旧町名に統一し、説明を追記(下線:追記)【評価書 p. 22】</p> <p>事業実施区域及びその周辺の概況は、既存資料等により把握した。その対象範囲は、事業実施区域が位置する長島町及び木曾岬町、並びに弥富町とした。</p> <p>なお、長島町は平成 16 年 12 月 6 日に合併により桑名市長島町となっているが、本章では旧町名である長島町と記載した。</p>

## 3 「第4章 環境影響評価項目の選定」に係る変更の概要

「第4章 環境影響評価項目の選定」に係る変更の概要を表 3-1 に示す。

表 3-1 「第4章 環境影響評価項目の選定」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由				
70	追記	<p>環境要素の大気質(工事の実施)のうち、選定理由及び除外理由の記述を改めた。</p> <p>準備書 p. 70 表 4.1-2(1)の上から5段目、大気質(一酸化炭素、光化学オゾン等)の選定理由及び除外理由について、記述を改訂(下線:改訂)【評価書 p. 72】 存在及び供用についても同様に改訂【評価書 p. 75】</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td>工事の実施において、有害物質等の排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。つまり、内燃機関の燃焼により発生する可能性のある物質による影響が考えられる。内燃機関の燃焼により発生する可能性のある有害物質等としては、一酸化炭素、ベンゼン、炭化水素及び鉛化合物が挙げられる。しかし、一酸化炭素及び炭化水素は自動車排出ガス中の量について、ベンゼン及び鉛化合物は自動車の燃料の含有量について許容限度が定められていることから、建設機械、資材の運搬に用いる車両からの排出量は少なく、環境保全上の支障は生じないと考えられる。</td> </tr> <tr> <td>評価書(p. 72)</td> <td>工事の実施において、有害物質等の排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。<u>これらの物質については周辺測定局で基準を達成しており、測定局付近の交通量と比較して事業による交通量の増加はわずかであることから、環境への影響は軽微であり、環境保全上の支障は生じないと考えられる。</u></td> </tr> </table>	準備書	工事の実施において、有害物質等の排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。つまり、内燃機関の燃焼により発生する可能性のある物質による影響が考えられる。内燃機関の燃焼により発生する可能性のある有害物質等としては、一酸化炭素、ベンゼン、炭化水素及び鉛化合物が挙げられる。しかし、一酸化炭素及び炭化水素は自動車排出ガス中の量について、ベンゼン及び鉛化合物は自動車の燃料の含有量について許容限度が定められていることから、建設機械、資材の運搬に用いる車両からの排出量は少なく、環境保全上の支障は生じないと考えられる。	評価書(p. 72)	工事の実施において、有害物質等の排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。 <u>これらの物質については周辺測定局で基準を達成しており、測定局付近の交通量と比較して事業による交通量の増加はわずかであることから、環境への影響は軽微であり、環境保全上の支障は生じないと考えられる。</u>
準備書	工事の実施において、有害物質等の排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。つまり、内燃機関の燃焼により発生する可能性のある物質による影響が考えられる。内燃機関の燃焼により発生する可能性のある有害物質等としては、一酸化炭素、ベンゼン、炭化水素及び鉛化合物が挙げられる。しかし、一酸化炭素及び炭化水素は自動車排出ガス中の量について、ベンゼン及び鉛化合物は自動車の燃料の含有量について許容限度が定められていることから、建設機械、資材の運搬に用いる車両からの排出量は少なく、環境保全上の支障は生じないと考えられる。					
評価書(p. 72)	工事の実施において、有害物質等の排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。 <u>これらの物質については周辺測定局で基準を達成しており、測定局付近の交通量と比較して事業による交通量の増加はわずかであることから、環境への影響は軽微であり、環境保全上の支障は生じないと考えられる。</u>					
70	改訂	<p>環境要素の低周波音(工事の実施)について、選定理由及び除外理由の記述を改めた。</p> <p>準備書 p. 70 表 4.1-2(1)の低周波音の選定理由及び除外理由について、記述を改訂(下線:改訂)【評価書 p. 72】 存在及び供用についても同様に改訂【評価書 p. 75】</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td>低周波音の主な発生要因で、工事の実施に関係するものとして、資材運搬車両等が橋や高架道路を通行する場合が考えられる。しかし、工事中の事業実施区域内には、資材運搬車両等が走行する橋や高架道路はない。以上から、低周波音に対する環境保全上の支障は生じないと考えられる。</td> </tr> <tr> <td>評価書(p. 72)</td> <td>低周波音の主な発生要因で、工事の実施に関係するものとして、資材運搬車両等が長大な橋やジョイントの多い高架道路を通行する場合が考えられる。しかし、事業実施区域内には、資材運搬車両等が走行する<u>このような橋や高架道路はない。また、橋梁下方には家屋はない。</u>以上から、低周波音に対する環境保全上の支障は生じないと考えられる。</td> </tr> </table>	準備書	低周波音の主な発生要因で、工事の実施に関係するものとして、資材運搬車両等が橋や高架道路を通行する場合が考えられる。しかし、工事中の事業実施区域内には、資材運搬車両等が走行する橋や高架道路はない。以上から、低周波音に対する環境保全上の支障は生じないと考えられる。	評価書(p. 72)	低周波音の主な発生要因で、工事の実施に関係するものとして、資材運搬車両等が長大な橋やジョイントの多い高架道路を通行する場合が考えられる。しかし、事業実施区域内には、資材運搬車両等が走行する <u>このような橋や高架道路はない。また、橋梁下方には家屋はない。</u> 以上から、低周波音に対する環境保全上の支障は生じないと考えられる。
準備書	低周波音の主な発生要因で、工事の実施に関係するものとして、資材運搬車両等が橋や高架道路を通行する場合が考えられる。しかし、工事中の事業実施区域内には、資材運搬車両等が走行する橋や高架道路はない。以上から、低周波音に対する環境保全上の支障は生じないと考えられる。					
評価書(p. 72)	低周波音の主な発生要因で、工事の実施に関係するものとして、資材運搬車両等が長大な橋やジョイントの多い高架道路を通行する場合が考えられる。しかし、事業実施区域内には、資材運搬車両等が走行する <u>このような橋や高架道路はない。また、橋梁下方には家屋はない。</u> 以上から、低周波音に対する環境保全上の支障は生じないと考えられる。					

表 3-1 「第 4 章 環境影響評価項目の選定」に係る変更の概要(2)

頁	区 分	変更の概要及び理由				
72	改 訂	<p>環境要素の温室効果ガス（工事の実施）について、選定理由及び除外理由の記述を改めた。</p> <p>準備書 p. 72 表 4.1-2(1)中の温室効果ガスの選定理由及び除外理由について、記述を追記（下線：改訂）【評価書 p. 74】 存在及び供用についても同様に改訂【評価書 p. 77】</p> <table border="1" data-bbox="395 320 1394 595"> <tr> <td data-bbox="395 320 523 499">準備書</td> <td data-bbox="523 320 1394 499">工事の実施において、温室効果ガスの排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。つまり、内燃機関の燃焼により発生する可能性がある物質による影響が考えられる。内燃機関の燃焼により発生する可能性がある温室効果ガスとしては、二酸化炭素、一酸化炭素、メタン及び一酸化二窒素が挙げられる。二酸化炭素以外の原因物質については自動車排出ガス中の量の許容限度が定められているが、二酸化炭素についての規制がないため、温室効果ガスとして二酸化炭素の排出が考えられる。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="395 499 523 595">評価書 (p. 74)</td> <td data-bbox="523 499 1394 595">工事の実施において、温室効果ガスの排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。<u>これらにより温室効果ガスとして、車両等からの二酸化炭素の排出が考えられる。</u></td> </tr> </table>	準備書	工事の実施において、温室効果ガスの排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。つまり、内燃機関の燃焼により発生する可能性がある物質による影響が考えられる。内燃機関の燃焼により発生する可能性がある温室効果ガスとしては、二酸化炭素、一酸化炭素、メタン及び一酸化二窒素が挙げられる。二酸化炭素以外の原因物質については自動車排出ガス中の量の許容限度が定められているが、二酸化炭素についての規制がないため、温室効果ガスとして二酸化炭素の排出が考えられる。	評価書 (p. 74)	工事の実施において、温室効果ガスの排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。 <u>これらにより温室効果ガスとして、車両等からの二酸化炭素の排出が考えられる。</u>
準備書	工事の実施において、温室効果ガスの排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。つまり、内燃機関の燃焼により発生する可能性がある物質による影響が考えられる。内燃機関の燃焼により発生する可能性がある温室効果ガスとしては、二酸化炭素、一酸化炭素、メタン及び一酸化二窒素が挙げられる。二酸化炭素以外の原因物質については自動車排出ガス中の量の許容限度が定められているが、二酸化炭素についての規制がないため、温室効果ガスとして二酸化炭素の排出が考えられる。					
評価書 (p. 74)	工事の実施において、温室効果ガスの排出が考えられる環境要因は、建設機械の稼働と資材の運搬に用いる車両の運行である。 <u>これらにより温室効果ガスとして、車両等からの二酸化炭素の排出が考えられる。</u>					
74	改 訂	<p>環境要素の地下水の水質及び水位（存在及び供用）と地盤（存在及び供用）について、地下水の取水を行わないこととしたため、選定理由及び除外理由の記述を改めた。</p> <p>準備書 p. 74 表 4.1-2(1)中の地下水の水質及び水位（存在及び供用）と地盤沈下量（存在及び供用）の選定理由及び除外理由について、記述を改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p. 76】</p> <p><del>給水計画では、水道水の供給を受ける計画であるが、一部のトイレに対する給水は、地下水の取水により確保する計画である。当該地域は、地下水取水の規制区域であり、一日当りの総揚水量は 350m<sup>3</sup>以下とされている。これに対し、土地利用計画による揚水量は 40m<sup>3</sup>程度である。その他、地下水の取水など地下水の状況に影響を及ぼす行為は行わない。以上から、地盤について環境保全上の支障は生じないと考えられる。</del></p>				

#### 4 「第7章 調査、予測及び評価の手法」に係る変更の概要

「第7章 調査、予測及び評価の手法」に係る変更の概要を表4-1に示す。

表4-1 「第7章 調査、予測及び評価の手法」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由				
108	改訂	6.1 陸生動物 現地調査の手法の記載内容について、記述を改めた。				
		準備書 p.108 「6. 1 現地調査の手法」の記載内容を改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.110】				
		6 陸生動物				
		6.1 現地調査の手法				
		環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等
		陸生動物	鳥類 ( <u>鳥類全般</u> )	ラインセンサス法 定点記録法 任意観察法	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、鍋田干拓地、源緑輪中、鍋田川、木曾川、伊勢湾)	24回 (毎月各1回) 期間：2年間
			鳥類 (水鳥類) ( <u>集団生息地</u> )	ラインセンサス法 定点観察法		1年目：3回 (5, 9, 10月に各1回) 2年目：4回 (4, 5, 8, 9月に各1回)
			オオヨシキリの繁殖状況	コドラート調査		4回 ( <u>5, 6, 9, 10月に各1回</u> )
			鳥類(猛禽類) 行動圏調査	定点観察法		1年目：12回 (毎月各1回) 2年目：5回 (4, 5, 6, 7, 8月に各1回) 3年目：3回 (5, 6, 7月に各1回)
			鳥類(猛禽類) ねぐら調査	定点観察法		1年目：10回 (4, 5月を除く毎月各1回) 2年目：4回 (11, 12, 1, 2月に各1回)
			鳥類(猛禽類) 営巣地調査	営巣地の確認等		1年目：1回(11月) 2年目： <del>4</del> 8回 ( <del>7, 9, 12</del> 月に各1回、5, 8月に各2回、6月は3回)
			鳥類(猛禽類) 餌資源調査	ペリットの採取、分析等		4回 ( <u>8, 9, 1, 2月に各1回</u> )
			哺乳類	目撃法 フィールドサイン法 トラップ法		3回 (春季、秋季、冬季に各1回)
			カヤネズミの生息環境	コドラート調査		1回 (11月に1回)
			爬虫類・両生類	目撃法 捕獲確認法 トラップ法		2回 (春季、秋季に各1回)
			昆虫類	任意採集法 ライトトラップ法 ベイトトラップ法 マレーズトラップ法		1年目：5回 (春季に2回、夏季1回、秋季に2回) 2年目：2回 (春季に2回) 重要種：6回 ( <del>夏季4回、秋季1回、冬季1回</del> )
			アオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況	踏査 任意採集法		6回 ( <u>7, 8, 10, 2月に各1回、6月は2回</u> )
			クモ類	任意採集法 ベイトトラップ法		5回 (春季に2回、夏季に1回、秋季に2回)
			土壌動物	ツルグレン法 ハンドソーティング法		3回 ( <u>春季、夏季、秋季に各1回</u> )



表 4-1 「第 7 章 調査、予測及び評価の手法」に係る変更の概要(2)

頁	区分	変更の概要及び理由																									
111	改訂	<p>7.1 陸生植物 現地調査の手法の植生の記載内容について、記述を改めた。</p> <p>準備書 p.111 「7.1 現地調査の手法」の記述を改訂（下線：追記）【評価書 p.114】</p> <p><b>7. 1 現地調査の手法</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>環境要素</th> <th>項目</th> <th>調査方法</th> <th>調査地点又は範囲</th> <th>調査頻度・時期等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="5">陸生植物</td> <td>植物相 (維管束植物)</td> <td>任意確認法 任意採集法</td> <td>事業実施区域及びその周辺(木曾岬干拓地)</td> <td>3回 (春季、夏季、秋季に各1回)</td> </tr> <tr> <td>立木</td> <td>毎木調査</td> <td>事業実施区域内</td> <td>1回 (秋季に1回)</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">植生</td> <td>現存植生</td> <td>踏査 空中写真判読</td> <td rowspan="3">事業実施区域及びその周辺(木曾岬干拓地)</td> <td rowspan="3">1回 (秋季に1回)</td> </tr> <tr> <td>群落構造</td> <td>ブラウニーブランケの植物社会学的植生調査法</td> </tr> <tr> <td>植生自然度</td> <td>環境庁(1976)の基準に従い算出</td> </tr> <tr> <td>潜在自然植生</td> <td>文献等により検討</td> </tr> </tbody> </table>	環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等	陸生植物	植物相 (維管束植物)	任意確認法 任意採集法	事業実施区域及びその周辺(木曾岬干拓地)	3回 (春季、夏季、秋季に各1回)	立木	毎木調査	事業実施区域内	1回 (秋季に1回)	植生	現存植生	踏査 空中写真判読	事業実施区域及びその周辺(木曾岬干拓地)	1回 (秋季に1回)	群落構造	ブラウニーブランケの植物社会学的植生調査法	植生自然度	環境庁(1976)の基準に従い算出	潜在自然植生	文献等により検討
環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等																							
陸生植物	植物相 (維管束植物)	任意確認法 任意採集法	事業実施区域及びその周辺(木曾岬干拓地)	3回 (春季、夏季、秋季に各1回)																							
	立木	毎木調査	事業実施区域内	1回 (秋季に1回)																							
	植生	現存植生	踏査 空中写真判読	事業実施区域及びその周辺(木曾岬干拓地)	1回 (秋季に1回)																						
		群落構造	ブラウニーブランケの植物社会学的植生調査法																								
		植生自然度	環境庁(1976)の基準に従い算出																								
潜在自然植生	文献等により検討																										
112	改訂	<p>8.1 水生生物 現地調査の手法の記載内容について、記述を改めた。</p> <p>準備書 p.112 「8.1 現地調査の手法」の記載内容を改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.115】</p> <p><b>8. 1 現地調査の手法</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>環境要素</th> <th>項目</th> <th>調査方法</th> <th>調査地点又は範囲</th> <th>調査頻度・時期等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="5">水生生物</td> <td>魚類</td> <td>漁具捕獲法 任意採集法</td> <td rowspan="4">事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、木曾川)</td> <td>2回 (春季、秋季に各1回)</td> </tr> <tr> <td>底生動物</td> <td>定性採集法 定量採集法</td> <td>3回 (春季、秋季、冬季に各1回)</td> </tr> <tr> <td>潮間帯生物</td> <td>定性採集法 定量採集法</td> <td>2回 (春季、秋季に各1回)</td> </tr> <tr> <td>水生植物 (水草)</td> <td>任意確認法</td> <td>1年目：3回 (春季、秋季、冬季に各1回) 2年目：2回 (重要種の調査、夏季、早春季に1回)</td> </tr> <tr> <td>リュウノヒゲモの生育状況と生育環境</td> <td>踏査 コドラート法 生育環境</td> <td>事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地)</td> <td>3回 (7,8,3月に各1回)</td> </tr> </tbody> </table>	環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等	水生生物	魚類	漁具捕獲法 任意採集法	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、木曾川)	2回 (春季、秋季に各1回)	底生動物	定性採集法 定量採集法	3回 (春季、秋季、冬季に各1回)	潮間帯生物	定性採集法 定量採集法	2回 (春季、秋季に各1回)	水生植物 (水草)	任意確認法	1年目：3回 (春季、秋季、冬季に各1回) 2年目：2回 (重要種の調査、夏季、早春季に1回)	リュウノヒゲモの生育状況と生育環境	踏査 コドラート法 生育環境	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地)	3回 (7,8,3月に各1回)		
環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等																							
水生生物	魚類	漁具捕獲法 任意採集法	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、木曾川)	2回 (春季、秋季に各1回)																							
	底生動物	定性採集法 定量採集法		3回 (春季、秋季、冬季に各1回)																							
	潮間帯生物	定性採集法 定量採集法		2回 (春季、秋季に各1回)																							
	水生植物 (水草)	任意確認法		1年目：3回 (春季、秋季、冬季に各1回) 2年目：2回 (重要種の調査、夏季、早春季に1回)																							
	リュウノヒゲモの生育状況と生育環境	踏査 コドラート法 生育環境	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地)	3回 (7,8,3月に各1回)																							

表 4-1 「第 7 章 調査、予測及び評価の手法」に係る変更の概要(3)

頁	区分	変更の概要及び理由																					
114	改訂	<p>9.1 生態系 現地調査の手法の記載内容について、記述を改めた。</p> <p>準備書 p.114 「9.1 現地調査の手法」の記載内容を改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.117】</p> <p>9. 1 現地調査の手法</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>環境要素</th> <th>項目</th> <th>調査方法</th> <th>調査地点又は範囲</th> <th>調査頻度・時期等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="6">生態系</td> <td rowspan="6">地域を特徴づける生態系</td> <td>上位性、典型性、特殊性、移動性の注目種等の抽出・整理による方法</td> <td rowspan="2">事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、鍋田干拓地、源緑輪中、鍋田川、木曾川、伊勢湾)</td> <td>—</td> </tr> <tr> <td>生態系の上位性の種(チュウヒ等ワシ・タカ類)の行動圏調査 (6 陸生動物、鳥類(猛禽類)行動圏調査に同じ)</td> <td>1 年目: 12 回 (毎月各 1~2 回) 2 年目: 4 回 (4, 5, 6, 7, 8, 11, 12, 1, 2 月に各 1~2 回) 2 年目: 5 回 (4, 5, 6, 7, 8 月に各 1 回) 3 年目: 3 回 (5, 6, 7 月に各 1 回)</td> </tr> <tr> <td>生態系の典型性の種(オオヨシキリ)のマッピング法の繁殖状況の調査 (6 陸生動物、オオヨシキリ繁殖状況調査に同じ)</td> <td rowspan="4">事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地)</td> <td>1 年目: 3 回 (5, 6, 10 月に各 1 回) 2 年目: 4 回/年 (5, 6, 9, 10 月に各 1 回)</td> </tr> <tr> <td>生態系の典型性の種(セッカ)の調査(6 陸生動物、鳥類(鳥類全般)に同じ)</td> <td>24 回 (毎月各 1 回) 期間: 2 年間</td> </tr> <tr> <td>生態系の典型性の種(カヤネズミ)の生息環境状況の調査 (6 陸生動物、カヤネズミの生息環境に同じ)</td> <td>1 回 (11 月に 1 回)</td> </tr> <tr> <td>生態系の特殊性の種(リュウノヒゲモ)の分布状況及び生息環境の調査 (8 水生生物、リュウノヒゲモの生育状況と生育環境に同じ)</td> <td>3 回 (7, 8, 3 月に各 1 回)</td> </tr> </tbody> </table>	環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等	生態系	地域を特徴づける生態系	上位性、典型性、特殊性、移動性の注目種等の抽出・整理による方法	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、鍋田干拓地、源緑輪中、鍋田川、木曾川、伊勢湾)	—	生態系の上位性の種(チュウヒ等ワシ・タカ類)の行動圏調査 (6 陸生動物、鳥類(猛禽類)行動圏調査に同じ)	1 年目: 12 回 (毎月各 1~2 回) 2 年目: 4 回 (4, 5, 6, 7, 8, 11, 12, 1, 2 月に各 1~2 回) 2 年目: 5 回 (4, 5, 6, 7, 8 月に各 1 回) 3 年目: 3 回 (5, 6, 7 月に各 1 回)	生態系の典型性の種(オオヨシキリ)のマッピング法の繁殖状況の調査 (6 陸生動物、オオヨシキリ繁殖状況調査に同じ)	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地)	1 年目: 3 回 (5, 6, 10 月に各 1 回) 2 年目: 4 回/年 (5, 6, 9, 10 月に各 1 回)	生態系の典型性の種(セッカ)の調査(6 陸生動物、鳥類(鳥類全般)に同じ)	24 回 (毎月各 1 回) 期間: 2 年間	生態系の典型性の種(カヤネズミ)の生息環境状況の調査 (6 陸生動物、カヤネズミの生息環境に同じ)	1 回 (11 月に 1 回)	生態系の特殊性の種(リュウノヒゲモ)の分布状況及び生息環境の調査 (8 水生生物、リュウノヒゲモの生育状況と生育環境に同じ)	3 回 (7, 8, 3 月に各 1 回)
環境要素	項目	調査方法	調査地点又は範囲	調査頻度・時期等																			
生態系	地域を特徴づける生態系	上位性、典型性、特殊性、移動性の注目種等の抽出・整理による方法	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地、鍋田干拓地、源緑輪中、鍋田川、木曾川、伊勢湾)	—																			
		生態系の上位性の種(チュウヒ等ワシ・タカ類)の行動圏調査 (6 陸生動物、鳥類(猛禽類)行動圏調査に同じ)		1 年目: 12 回 (毎月各 1~2 回) 2 年目: 4 回 (4, 5, 6, 7, 8, 11, 12, 1, 2 月に各 1~2 回) 2 年目: 5 回 (4, 5, 6, 7, 8 月に各 1 回) 3 年目: 3 回 (5, 6, 7 月に各 1 回)																			
		生態系の典型性の種(オオヨシキリ)のマッピング法の繁殖状況の調査 (6 陸生動物、オオヨシキリ繁殖状況調査に同じ)	事業実施区域及びその周辺 (木曾岬干拓地)	1 年目: 3 回 (5, 6, 10 月に各 1 回) 2 年目: 4 回/年 (5, 6, 9, 10 月に各 1 回)																			
		生態系の典型性の種(セッカ)の調査(6 陸生動物、鳥類(鳥類全般)に同じ)		24 回 (毎月各 1 回) 期間: 2 年間																			
		生態系の典型性の種(カヤネズミ)の生息環境状況の調査 (6 陸生動物、カヤネズミの生息環境に同じ)		1 回 (11 月に 1 回)																			
		生態系の特殊性の種(リュウノヒゲモ)の分布状況及び生息環境の調査 (8 水生生物、リュウノヒゲモの生育状況と生育環境に同じ)		3 回 (7, 8, 3 月に各 1 回)																			

表 4-1 「第 7 章 調査、予測及び評価の手法」に係る変更の概要(4)

頁	区分	変更の概要及び理由																					
115	改訂	<p>10.1 景観 現地調査の手法の植生の記載内容について、記述を改めた。</p> <p>準備書 p. 115 「10.1 現地調査の手法」の記載内容を改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p. 118】</p> <p>また、高速道路上からの眺望景観について、位置図を追加【評価書 p. 120 図 7.10-2 参照】</p> <p>10.1 現地調査の手法</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>環境要素</th> <th>項目</th> <th>調査方法</th> <th>調査地点</th> <th>調査頻度・時期等</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">景観</td> <td>眺望景観 (眺望点、 景観資源、 眺望景観)</td> <td rowspan="3">目視及び 写真撮影</td> <td>事業実施区域の周囲 3 km程度の範囲にお いて抽出した眺望点 5 地点</td> <td>5 回 <del>(春季、夏季、秋季、冬季に各 1回)</del></td> </tr> <tr> <td>内部景観</td> <td>事業実施区域を眺望 できる眺望点 1 地点</td> <td>1 回</td> </tr> <tr> <td>高速道路上か らの眺望景観</td> <td>事業実施区域内部 1 地点</td> <td>1 回 <del>(夏季に1回)</del></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>伊勢湾岸自動車道路 2 地点</td> <td>1 回</td> </tr> </tbody> </table>	環境要素	項目	調査方法	調査地点	調査頻度・時期等	景観	眺望景観 (眺望点、 景観資源、 眺望景観)	目視及び 写真撮影	事業実施区域の周囲 3 km程度の範囲にお いて抽出した眺望点 5 地点	5 回 <del>(春季、夏季、秋季、冬季に各 1回)</del>	内部景観	事業実施区域を眺望 できる眺望点 1 地点	1 回	高速道路上か らの眺望景観	事業実施区域内部 1 地点	1 回 <del>(夏季に1回)</del>				伊勢湾岸自動車道路 2 地点	1 回
環境要素	項目	調査方法	調査地点	調査頻度・時期等																			
景観	眺望景観 (眺望点、 景観資源、 眺望景観)	目視及び 写真撮影	事業実施区域の周囲 3 km程度の範囲にお いて抽出した眺望点 5 地点	5 回 <del>(春季、夏季、秋季、冬季に各 1回)</del>																			
	内部景観		事業実施区域を眺望 できる眺望点 1 地点	1 回																			
	高速道路上か らの眺望景観		事業実施区域内部 1 地点	1 回 <del>(夏季に1回)</del>																			
			伊勢湾岸自動車道路 2 地点	1 回																			

5 「第8章 環境影響評価の結果」に係る変更の概要

「第8章 環境影響評価の結果 1 大気質」に係る変更の概要を表5-1に示す。

表5-1 「第8章 環境影響評価の結果 1 大気質」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																
130	改訂	<p>環境大気に関する予測手法は「面整備事業環境影響評価技術マニュアル」、沿道大気に関する予測手法は「道路環境影響評価の技術手法」を用いることとしたため、環境大気の手順の出典の記載を改めた。</p> <p>準備書 p.130 環境大気についての予測手順の出典を改訂（下線：改訂）【評価書 p.134】</p> <p><b>a 工事機械等からの排出ガス</b></p> <p>工事機械等からの排出ガスの大気予測は、「面整備事業環境影響評価技術マニュアル」（建設省都市局都市計画課、平成11年11月）に基づき、有風時にはブルーム式、弱風・無風時にはパフ式を用いて、図8.1.2-2に示す手順により行った（資料8.1.2.1-1参照）。</p>																																																
139	改訂	<p>予測に用いた排出係数について、住民意見に配慮し年式別車種別排出係数を用いて再計算を行い、二酸化窒素の年間の予測結果（工事の実施）の記載を改めた。</p> <p>準備書 p.139 表8.1.2-6の年間の予測結果（二酸化窒素）を、再計算結果に改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.143】</p> <p style="text-align: center;"><b>表8.1.2-6 年間の予測結果（二酸化窒素）</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="4">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果 (ppm)</th> <th>一般車両からの寄与濃度 (ppm)</th> <th>工事用車両からの寄与濃度 (ppm)</th> <th>寄与率 (%)</th> <th>予測濃度 (ppm)</th> <th>日平均値の年間98%値 (ppm)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.021*1</td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.2</del> 0.1 未満</td> <td>0.0210</td> <td>0.0421</td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.021*1</td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001</td> <td>0.7</td> <td><del>0.0212</del> 0.0211</td> <td>0.0423</td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.026</td> <td>—</td> <td><del>0.0001</del> 0.0001 未満</td> <td><del>0.2</del> 0.1 未満</td> <td><del>0.0261</del> 0.0260</td> <td>0.0506</td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.021*1</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.0002</del> 0.0001</td> <td><del>0.7</del> 0.6</td> <td><del>0.0212</del> 0.0211</td> <td><del>0.0423</del> 0.0422</td> </tr> <tr> <td>県道103号 (愛知)</td> <td>0.021*2</td> <td><del>0.0003</del> 0.0002</td> <td><del>0.0001</del> 0.0001 未満</td> <td><del>0.5</del> 0.2</td> <td><del>0.0214</del> 0.0212</td> <td><del>0.0427</del> 0.0422</td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果				現地調査結果 (ppm)	一般車両からの寄与濃度 (ppm)	工事用車両からの寄与濃度 (ppm)	寄与率 (%)	予測濃度 (ppm)	日平均値の年間98%値 (ppm)	下藤里②	0.021*1	0.0001 未満	0.0001 未満	<del>0.2</del> 0.1 未満	0.0210	0.0421	源緑輪中	0.021*1	0.0001 未満	0.0001	0.7	<del>0.0212</del> 0.0211	0.0423	三崎①	0.026	—	<del>0.0001</del> 0.0001 未満	<del>0.2</del> 0.1 未満	<del>0.0261</del> 0.0260	0.0506	三崎②	0.021*1	0.0001 未満	<del>0.0002</del> 0.0001	<del>0.7</del> 0.6	<del>0.0212</del> 0.0211	<del>0.0423</del> 0.0422	県道103号 (愛知)	0.021*2	<del>0.0003</del> 0.0002	<del>0.0001</del> 0.0001 未満	<del>0.5</del> 0.2	<del>0.0214</del> 0.0212	<del>0.0427</del> 0.0422
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																																														
	現地調査結果 (ppm)	一般車両からの寄与濃度 (ppm)	工事用車両からの寄与濃度 (ppm)	寄与率 (%)	予測濃度 (ppm)	日平均値の年間98%値 (ppm)																																												
下藤里②	0.021*1	0.0001 未満	0.0001 未満	<del>0.2</del> 0.1 未満	0.0210	0.0421																																												
源緑輪中	0.021*1	0.0001 未満	0.0001	0.7	<del>0.0212</del> 0.0211	0.0423																																												
三崎①	0.026	—	<del>0.0001</del> 0.0001 未満	<del>0.2</del> 0.1 未満	<del>0.0261</del> 0.0260	0.0506																																												
三崎②	0.021*1	0.0001 未満	<del>0.0002</del> 0.0001	<del>0.7</del> 0.6	<del>0.0212</del> 0.0211	<del>0.0423</del> 0.0422																																												
県道103号 (愛知)	0.021*2	<del>0.0003</del> 0.0002	<del>0.0001</del> 0.0001 未満	<del>0.5</del> 0.2	<del>0.0214</del> 0.0212	<del>0.0427</del> 0.0422																																												
140	改訂	<p>予測に用いた排出係数について、住民意見に配慮し年式別車種別排出係数を用いて再計算を行い、浮遊粒子状物質の年間の予測結果（工事の実施）の記載を改めた。</p> <p>準備書 p.140 表8.1.2-7の年間の予測結果（浮遊粒子状物質）を、再計算結果に改訂（下線：追記、取消線：消去）【評価書 p.144】</p> <p style="text-align: center;"><b>表8.1.2-7 年間の予測結果（浮遊粒子状物質）</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="4">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果 (mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>一般車両からの寄与濃度 (mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>工事用車両からの寄与濃度 (mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>寄与率 (%)</th> <th>予測濃度 (mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>日平均値の2%除外値 (mg/m<sup>3</sup>)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.031*1</td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.1</del> 0.1 未満</td> <td>0.0310</td> <td>0.0754</td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.031*1</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.0001</del> 0.0001 未満</td> <td><del>0.3</del> 0.1 未満</td> <td><del>0.0311</del> 0.0310</td> <td><del>0.0756</del> 0.0754</td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.038</td> <td>—</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.1</del> 0.1 未満</td> <td>0.0380</td> <td>0.0945</td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.031*1</td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.3</del> 0.1 未満</td> <td><del>0.0311</del> 0.0310</td> <td><del>0.0756</del> 0.0754</td> </tr> <tr> <td>県道103号 (愛知)</td> <td>0.036*2</td> <td><del>0.0002</del> 0.0002</td> <td>0.0001 未満</td> <td><del>0.2</del> 0.1 未満</td> <td><del>0.0363</del> 0.0360</td> <td><del>0.0898</del> 0.0891</td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果				現地調査結果 (mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度 (mg/m <sup>3</sup> )	工事用車両からの寄与濃度 (mg/m <sup>3</sup> )	寄与率 (%)	予測濃度 (mg/m <sup>3</sup> )	日平均値の2%除外値 (mg/m <sup>3</sup> )	下藤里②	0.031*1	0.0001 未満	0.0001 未満	<del>0.1</del> 0.1 未満	0.0310	0.0754	源緑輪中	0.031*1	0.0001 未満	<del>0.0001</del> 0.0001 未満	<del>0.3</del> 0.1 未満	<del>0.0311</del> 0.0310	<del>0.0756</del> 0.0754	三崎①	0.038	—	0.0001 未満	<del>0.1</del> 0.1 未満	0.0380	0.0945	三崎②	0.031*1	0.0001 未満	0.0001 未満	<del>0.3</del> 0.1 未満	<del>0.0311</del> 0.0310	<del>0.0756</del> 0.0754	県道103号 (愛知)	0.036*2	<del>0.0002</del> 0.0002	0.0001 未満	<del>0.2</del> 0.1 未満	<del>0.0363</del> 0.0360	<del>0.0898</del> 0.0891
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																																														
	現地調査結果 (mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度 (mg/m <sup>3</sup> )	工事用車両からの寄与濃度 (mg/m <sup>3</sup> )	寄与率 (%)	予測濃度 (mg/m <sup>3</sup> )	日平均値の2%除外値 (mg/m <sup>3</sup> )																																												
下藤里②	0.031*1	0.0001 未満	0.0001 未満	<del>0.1</del> 0.1 未満	0.0310	0.0754																																												
源緑輪中	0.031*1	0.0001 未満	<del>0.0001</del> 0.0001 未満	<del>0.3</del> 0.1 未満	<del>0.0311</del> 0.0310	<del>0.0756</del> 0.0754																																												
三崎①	0.038	—	0.0001 未満	<del>0.1</del> 0.1 未満	0.0380	0.0945																																												
三崎②	0.031*1	0.0001 未満	0.0001 未満	<del>0.3</del> 0.1 未満	<del>0.0311</del> 0.0310	<del>0.0756</del> 0.0754																																												
県道103号 (愛知)	0.036*2	<del>0.0002</del> 0.0002	0.0001 未満	<del>0.2</del> 0.1 未満	<del>0.0363</del> 0.0360	<del>0.0898</del> 0.0891																																												

表 5-1 「第 8 章 環境影響評価の結果 1 大気質」に係る変更の概要(2)

頁	区分	変更の概要及び理由																																									
140	改訂	<p>予測に用いた排出係数について、住民意見に配慮し年式別車種別排出係数を用いて再計算を行い、二酸化窒素の1時間値の予測結果(工事の実施)の記載を改めた。</p> <p>準備書 p.140 表 8.1.2-8 の1時間値の予測結果(二酸化窒素)を、再計算結果に改訂(下線:追記、取消線:消去)【評価書 p.144】</p> <p>予測結果を表 8.1.2-8 に示した。予測濃度は、<u>0.0627</u>~<u>0.0752</u> mg/m<sup>3</sup> という結果であった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.1.2-8 1時間値の予測結果(二酸化窒素)</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="2">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果(ppm)</th> <th>一般車両からの寄与濃度(ppm)</th> <th>工事用車両からの寄与濃度(ppm)</th> <th>予測濃度(ppm)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.062<sup>*1</sup></td> <td><u>0.0004</u> <del>0.0003</del></td> <td><u>0.0019</u> <del>0.0016</del></td> <td><u>0.0643</u> <del>0.0620</del></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.062<sup>*1</sup></td> <td><u>0.0006</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.0030</u> <del>0.0025</del></td> <td><u>0.0657</u> <del>0.0650</del></td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.073</td> <td>—</td> <td><u>0.0022</u> <del>0.0017</del></td> <td><u>0.0752</u> <del>0.0747</del></td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.062<sup>*1</sup></td> <td><u>0.0007</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.0033</u> <del>0.0027</del></td> <td><u>0.0660</u> <del>0.0652</del></td> </tr> <tr> <td>県道103号(愛知)</td> <td>0.057<sup>*2</sup></td> <td><u>0.0019</u> <del>0.0014</del></td> <td><u>0.0039</u> <del>0.0023</del></td> <td><u>0.0627</u> <del>0.0604</del></td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果		現地調査結果(ppm)	一般車両からの寄与濃度(ppm)	工事用車両からの寄与濃度(ppm)	予測濃度(ppm)	下藤里②	0.062 <sup>*1</sup>	<u>0.0004</u> <del>0.0003</del>	<u>0.0019</u> <del>0.0016</del>	<u>0.0643</u> <del>0.0620</del>	源緑輪中	0.062 <sup>*1</sup>	<u>0.0006</u> <del>0.0005</del>	<u>0.0030</u> <del>0.0025</del>	<u>0.0657</u> <del>0.0650</del>	三崎①	0.073	—	<u>0.0022</u> <del>0.0017</del>	<u>0.0752</u> <del>0.0747</del>	三崎②	0.062 <sup>*1</sup>	<u>0.0007</u> <del>0.0005</del>	<u>0.0033</u> <del>0.0027</del>	<u>0.0660</u> <del>0.0652</del>	県道103号(愛知)	0.057 <sup>*2</sup>	<u>0.0019</u> <del>0.0014</del>	<u>0.0039</u> <del>0.0023</del>	<u>0.0627</u> <del>0.0604</del>							
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																																							
	現地調査結果(ppm)	一般車両からの寄与濃度(ppm)	工事用車両からの寄与濃度(ppm)	予測濃度(ppm)																																							
下藤里②	0.062 <sup>*1</sup>	<u>0.0004</u> <del>0.0003</del>	<u>0.0019</u> <del>0.0016</del>	<u>0.0643</u> <del>0.0620</del>																																							
源緑輪中	0.062 <sup>*1</sup>	<u>0.0006</u> <del>0.0005</del>	<u>0.0030</u> <del>0.0025</del>	<u>0.0657</u> <del>0.0650</del>																																							
三崎①	0.073	—	<u>0.0022</u> <del>0.0017</del>	<u>0.0752</u> <del>0.0747</del>																																							
三崎②	0.062 <sup>*1</sup>	<u>0.0007</u> <del>0.0005</del>	<u>0.0033</u> <del>0.0027</del>	<u>0.0660</u> <del>0.0652</del>																																							
県道103号(愛知)	0.057 <sup>*2</sup>	<u>0.0019</u> <del>0.0014</del>	<u>0.0039</u> <del>0.0023</del>	<u>0.0627</u> <del>0.0604</del>																																							
141	改訂	<p>予測に用いた排出係数について、住民意見に配慮し年式別車種別排出係数を用いて再計算を行い、浮遊粒子状物質の1時間値の予測結果(工事の実施)の記載を改めた。</p> <p>準備書 p.141 表 8.1.2-9 の1時間値の予測結果(浮遊粒子状物質)を再計算結果に改訂(下線:追記、取消線:消去)【評価書 p.145】</p> <p>予測結果を表 8.1.2-9 に示した。予測濃度は、<u>0.1215</u>~<u>0.1302</u> mg/m<sup>3</sup> という結果であった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.1.2-9 1時間値の予測結果(浮遊粒子状物質)</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="2">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>一般車両からの寄与濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>工事用車両からの寄与濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>予測濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.128<sup>*1</sup></td> <td><u>0.0002</u> <del>0.0001</del></td> <td><u>0.0011</u> <del>0.0004</del></td> <td><u>0.1293</u> <del>0.1284</del></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.128<sup>*1</sup></td> <td><u>0.0003</u> <del>0.0001</del></td> <td><u>0.0017</u> <del>0.0006</del></td> <td><u>0.1300</u> <del>0.1287</del></td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.120</td> <td>—</td> <td><u>0.0015</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.1215</u> <del>0.1205</del></td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.128<sup>*1</sup></td> <td><u>0.0004</u> <del>0.0001</del></td> <td><u>0.0019</u> <del>0.0006</del></td> <td><u>0.1302</u> <del>0.1287</del></td> </tr> <tr> <td>県道103号(愛知)</td> <td>0.120<sup>*2</sup></td> <td><u>0.0015</u> <del>0.0002</del></td> <td><u>0.0032</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.1247</u> <del>0.1208</del></td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果		現地調査結果(mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	工事用車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	予測濃度(mg/m <sup>3</sup> )	下藤里②	0.128 <sup>*1</sup>	<u>0.0002</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0011</u> <del>0.0004</del>	<u>0.1293</u> <del>0.1284</del>	源緑輪中	0.128 <sup>*1</sup>	<u>0.0003</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0017</u> <del>0.0006</del>	<u>0.1300</u> <del>0.1287</del>	三崎①	0.120	—	<u>0.0015</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1215</u> <del>0.1205</del>	三崎②	0.128 <sup>*1</sup>	<u>0.0004</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0019</u> <del>0.0006</del>	<u>0.1302</u> <del>0.1287</del>	県道103号(愛知)	0.120 <sup>*2</sup>	<u>0.0015</u> <del>0.0002</del>	<u>0.0032</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1247</u> <del>0.1208</del>							
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																																							
	現地調査結果(mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	工事用車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	予測濃度(mg/m <sup>3</sup> )																																							
下藤里②	0.128 <sup>*1</sup>	<u>0.0002</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0011</u> <del>0.0004</del>	<u>0.1293</u> <del>0.1284</del>																																							
源緑輪中	0.128 <sup>*1</sup>	<u>0.0003</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0017</u> <del>0.0006</del>	<u>0.1300</u> <del>0.1287</del>																																							
三崎①	0.120	—	<u>0.0015</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1215</u> <del>0.1205</del>																																							
三崎②	0.128 <sup>*1</sup>	<u>0.0004</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0019</u> <del>0.0006</del>	<u>0.1302</u> <del>0.1287</del>																																							
県道103号(愛知)	0.120 <sup>*2</sup>	<u>0.0015</u> <del>0.0002</del>	<u>0.0032</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1247</u> <del>0.1208</del>																																							
151	追記	<p>沿道大気(存在及び供用)の浮遊粒子状物質の年間予測結果に寄与率と予測濃度を追記した。</p> <p>準備書 p.151 表 8.1.2-17 の年間の予測結果(浮遊粒子状物質)に寄与率及び予測濃度を追記(下線:追記、取消線:消去)【評価書 p.155】</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.1.2-17 年間の予測結果(浮遊粒子状物質)</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="4">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>一般車両からの寄与濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>発生車両からの寄与濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>寄与率(%)</th> <th>予測濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>予測濃度に対する日平均値の2%除外値(mg/m<sup>3</sup>)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.031<sup>*</sup></td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.1 未満</td> <td><u>0.0310</u></td> <td>0.0754</td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.031<sup>*</sup></td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001 未満</td> <td><u>0.1 未満</u></td> <td><u>0.0310</u></td> <td><u>0.0755</u> <del>0.0754</del></td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.038</td> <td>—</td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.1 未満</td> <td>0.0380</td> <td>0.0945</td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.031<sup>*</sup></td> <td>0.0001 未満</td> <td>0.0001 未満</td> <td><u>0.1 未満</u></td> <td><u>0.0310</u></td> <td><u>0.0755</u> <del>0.0754</del></td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果				現地調査結果(mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	発生車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	寄与率(%)	予測濃度(mg/m <sup>3</sup> )	予測濃度に対する日平均値の2%除外値(mg/m <sup>3</sup> )	下藤里②	0.031 <sup>*</sup>	0.0001 未満	0.0001 未満	0.1 未満	<u>0.0310</u>	0.0754	源緑輪中	0.031 <sup>*</sup>	0.0001 未満	0.0001 未満	<u>0.1 未満</u>	<u>0.0310</u>	<u>0.0755</u> <del>0.0754</del>	三崎①	0.038	—	0.0001 未満	0.1 未満	0.0380	0.0945	三崎②	0.031 <sup>*</sup>	0.0001 未満	0.0001 未満	<u>0.1 未満</u>	<u>0.0310</u>	<u>0.0755</u> <del>0.0754</del>
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																																							
	現地調査結果(mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	発生車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	寄与率(%)	予測濃度(mg/m <sup>3</sup> )	予測濃度に対する日平均値の2%除外値(mg/m <sup>3</sup> )																																					
下藤里②	0.031 <sup>*</sup>	0.0001 未満	0.0001 未満	0.1 未満	<u>0.0310</u>	0.0754																																					
源緑輪中	0.031 <sup>*</sup>	0.0001 未満	0.0001 未満	<u>0.1 未満</u>	<u>0.0310</u>	<u>0.0755</u> <del>0.0754</del>																																					
三崎①	0.038	—	0.0001 未満	0.1 未満	0.0380	0.0945																																					
三崎②	0.031 <sup>*</sup>	0.0001 未満	0.0001 未満	<u>0.1 未満</u>	<u>0.0310</u>	<u>0.0755</u> <del>0.0754</del>																																					

表 5-1 「第 8 章 環境影響評価の結果 1 大気質」に係る変更の概要(3)

頁	区分	変更の概要及び理由																													
151	改訂	<p>予測に用いた排出係数について、住民意見に配慮し年式別車種別排出係数を用いて再計算を行い、二酸化窒素の 1 時間値の予測結果(存在及び供用)の記載を改めた。</p> <p>準備書 p. 151 表 8.1.2-18 の 1 時間値の予測結果(二酸化窒素)を、再計算結果に改訂(下線:追記、取消線:消去)【評価書 p. 155】</p> <p>予測結果を表 8.1.2-18 に示した。予測濃度は、<u>0.0637</u>~<u>0.0745</u>ppm であった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.1.2-18 1 時間値の予測結果(二酸化窒素)</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="2">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果(ppm)</th> <th>一般車両からの寄与濃度(ppm)</th> <th>発生車両からの寄与濃度(ppm)</th> <th>予測濃度(ppm)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.062*</td> <td>0.0003</td> <td><u>0.0014</u> <del>0.0013</del></td> <td><u>0.0637</u> <del>0.0626</del></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.062*</td> <td>0.0005</td> <td>0.0021</td> <td><u>0.0647</u> <del>0.0646</del></td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.073</td> <td>—</td> <td><u>0.0015</u> <del>0.0014</del></td> <td><u>0.0745</u> <del>0.0744</del></td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.062*</td> <td><u>0.0006</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.0023</u> <del>0.0022</del></td> <td><u>0.0649</u> <del>0.0647</del></td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果		現地調査結果(ppm)	一般車両からの寄与濃度(ppm)	発生車両からの寄与濃度(ppm)	予測濃度(ppm)	下藤里②	0.062*	0.0003	<u>0.0014</u> <del>0.0013</del>	<u>0.0637</u> <del>0.0626</del>	源緑輪中	0.062*	0.0005	0.0021	<u>0.0647</u> <del>0.0646</del>	三崎①	0.073	—	<u>0.0015</u> <del>0.0014</del>	<u>0.0745</u> <del>0.0744</del>	三崎②	0.062*	<u>0.0006</u> <del>0.0005</del>	<u>0.0023</u> <del>0.0022</del>	<u>0.0649</u> <del>0.0647</del>
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																											
	現地調査結果(ppm)	一般車両からの寄与濃度(ppm)	発生車両からの寄与濃度(ppm)	予測濃度(ppm)																											
下藤里②	0.062*	0.0003	<u>0.0014</u> <del>0.0013</del>	<u>0.0637</u> <del>0.0626</del>																											
源緑輪中	0.062*	0.0005	0.0021	<u>0.0647</u> <del>0.0646</del>																											
三崎①	0.073	—	<u>0.0015</u> <del>0.0014</del>	<u>0.0745</u> <del>0.0744</del>																											
三崎②	0.062*	<u>0.0006</u> <del>0.0005</del>	<u>0.0023</u> <del>0.0022</del>	<u>0.0649</u> <del>0.0647</del>																											
152	改訂	<p>予測に用いた排出係数について、住民意見に配慮し年式別車種別排出係数を用いて再計算を行い、浮遊粒子状物質の 1 時間値の予測結果(存在及び供用)の記載を改めた。</p> <p>準備書 p. 152 表 8.1.2-19 の 1 時間値の予測結果(浮遊粒子状物質)を、再計算結果に改訂(下線:追記、取消線:消去)【評価書 p. 156】</p> <p>予測結果を表 8.1.2-19 に示した。予測濃度は、<u>0.1206</u>~<u>0.1290</u>mg/m<sup>3</sup> であった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.1.2-19 1 時間値の予測結果(浮遊粒子状物質)</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">予測地点</th> <th colspan="2">バックグラウンド濃度</th> <th colspan="2">予測結果</th> </tr> <tr> <th>現地調査結果(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>一般車両からの寄与濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>発生車両からの寄与濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> <th>予測濃度(mg/m<sup>3</sup>)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里②</td> <td>0.128*</td> <td>0.0001</td> <td><u>0.0005</u> <del>0.0003</del></td> <td><u>0.1286</u> <del>0.1284</del></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>0.128*</td> <td><u>0.0002</u> <del>0.0001</del></td> <td><u>0.0007</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.1289</u> <del>0.1287</del></td> </tr> <tr> <td>三崎①</td> <td>0.120</td> <td>—</td> <td><u>0.0006</u> <del>0.0005</del></td> <td><u>0.1206</u> <del>0.1205</del></td> </tr> <tr> <td>三崎②</td> <td>0.128*</td> <td><u>0.0002</u> <del>0.0001</del></td> <td><u>0.0008</u> <del>0.0006</del></td> <td><u>0.1290</u> <del>0.1287</del></td> </tr> </tbody> </table>	予測地点	バックグラウンド濃度		予測結果		現地調査結果(mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	発生車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	予測濃度(mg/m <sup>3</sup> )	下藤里②	0.128*	0.0001	<u>0.0005</u> <del>0.0003</del>	<u>0.1286</u> <del>0.1284</del>	源緑輪中	0.128*	<u>0.0002</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0007</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1289</u> <del>0.1287</del>	三崎①	0.120	—	<u>0.0006</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1206</u> <del>0.1205</del>	三崎②	0.128*	<u>0.0002</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0008</u> <del>0.0006</del>	<u>0.1290</u> <del>0.1287</del>
予測地点	バックグラウンド濃度			予測結果																											
	現地調査結果(mg/m <sup>3</sup> )	一般車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	発生車両からの寄与濃度(mg/m <sup>3</sup> )	予測濃度(mg/m <sup>3</sup> )																											
下藤里②	0.128*	0.0001	<u>0.0005</u> <del>0.0003</del>	<u>0.1286</u> <del>0.1284</del>																											
源緑輪中	0.128*	<u>0.0002</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0007</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1289</u> <del>0.1287</del>																											
三崎①	0.120	—	<u>0.0006</u> <del>0.0005</del>	<u>0.1206</u> <del>0.1205</del>																											
三崎②	0.128*	<u>0.0002</u> <del>0.0001</del>	<u>0.0008</u> <del>0.0006</del>	<u>0.1290</u> <del>0.1287</del>																											
153	改訂	<p>1.3.1 工事の実施 環境保全措置の検討の記述について、予測結果にあわせて記述を改めた。</p> <p>準備書 p. 153 環境保全措置の検討の記述を、予測結果の改訂に合わせて改訂(下線:改訂)【評価書 p. 157】</p> <p>二酸化窒素の 1 時間値については、最大着地濃度地点における予測値が「二酸化窒素の人の健康影響に係る判定条件等についての答申」における短期暴露の答申値を上回る結果となったが、それ以外の予測地点では下回っていた。しかしながら今回予測を行った 1 時間値の気象条件は一番悪い状態(大気安定度 D、風速 1m/s、風向 SSW)について行ったものであり、現地調査結果では出現していない。この気象条件に近いもので実際に出現している(出現回数 1 回)気象条件(大気安定度 D、風速 1.2m/s、風向 SSW)で予測を行うと、寄与濃度は 0.132ppm、予測濃度は 0.1959ppm となり、<u>答申値を下回る結果となる。</u></p> <p>また、工事用車両からの排出ガスに対する予測結果についても、上記と同様の理由により、二酸化窒素の年平均値について、<u>予測結果が三重県の環境保全目標を上回る結果となった(寄与率 0.2%~0.7%)。二酸化窒素の 1 時間値については、中央公害対策審議会の短期暴露の答申値を下回る結果となった。</u></p> <p>工事機械等からの排出ガスのうち浮遊粒子状物質の年平均値については、<u>環境基準を下回り(寄与率 0.2%~4.5%)、1 時間値についても環境基準を下回る結果となった。</u>工事用車両からの排出ガスに対する予測結果についても、<u>浮遊粒子状物質は年平均値について環境基準を下回り(寄与率 0.1%~0.3%)、1 時間値についても環境基準を下回る結果となった。</u></p>																													

表 5-1 「第 8 章 環境影響評価の結果 1 大気質」に係る変更の概要(4)

頁	区分	変更の概要及び理由
155	改訂	<p>1.3.1 工事の実施における評価について、予測結果の改訂にあわせて記述を判りやすく改めた。</p> <p>準備書 p.155 の評価について、予測結果の改訂にあわせて記述を改めるとともに、判りやすい記述に改訂（下線：改訂 取消線：消去）【評価書 p.159～160】</p> <p>(2) 評価</p> <p>1) 回避・低減に係る評価</p> <p>二酸化窒素、浮遊粒子状物質については、ほとんどの予測地点で、環境影響への寄与率は小さく、より一層の影響の低減のため環境保全措置を講ずることから、事業者の実行可能な範囲内で低減されていると評価する。</p> <p>粉じんについても、散水の他、二酸化窒素等に対する環境保全措置の効果も期待できることから、事業者の実行可能な範囲で低減されると評価する。</p> <p>2) 基準又は目標との整合</p> <p>二酸化窒素の年平均値においては、どの予測地点でも環境基準及び中央公害対策審議会の答申値は満足しているが、現況濃度が三重県の環境保全目標を上回っていた地点で予測結果も上回っており、整合が図られていない。</p> <p>二酸化窒素の 1 時間値については、工事機械等からの寄与濃度を重合した予測濃度では、現地調査では出現していない悪い気象条件（大気安定度 D、風速 1m/s、風向 SSW）の場合については、最大着地濃度地点で答申値を上回り整合が図られないこととなるが、この気象条件に近いもので実際に出現している（出現回数 1 回）気象条件（大気安定度 D、風速 1.2m/s、風向 SSW）では、答申値を下回り、整合が図られることになる。</p> <p>二酸化窒素の 1 時間値のうち、工事車両からの寄与濃度を重合した予測濃度については、どの予測地点でも答申値を下回り、整合が図られている。</p> <p>浮遊粒子状物質については、年平均値及び 1 時間値ともに環境基準を下回っており整合が図られている。</p> <p>降下ばいじんについては基準値はないが、「面整備事業環境影響評価技術マニュアル」（建設省都市局都市計画課、平成 11 年 11 月）の参考値は下回っており整合が図られている。</p>
156	追記	<p>1.3.2 存在及び供用の評価について、予測結果と答申値等との比較の記述を追記し判りやすく改めた。</p> <p>準備書 p.156 の評価について、予測結果と答申値等との比較の記述を追記し判りやすく改訂（下線：追記）【評価書 p.160】</p> <p>1.3.2 存在及び供用</p> <p>(1) 環境保全措置</p> <p>1) 環境保全措置の検討</p> <p>予測結果から、作業機械等からの排出ガスのうち二酸化窒素の年平均値について、環境基準、中央公害対策審議会の答申値は下回るが、三重県の環境保全目標値については現況濃度（バックグラウンド濃度）が既に環境保全目標を上回っているため、予測結果も上回ることとなり（寄与率は 0.3%～14.2%）、影響が懸念される。二酸化窒素の 1 時間値については、「二酸化窒素の人の健康影響に係る判定条件等についての答申」における短期暴露の答申値を下回っていた。</p> <p>また、発生車両からの排出ガスに対する予測結果についても、上記と同様の理由により二酸化窒素の年平均値について、予測結果が三重県の環境保全目標を上回る結果となった（寄与率 0.1%～0.6%）。二酸化窒素の 1 時間値については、中央公害対策審議会の短期暴露の答申値を下回る結果となった。</p> <p>作業機械等からの排出ガスのうち浮遊粒子状物質の年平均値については、環境基準を下回り（寄与率 0.1%～3.1%）、1 時間値についても環境基準を下回る結果となった。発生車両からの排出ガスに対する予測結果についても、浮遊粒子状物質の年平均値については、環境基準を下回り（寄与率 0.1%未満）、1 時間値についても環境基準を下回る結果となった。</p> <p>作業機械等の稼動に伴い発生する粉じん等について、降下ばいじんの予測結果は、「面整備事業環境影響評価技術マニュアル」（建設省都市局都市計画課、平成 11 年 11 月）の参考値を下回り（寄与量 0.024t/km<sup>2</sup>/月～2.054t/km<sup>2</sup>/月）、発生車両の走行に伴い発生する粉じん等についても、降下ばいじんの予測結果は同マニュアルの参考値を下回る（寄与量 0.015t/km<sup>2</sup>/月～4.836t/km<sup>2</sup>/月）結果となった。</p> <p>以上のことを考慮して、より一層の低減を図るため、環境保全措置を実施する。ここでは、懸念される影響に対して、複数の環境保全措置等の比較検討、実施可能なより良い技術が取り入れられているかどうかの検討等により、事業者の実行可能な範囲内で環境影響ができる限り回避・低減されているかを検討した。表 8.1.3-4 に検討した環境保全措置を示す。</p>

表 5-1 「第 8 章 環境影響評価の結果 1 大気質」に係る変更の概要(5)

頁	区分	変更の概要及び理由
158	改訂	<p>1.4 事後調査 事後調査を行うこととした理由及び手法についての記述を判りやすく改めた。</p> <p>準備書 p. 158 表 8.1.4-1 事後調査の項目及び手法等の記述を判りやすく改訂（下線：改訂）【評価書 p. 163】</p> <p>1. 行うこととした理由                      予測結果は、科学的知見に基づいた一般的な手法によるものであり、不確実性の程度は小さいと考えるが、<u>生活環境に及ぼす影響に着目し、基準値等との整合が図られていない地点や、整合が図られていても周辺の生活環境に及ぼす影響が大きいと考えた地点については、より一層の負荷の低減を図る必要があると考えるため、事後調査を実施する。</u></p> <p>2. 手法                      調査計画は、以下の表に示すとおりとする。なお、<u>既往の調査結果も活用するため、現況調査結果とも比較できる地点を事後調査地点として設定した。</u></p>

「第 8 章 環境影響評価の結果 2 騒音」に係る変更の概要を表 5-2 示す。

表 5-2 「第 8 章 環境影響評価の結果 2 騒音」に係る変更の概要

頁	区分	変更の概要及び理由										
173	改訂	<p>2.2.2 存在及び供用の作業騒音の予測結果について、記載を統一するため改めた。</p> <p>準備書 p. 173 表 8.2.2-4 作業騒音予測結果の記載を改訂（下線：改訂）【評価書 p. 178】</p> <p>1) 作業騒音                      スtockヤードで作業する機械等から発生する騒音の予測結果を表 8.2.2-4 及び図 8.2.2-8 に示した。予測結果は、事業実施区域の敷地境界及び各予測地点とも 52dB <u>以下</u>となった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.2.2-4 作業騒音予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>地点名</th> <th>予測結果(dB)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>敷地境界</td> <td>52 <u>以下</u> 52 <del>未満</del></td> </tr> <tr> <td>下藤里②</td> <td>47</td> </tr> <tr> <td>源緑橋</td> <td>43</td> </tr> <tr> <td>鍋田（愛知）</td> <td>39</td> </tr> </tbody> </table>	地点名	予測結果(dB)	敷地境界	52 <u>以下</u> 52 <del>未満</del>	下藤里②	47	源緑橋	43	鍋田（愛知）	39
地点名	予測結果(dB)											
敷地境界	52 <u>以下</u> 52 <del>未満</del>											
下藤里②	47											
源緑橋	43											
鍋田（愛知）	39											



「第8章 環境影響評価の結果 3 振動」に係る変更の概要を表5-3示す。

表5-3 「第8章 環境影響評価の結果 3 振動」に係る変更の概要(1)

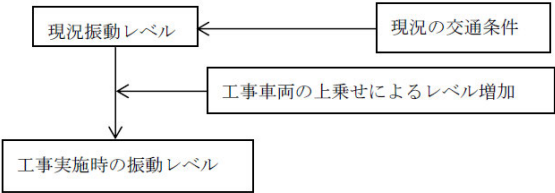
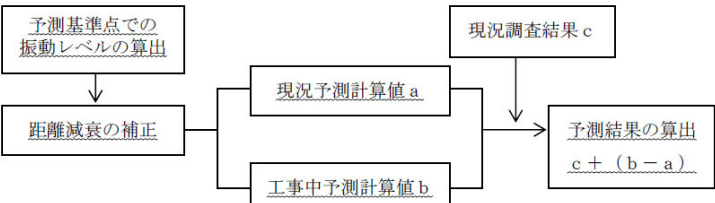
頁	区分	変更の概要及び理由										
188	改訂	<p>建設作業振動に関する予測手法は「面整備事業環境影響評価技術マニュアル」、道路交通振動に関する予測手法は「道路環境影響評価の技術手法」を用いることとしたため、道路交通振動の予測手順の出典の記載を改めた。</p> <p>準備書 p.188 道路交通振動の予測方法の出典に関する記述等を改訂（下線：改訂）【評価書 p.193】 存在及び供用の道路交通振動の予測方法も同様に改訂【評価書 p.198】</p> <p>2) 道路交通振動 工事用車両から発生する振動の予測は、「面整備事業環境影響評価技術マニュアル」（平成11年11月建設省都市局都市計画課）に基づき、図8.3.2-3に示す手順により行った（資料8.3.2.1-3参照）。 なお、工事用車両は図7.3.2-1に示す走行ルート、三重県側からと愛知県側から別々に通るものとし、それぞれ360台/日、700台/日とした。交通量等の予測条件は資料8.3.2.1-4参照。</p>  <p>図8.3.2-3 工事用車両から発生する振動予測手順</p> <p>準備書</p> <p>2) 道路交通振動 工事用車両から発生する振動の予測は、「道路環境影響評価の技術手法」（平成12年11月財団法人道路環境研究所）に基づき、図8.3.2-3に示す手順により行った（資料8.3.2.1-3参照）。なお、工事用車両は図8.3.2-1に示す走行ルート、三重県側からと愛知県側から別々に通るものとし、それぞれ360台/日（片道）、700台/日（片道）とした。交通量等の予測条件は資料8.3.2.1-4参照。</p>  <p>図8.3.2-3 工事用車両から発生する振動予測手順</p> <p>評価書 (p.193)</p>										
189	改訂	<p>建設作業振動の予測結果（工事の実施）について、記載を統一するため改めた。</p> <p>準備書 p.189 表8.3.2-1 建設作業振動の予測結果の記載を改訂（下線：改訂 取消線：消去）【評価書 p.194】</p> <p>表8.3.2-1 各地点における建設作業振動の予測結果</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>地点名</th> <th>予測結果(dB)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>敷地境界</td> <td>50<del>dB</del>以下</td> </tr> <tr> <td>下藤里①</td> <td>33</td> </tr> <tr> <td>源緑橋</td> <td>30未滿</td> </tr> <tr> <td>鍋田（愛知）</td> <td>39</td> </tr> </tbody> </table>	地点名	予測結果(dB)	敷地境界	50 <del>dB</del> 以下	下藤里①	33	源緑橋	30未滿	鍋田（愛知）	39
地点名	予測結果(dB)											
敷地境界	50 <del>dB</del> 以下											
下藤里①	33											
源緑橋	30未滿											
鍋田（愛知）	39											

表 5-3 「第 8 章 環境影響評価の結果 3 振動」に係る変更の概要(2)

頁	区分	変更の概要及び理由																													
189	改訂	<p>予測手法の見直しにより、道路交通振動予測（工事の実施）の再計算を行い、記載を改めた。</p> <p>準備書 p.189 表 8.3.2-3 道路交通振動（工事の実施）の予測結果を、再計算結果に改訂（下線：改訂 取消線：消去）【評価書 p.194】</p> <p>工事用車両の走行時における振動レベルの予測結果は、表 8.3.2-3 に示した。この表には、現地調査結果及びそれに対する予測結果の増加分も合わせて示した。</p> <p><u>各地点における予測結果は 35～51dB、負荷量は 4～8dB であった。となった。</u></p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.3.2-3 道路交通振動（工事中）の予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>地点名</th> <th>現地調査結果(dB)</th> <th>予測結果(dB)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里③</td> <td>31</td> <td><u>35(+4)</u> <del>43(+12)</del></td> </tr> <tr> <td>鍋田川</td> <td>35</td> <td><u>39(+4)</u> <del>40(+5)</del></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>33</td> <td><u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del></td> </tr> <tr> <td>三崎</td> <td>33*</td> <td><u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del></td> </tr> <tr> <td>県道 103 号(愛知)</td> <td>47</td> <td><u>51(+4)</u> <del>52(+5)</del></td> </tr> </tbody> </table>	地点名	現地調査結果(dB)	予測結果(dB)	下藤里③	31	<u>35(+4)</u> <del>43(+12)</del>	鍋田川	35	<u>39(+4)</u> <del>40(+5)</del>	源緑輪中	33	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>	三崎	33*	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>	県道 103 号(愛知)	47	<u>51(+4)</u> <del>52(+5)</del>											
地点名	現地調査結果(dB)	予測結果(dB)																													
下藤里③	31	<u>35(+4)</u> <del>43(+12)</del>																													
鍋田川	35	<u>39(+4)</u> <del>40(+5)</del>																													
源緑輪中	33	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>																													
三崎	33*	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>																													
県道 103 号(愛知)	47	<u>51(+4)</u> <del>52(+5)</del>																													
194	改訂	<p>作業振動の予測結果(存在及び供用)について、記載を統一するため改めた。</p> <p>準備書 p.194 表 8.3.2-4 作業振動の予測結果の記載を改訂（下線：改訂 取消線：消去）【評価書 p.199】</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.3.2-4 各地点における作業振動の予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>地点名</th> <th>予測結果(dB)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>敷地境界</td> <td>35 未満</td> </tr> <tr> <td>下藤里①</td> <td>30 未満</td> </tr> <tr> <td>源緑橋</td> <td>30 未満</td> </tr> <tr> <td>鍋田（愛知）</td> <td>30 未満</td> </tr> </tbody> </table>	地点名	予測結果(dB)	敷地境界	35 未満	下藤里①	30 未満	源緑橋	30 未満	鍋田（愛知）	30 未満																			
地点名	予測結果(dB)																														
敷地境界	35 未満																														
下藤里①	30 未満																														
源緑橋	30 未満																														
鍋田（愛知）	30 未満																														
194	改訂	<p>予測手法の見直しにより、道路交通振動予測（存在及び供用）の再計算を行い、記載を改めた。</p> <p>準備書 p.194 表 8.3.2-6 道路交通振動（存在及び供用）の予測結果を、再計算結果に改訂（下線：改訂）【評価書 p.199】</p> <p><b>2) 道路交通振動</b></p> <p>発生車両の走行による振動の予測結果を表 8.3.2-6 に示した。予測の結果は <u>33～41dB</u> であり、負荷量は <u>3～9dB</u> であった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.3.2-6 道路交通振動（存在及び供用）予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">地点名</th> <th colspan="2">現地調査結果(dB)</th> <th colspan="2">予測結果(dB)</th> </tr> <tr> <th>平日</th> <th>休日</th> <th>平日</th> <th>休日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里③</td> <td>31</td> <td><u>30 未満</u> <del>36 未満</del></td> <td><u>35(+4)</u> <del>43(+12)</del></td> <td><u>33(+3)</u> <del>51(+21)</del></td> </tr> <tr> <td>鍋田川</td> <td>35</td> <td>31</td> <td><u>38(+3)</u> <del>40(+5)</del></td> <td><u>37(+6)</u> <del>40(+10)</del></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>33</td> <td>30</td> <td><u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del></td> <td><u>39(+9)</u> <del>48(+18)</del></td> </tr> <tr> <td>三崎</td> <td>33*</td> <td>30*</td> <td><u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del></td> <td><u>39(+9)</u> <del>48(+18)</del></td> </tr> </tbody> </table>	地点名	現地調査結果(dB)		予測結果(dB)		平日	休日	平日	休日	下藤里③	31	<u>30 未満</u> <del>36 未満</del>	<u>35(+4)</u> <del>43(+12)</del>	<u>33(+3)</u> <del>51(+21)</del>	鍋田川	35	31	<u>38(+3)</u> <del>40(+5)</del>	<u>37(+6)</u> <del>40(+10)</del>	源緑輪中	33	30	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>	<u>39(+9)</u> <del>48(+18)</del>	三崎	33*	30*	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>	<u>39(+9)</u> <del>48(+18)</del>
地点名	現地調査結果(dB)			予測結果(dB)																											
	平日	休日	平日	休日																											
下藤里③	31	<u>30 未満</u> <del>36 未満</del>	<u>35(+4)</u> <del>43(+12)</del>	<u>33(+3)</u> <del>51(+21)</del>																											
鍋田川	35	31	<u>38(+3)</u> <del>40(+5)</del>	<u>37(+6)</u> <del>40(+10)</del>																											
源緑輪中	33	30	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>	<u>39(+9)</u> <del>48(+18)</del>																											
三崎	33*	30*	<u>41(+8)</u> <del>46(+13)</del>	<u>39(+9)</u> <del>48(+18)</del>																											

表 5-3 「第 8 章 環境影響評価の結果 3 振動」に係る変更の概要 (3)

頁	区分	変更の概要及び理由																							
196	改訂	<p>予測手法の見直しにより、道路交通振動予測（工事の実施）の再計算を行ったため、あわせて通行ルートの分散化を仮定した場合の予測結果についても、記載を改めた。</p> <p>準備書 p. 196 表 8. 3. 3-1 工事中の通行ルートを分散化した場合の予測結果について改訂（下線：改訂 取消線：消去）【評価書 p. 201】</p> <p>この場合には表 8. 3. 3-1 のようになる。この結果 4～8 dB であった負荷量は、2～6dB となる。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8. 3. 3-1 工事中の通行ルートを分散化した場合の 道路交通振動（工事中）の予測結果</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th>地点名</th> <th>現地調査結果 (dB)</th> <th>予測結果 (dB)</th> <th>(参考)分散化しない場合の予測結果 (dB)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里③</td> <td>31</td> <td><del>33(+2)</del> <u>41(+10)</u></td> <td><u>35(+4)</u></td> </tr> <tr> <td>鍋田川</td> <td>35</td> <td><del>37(+2)</del> <u>39(+4)</u></td> <td><u>39(+4)</u></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>33</td> <td><del>39(+6)</del> <u>43(+10)</u></td> <td><u>41(+8)</u></td> </tr> <tr> <td>三崎</td> <td>33*</td> <td><del>39(+6)</del> <u>43(+10)</u></td> <td><u>41(+8)</u></td> </tr> </tbody> </table>	地点名	現地調査結果 (dB)	予測結果 (dB)	(参考)分散化しない場合の予測結果 (dB)	下藤里③	31	<del>33(+2)</del> <u>41(+10)</u>	<u>35(+4)</u>	鍋田川	35	<del>37(+2)</del> <u>39(+4)</u>	<u>39(+4)</u>	源緑輪中	33	<del>39(+6)</del> <u>43(+10)</u>	<u>41(+8)</u>	三崎	33*	<del>39(+6)</del> <u>43(+10)</u>	<u>41(+8)</u>			
地点名	現地調査結果 (dB)	予測結果 (dB)	(参考)分散化しない場合の予測結果 (dB)																						
下藤里③	31	<del>33(+2)</del> <u>41(+10)</u>	<u>35(+4)</u>																						
鍋田川	35	<del>37(+2)</del> <u>39(+4)</u>	<u>39(+4)</u>																						
源緑輪中	33	<del>39(+6)</del> <u>43(+10)</u>	<u>41(+8)</u>																						
三崎	33*	<del>39(+6)</del> <u>43(+10)</u>	<u>41(+8)</u>																						
196	改訂	<p>予測手法の見直しにより、道路交通振動予測（存在及び供用）の再計算を行ったため、あわせてストックヤード利用車両の走行ルートの分散化を仮定した場合の予測結果についても、記載を改めた。</p> <p>準備書 p. 196 表 8. 3. 3-2 スtockヤード利用車両の走行ルートを分散化した場合の道路交通振動（存在及び供用）予測結果を、見直した予測手法に基づいて算出し、記載を改訂（下線：追記・改訂 取消線：消去）【評価書 p. 202】</p> <p>なお、騒音の項目では、供用後のストックヤードへの搬出入車両について、環境保全措置として走行ルートの分散について検討しており、振動についても同様に供用時のストックヤード利用車両の走行ルートを分散した場合には、表 8. 3. 3-2 になる。この結果、平日で 3～8dB であった負荷量は 3～7dB となる</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8. 3. 3-2 スtockヤード利用車両の走行ルートを分散化した場合の 道路交通振動（存在及び供用）予測結果</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th rowspan="2">地点名</th> <th>現地調査結果 (dB)</th> <th>予測結果 (dB)</th> <th>(参考)分散化しない場合の予測結果 (dB)</th> </tr> <tr> <th>平日</th> <th>平日</th> <th>平日</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>下藤里③</td> <td>31</td> <td><del>34(+3)</del> <u>42(+11)</u></td> <td><u>35(+4)</u></td> </tr> <tr> <td>鍋田川</td> <td>35</td> <td><del>38(+3)</del> <u>42(+12)</u></td> <td><u>38(+3)</u></td> </tr> <tr> <td>源緑輪中</td> <td>33</td> <td><del>40(+7)</del> <u>45(+12)</u></td> <td><u>41(+8)</u></td> </tr> <tr> <td>三崎</td> <td>33*</td> <td><del>40(+7)</del> <u>45(+12)</u></td> <td><u>41(+8)</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1. ( ) は現地調査結果に対する増加分。                  2. 現地調査結果は平日の L<sub>10</sub> の最大値を用いた。                  3. 予測結果は L<sub>10</sub> の昼間 (8～19 時) の時間最大値。                  4. 三崎では近傍の道路交通振動測定地点である源緑輪中の現地調査結果(*)を用いた。                  参考) 1. 下藤里③、鍋田川、源緑輪中、三崎については、振動規制法に基づく道路交通振動の要請限度の規制がなされていない地域である。なお、第 1 種地域 (良好な住居の環境を保全するため特に静穏の保持を必要とする区域、及び住居の用に供されているため静穏の保持を必要とする区域) の昼間の要請限度は 65dB、                  2. 県道 103 号 (愛知) については愛知県第三種区域に設定されている。昼間の要請限度は 70dB。</p>	地点名	現地調査結果 (dB)	予測結果 (dB)	(参考)分散化しない場合の予測結果 (dB)	平日	平日	平日	下藤里③	31	<del>34(+3)</del> <u>42(+11)</u>	<u>35(+4)</u>	鍋田川	35	<del>38(+3)</del> <u>42(+12)</u>	<u>38(+3)</u>	源緑輪中	33	<del>40(+7)</del> <u>45(+12)</u>	<u>41(+8)</u>	三崎	33*	<del>40(+7)</del> <u>45(+12)</u>	<u>41(+8)</u>
地点名	現地調査結果 (dB)	予測結果 (dB)		(参考)分散化しない場合の予測結果 (dB)																					
	平日	平日	平日																						
下藤里③	31	<del>34(+3)</del> <u>42(+11)</u>	<u>35(+4)</u>																						
鍋田川	35	<del>38(+3)</del> <u>42(+12)</u>	<u>38(+3)</u>																						
源緑輪中	33	<del>40(+7)</del> <u>45(+12)</u>	<u>41(+8)</u>																						
三崎	33*	<del>40(+7)</del> <u>45(+12)</u>	<u>41(+8)</u>																						

「第8章 環境影響評価の結果 4 水質」に係る変更の概要を表5-4示す。

表5-4 「第8章 環境影響評価の結果 4 水質」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由																
207	改訂	<p>4.2.1 三重県知事意見を踏まえ、予測方法の一部及び予測条件の一部を見直して再度予測を行ったため、水の濁りの予測結果について、予測条件（工事の実施）の沈砂設備の条件で必要となる沈砂設備の条件及び予測結果を改めた。</p> <p>準備書 p. 207 表 8.4.2-1 想定した主な予測条件と周辺水路における予測結果、及び表 8.4.2-2 公共用水域における予測結果の記載について、主な予測条件を追記し、これに基づく予測結果を改訂（下線：追記・改訂）【評価書 p. 212】</p> <p>(5) 予測結果</p> <p>降雨時に造成面から発生する濁水の SS 濃度の予測結果を表 8.4.2-1、表 8.4.2-2 に示した（資料 8.4.2.1-5 参照）。この結果から、<u>想定した予測条件では</u>、日常的な降雨量に対しては降雨時の現況調査結果と同程度又は下回る結果となった。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.4.2-1 想定した主な予測条件と周辺水路における予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>主な予測条件</th> <th>予測地点</th> <th>SS 濃度 (mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>(ストックヤード) 床面積 16m<sup>2</sup> の沈砂池 12 ケ (わんぱく原っぱ (東側))</td> <td>ストックヤード 西水路</td> <td style="text-align: center;"><u>153</u></td> </tr> <tr> <td>床面積 16m<sup>2</sup> の沈砂池 9 ケ (わんぱく原っぱ (西側)) 床面積 16m<sup>2</sup> の沈砂池 3 ケ (デイキャンプ場)</td> <td>排水機場水路</td> <td style="text-align: center;"><u>185</u></td> </tr> <tr> <td>床面積 16m<sup>2</sup> の沈砂池 6 ケ (冒険広場) 床面積 16m<sup>2</sup> の沈砂池 3 ケ *降雨強度 37mm/h</td> <td>参考：東水路</td> <td style="text-align: center;"><u>129</u></td> </tr> </tbody> </table> <p style="font-size: small;">注) 1. 排水機場水路では、東水路と西水路が合流するため、完全混合式により予測した。 2. 東水路における降雨後の現況調査結果の SS 濃度の最大値は、250mg/L である。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.4.2-2 公共用水域における予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>予測地点</th> <th>SS 濃度 (mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>木曾川① (公共用水域予測地点)</td> <td style="text-align: center;"><u>57</u></td> </tr> </tbody> </table> <p style="font-size: small;">注) 1. 公共用水域予測地点における SS 濃度は、排水機場水路の予測結果を用いて、拡散式により算出した。 2. 木曾川における降雨後の現況調査結果の SS 濃度の最大値は、290mg/L (木曾川②) である。</p>	主な予測条件	予測地点	SS 濃度 (mg/L)	(ストックヤード) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 12 ケ (わんぱく原っぱ (東側))	ストックヤード 西水路	<u>153</u>	床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 9 ケ (わんぱく原っぱ (西側)) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 3 ケ (デイキャンプ場)	排水機場水路	<u>185</u>	床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 6 ケ (冒険広場) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 3 ケ *降雨強度 37mm/h	参考：東水路	<u>129</u>	予測地点	SS 濃度 (mg/L)	木曾川① (公共用水域予測地点)	<u>57</u>
主な予測条件	予測地点	SS 濃度 (mg/L)																
(ストックヤード) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 12 ケ (わんぱく原っぱ (東側))	ストックヤード 西水路	<u>153</u>																
床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 9 ケ (わんぱく原っぱ (西側)) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 3 ケ (デイキャンプ場)	排水機場水路	<u>185</u>																
床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 6 ケ (冒険広場) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 3 ケ *降雨強度 37mm/h	参考：東水路	<u>129</u>																
予測地点	SS 濃度 (mg/L)																	
木曾川① (公共用水域予測地点)	<u>57</u>																	

表 5-4 「第 8 章 環境影響評価の結果 4 水質」に係る変更の概要 (2)

頁	区分	変更の概要及び理由												
208	改訂	<p>4.2.2 三重県知事意見を踏まえ、予測方法の一部及び予測条件の一部を見直して再度予測を行ったため、水の濁りの予測結果について、予測条件（存在及び供用）の沈砂設備の条件で必要となる沈砂設備の条件及び予測結果を改めた。</p> <p>準備書 p. 208 表 8.4.2-3 想定した主な予測条件と周辺水路における予測結果及び、表 8.4.2-4 公共用水域における予測結果の記載について、予測条件を改訂し、これに基づく予測結果を改訂（下線：改訂）【評価書 p. 213】</p> <p>(5) 予測結果</p> <p>降雨時にストックヤードから発生する濁水の SS 濃度の予測結果を表 8.4.2-3、表 8.4.2-4 に示した（資料 8.4.2.2-2 参照）。この結果から、<u>想定した予測条件では、日常的な降雨量に対しては降雨時の現況調査結果を下回る結果となった。</u></p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.4.2-3 想定した主な予測条件と周辺水路における予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>主な予測条件</th> <th>予測地点</th> <th>SS 濃度 (mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">(ストックヤード) 床面積 16m<sup>2</sup> の沈砂池 12ヶ * 降雨強度 37mm/h</td> <td>ストックヤード西水路</td> <td><u>153</u></td> </tr> <tr> <td>排水機場水路</td> <td><u>153</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1. 排水機場水路では、東水路と西水路が合流するため、完全混合式により予測した。 2. 東水路における降雨後の現況調査結果の SS 濃度の最大値は、250mg/L である。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.4.2-4 公共用水域における予測結果</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>予測地点</th> <th>SS 濃度 (mg/L)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>木曾川①（公共用水域予測地点）</td> <td><u>47</u></td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1. 公共用水域予測地点における SS 濃度は、排水機場の予測結果を用いて、公共用水域における拡散式により算出した。 2. 木曾川における降雨後の現況調査結果の SS 濃度の最大値は、290mg/L（木曾川②）である。</p>	主な予測条件	予測地点	SS 濃度 (mg/L)	(ストックヤード) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 12ヶ * 降雨強度 37mm/h	ストックヤード西水路	<u>153</u>	排水機場水路	<u>153</u>	予測地点	SS 濃度 (mg/L)	木曾川①（公共用水域予測地点）	<u>47</u>
主な予測条件	予測地点	SS 濃度 (mg/L)												
(ストックヤード) 床面積 16m <sup>2</sup> の沈砂池 12ヶ * 降雨強度 37mm/h	ストックヤード西水路	<u>153</u>												
	排水機場水路	<u>153</u>												
予測地点	SS 濃度 (mg/L)													
木曾川①（公共用水域予測地点）	<u>47</u>													
209	追記	<p>4.3.1 評価 工事の実施における環境保全措置の検討について、わかりやすい記述に改訂した。</p> <p>準備書 p. 209 環境保全措置の検討の記述について、判りやすい記述となるよう追記（下線：追記）【評価書 p. 214】</p> <p>1) 環境保全措置の検討</p> <p>降雨時に造成面からの発生が想定される濁水による水質汚濁については、<u>現状では搬入される土砂が未定であるため、木曾岬干拓地の土砂を用いて予測を行った。その結果、参考予測地点を含む各予測地点で降雨時の現況調査結果と同程度または下回る結果となった。</u></p> <p><u>実際の濁水の発生は、搬入される土砂成分等の影響を受ける。そのため、持ち込まれる土砂について事前に試験を実施し、沈砂池から外周水路へ排出される排出水の SS 濃度が降雨時の現況調査結果 (250mg/L) を超えないよう、裸地となる面積、降雨強度等も考慮して適切に沈砂池を設置する。また、濁水の状況を把握するためのモニタリングを、適宜、実施する。</u></p>												

第8章 環境影響評価の結果 5 地形及び地質」に係る変更の概要を表 5-5 に示す。

表 5-5 「第8章 環境影響評価の結果 5 地形及び地質」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由
225	追記	<p>1) 側方流動量の求め方について、その根拠を示す部分を追記した。</p> <p>準備書 p. 225 側方流動量の求め方について、その根拠を示す部分を追記(下線:追記)【評価書 p. 230】</p> <p>1) 側方流動            スtockヤード及びわんぱく原っぱの盛土によって生じる沈下量及び側方変位量(水平変位量)を表 8.5.2-1～表 8.5.2-2 にまとめて示す。なお、側方変位量(水平変位量)は資料編 p127 の図 8.5.2.1-1(8)より求めた。</p>

「第8章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要を表5-6に示す。

表5-6 「第8章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(1)

頁	区分	変更の概要及び理由
230	追記	<p>調査項目ごとに目的等を明示することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p230 「6.1.1 哺乳類(1) 調査項目」に文章を追記(評価書 p. 235)</p> <p><b>2) カヤネズミ生息環境</b>            平成14年度に実施した哺乳類相調査において、愛知県レッドデータブックの絶滅危惧II類に該当するカヤネズミの球巣が確認された。しかし、確認地点数が8地点であったため、干拓地内におけるカヤネズミの生息状況や生息環境の把握が充分でないと考えられた。一般に、カヤネズミはイネ科の高茎草本に営巣することが知られているが、干拓地内にはイネ科の高茎草本としてヤマアワがチガヤに混じって広く生育している。近年の乾燥化に伴いヤマアワがセイタカアワダチソウに置き換わりつつあると考えられ、その生育面積が減少しているものと推定される。そこで、セイタカアワダチソウの生育面積の拡大に伴うカヤネズミの生息環境、特に、営巣環境に対する影響を考察するため、カヤネズミ生息環境調査を平成15年度に実施した。</p>
230	追記	<p>重要な種の調査に関し、コドラートを設定した根拠等を明示することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p230 「6.1.1 哺乳類(2) 調査範囲及び調査経路・地点」に文章を追記(評価書 p. 236)</p> <p><b>2) カヤネズミ生息環境</b>            コドラートの設定位置図を図8.6.1-2に示した。コドラートは、干拓地内のヤマアワとセイタカアワダチソウの生育状況の異なる合計10区画(A~J)に、50m×50mで設定した。</p>
231	追記	<p>調査方法をより正確に記述することとし、以下のとおり文章を改訂した。</p> <p>準備書 p231 「6.1.1 哺乳類(4) 調査方法」に文章を追記(評価書 p. 236)</p> <p><b>2) カヤネズミ生息環境</b>            設定したコドラート内を踏査し、球巣の分布状況、新旧の別及び個数並びに植物の植被率等を記録した。</p>

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (2)

頁	区分 追記	変更の概要及び理由																																																																																																																												
-		<p>調査結果をより詳細に記述することとし、以下の文章、表及び図を追記した。</p> <p>準備書 p236 「6.1.1 哺乳類(5) 調査結果」に文章、表及び図を追記 (評価書 p.241)</p> <p>2) カヤネズミの生息環境</p> <p>平成 15 年度の調査結果を表 8.6.1-5 に示した。カヤネズミの球巣は 10 箇所のコードラートのうち 8 箇所で確認され、確認された球巣は、25 個が古巣、7 個が新巣、5 個が新旧不明であった。巣を架けていた植物は全てヤマアワであった。また、巣材にもヤマアワを使用しており、他のイネ科植物も若干含まれていた。</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-5 カヤネズミの球巣確認状況</b></p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th rowspan="3">コードラート 設定地点</th> <th colspan="3">確認された巣の数</th> <th colspan="5">構成する植物の植被率 (%)</th> </tr> <tr> <th colspan="3">果の新旧</th> <th colspan="3">イネ科</th> <th>キク科</th> <th>イグサ科</th> </tr> <tr> <th>古 巣</th> <th>新 巣</th> <th>不 明</th> <th>チガヤ・ ヤマアワ<sup>1)</sup></th> <th>ススキ</th> <th>ヨシ</th> <th>セイタカア ワダチソウ</th> <th>イグサ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>A</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>70</td><td>-</td><td>-</td><td>30</td><td>-</td></tr> <tr><td>B<sup>2)</sup></td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>80</td><td>-</td><td>-</td><td>20</td><td>-</td></tr> <tr><td>C<sup>2)</sup></td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>90</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>10</td></tr> <tr><td>D</td><td>7</td><td>3</td><td>4</td><td>80</td><td>-</td><td>20</td><td>-</td><td>-</td></tr> <tr><td>E</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>70</td><td>-</td><td>-</td><td>30</td><td>-</td></tr> <tr><td>F</td><td>2</td><td>2</td><td>0</td><td>70</td><td>-</td><td>-</td><td>30</td><td>-</td></tr> <tr><td>G</td><td>1</td><td>1</td><td>0</td><td>60</td><td>10</td><td>-</td><td>30</td><td>-</td></tr> <tr><td>H</td><td>6</td><td>0</td><td>0</td><td>50</td><td>-</td><td>-</td><td>50</td><td>-</td></tr> <tr><td>I</td><td>5</td><td>0</td><td>0</td><td>60</td><td>-</td><td>-</td><td>40</td><td>-</td></tr> <tr><td>J</td><td>3</td><td>1</td><td>0</td><td>60</td><td>10</td><td>-</td><td>30</td><td>-</td></tr> <tr><td>合計</td><td>25</td><td>7</td><td>5</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td></tr> </tbody> </table> <p>*1) コドラート内には様々な植物が混生しており、特にチガヤとヤマアワは仕分けが困難なため、まとめて記載した。 *2) コドラート B 及び C においては、古巣も含め球巣が一つも確認されなかった。コードラート C は、隣接するコードラート D と植生が類似しているにもかかわらず球巣が確認されていないことから、植生以外に営巣しない理由があると推定される。同様に、コードラート B もコードラート C、D と植生が類似しており、植生以外の要因により営巣が阻害されているものと推定される。</p> <p>セイタカアワダチソウの植被率と球巣 (新巣) の数との関係を図 8.6.1-4 に示した。この図からわかるように、セイタカアワダチソウと新巣の数との間には負の相関がみられ、植被率が 40% を超えると新巣はみられなくなるという関係が得られた。現状において、セイタカアワダチソウの占める割合が高い場所 (例えば、コードラート H, I) でも古巣はある程度確認されており、これはセイタカアワダチソウの増加とともに、営巣適地でなくなってしまうことのあらわれであると推定される。</p> <div style="text-align: center;"> </div> <p>* ) 植生以外の要因で球巣が確認されなかったと推定される 2 箇所のコードラート (B, C) を除いて解析を行った</p> <p style="text-align: center;"><b>図 8.6.1-4 セイタカアワダチソウの植被率と新巣の数との関係</b></p> <p style="text-align: right;">* t 検定結果 : 95%信頼率で相関が認められる。</p> <p>平成 14 年度調査、平成 15 年度調査を通して、確認されたカヤネズミの球巣の確認状況を図 8.6.1-5 に示した。本種は、餌となる種子やパツタ類が豊富で、造巣が可能となる高茎のイネ科草本を含む場所に生息すると言われている。干拓地内にはイネ科の高茎草本を含むチガヤ群落やススキ・ハチジョウススキ群落等が一面に広がっていることから、干拓地内全域に生息していると考えられるが、セイタカアワダチソウ群落の占める割合も高く、乾燥化に伴い、その生息環境は狭小化しつつあるものと考えられる。</p>	コードラート 設定地点	確認された巣の数			構成する植物の植被率 (%)					果の新旧			イネ科			キク科	イグサ科	古 巣	新 巣	不 明	チガヤ・ ヤマアワ <sup>1)</sup>	ススキ	ヨシ	セイタカア ワダチソウ	イグサ	A	0	0	1	70	-	-	30	-	B <sup>2)</sup>	0	0	0	80	-	-	20	-	C <sup>2)</sup>	0	0	0	90	-	-	-	10	D	7	3	4	80	-	20	-	-	E	1	0	0	70	-	-	30	-	F	2	2	0	70	-	-	30	-	G	1	1	0	60	10	-	30	-	H	6	0	0	50	-	-	50	-	I	5	0	0	60	-	-	40	-	J	3	1	0	60	10	-	30	-	合計	25	7	5	-	-	-	-	-
コードラート 設定地点	確認された巣の数			構成する植物の植被率 (%)																																																																																																																										
	果の新旧			イネ科			キク科	イグサ科																																																																																																																						
	古 巣	新 巣	不 明	チガヤ・ ヤマアワ <sup>1)</sup>	ススキ	ヨシ	セイタカア ワダチソウ	イグサ																																																																																																																						
A	0	0	1	70	-	-	30	-																																																																																																																						
B <sup>2)</sup>	0	0	0	80	-	-	20	-																																																																																																																						
C <sup>2)</sup>	0	0	0	90	-	-	-	10																																																																																																																						
D	7	3	4	80	-	20	-	-																																																																																																																						
E	1	0	0	70	-	-	30	-																																																																																																																						
F	2	2	0	70	-	-	30	-																																																																																																																						
G	1	1	0	60	10	-	30	-																																																																																																																						
H	6	0	0	50	-	-	50	-																																																																																																																						
I	5	0	0	60	-	-	40	-																																																																																																																						
J	3	1	0	60	10	-	30	-																																																																																																																						
合計	25	7	5	-	-	-	-	-																																																																																																																						



表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (3)

頁	区分	変更の概要及び理由
-	追記	<p>オオヨシキリは重要な種でもあることから、「6 陸生動物」でも取り扱うこととし、以下の文章を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (1) 調査項目」に文章を追記 (評価書 p.244)</p> <p><b>1) オオヨシキリの繁殖状況調査</b>                      平成 14 年度に実施した鳥類相調査において三重県レッドデータブックの希少種に該当するオオヨシキリが確認された。一般に、オオヨシキリはヨシ原に営巣することが知られているが、干拓地内外にはヨシ原が点在する程度であり、場所によってその生育状況は異なっている。そこで、干拓地内外におけるヨシの生育状況とオオヨシキリの繁殖状況との関係を調査し、干拓地内におけるオオヨシキリの繁殖状況を把握するため、オオヨシキリの繁殖状況調査を平成 15 年度に実施した。</p>
238	追記	<p>調査項目ごとに目的等を明示することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p238 「6.1.2 鳥類 (1) 調査項目」に文章を追記 (評価書 p.244)</p> <p><b>3) 猛禽類 (行動圏、ねぐら、チュウヒ営巣地、チュウヒ餌資源)</b>                      干拓地内に生息する猛禽類のうち、環境省レッドデータブックの絶滅危惧Ⅱ類等に該当するチュウヒの繁殖が確認されている。そこで、チュウヒを主体とした猛禽類の行動圏を把握するため、平成 14 年度から平成 16 年度に行動圏調査を実施した。また、干拓地内に生息する猛禽類のねぐらの利用状況、チュウヒの営巣地の特定、繁殖状況の把握及び営巣地周辺の植生等を把握するため、平成 14 年度から平成 15 年度にねぐら調査、チュウヒ営巣地調査を実施した。さらに、チュウヒの餌生物を把握するため、平成 15 年度にチュウヒ餌資源調査を実施した。</p>
238	追記	<p>調査項目ごとに調査地点等を記述することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p238 「6.1.2 鳥類 (2) 調査範囲及び調査経路・地点」に文章を追記 (評価書 p.244)</p> <p><b>1) 鳥類相 (鳥類全般、水鳥)</b>                      鳥類相 (鳥類全般、水鳥) の調査地点及び調査経路を図 8.6.1-6(1)～(3)に示した。</p>
-	追記	<p>オオヨシキリについては、「6 陸生動物」でも取り扱うこととしたため、以下の文章を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (2) 調査範囲及び調査経路・地点」に文章を追記 (評価書 p.244)</p> <p><b>2) オオヨシキリの繁殖状況調査</b>                      オオヨシキリの繁殖状況調査の調査範囲及びコドラートの設定地点を図 8.6.1-7 に示した。コドラートは、ヨシの生育状況とオオヨシキリの繁殖状況との関係を見るため、干拓地内外のヨシの生育状況が異なる合計 6 区画に、50m×50m で設定した。</p>
238	追記	<p>調査項目ごとに調査地点等を記述することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p238 「6.1.2 鳥類 (2) 調査範囲及び調査経路・地点」に文章を追記 (評価書 p.244)</p> <p><b>3) 猛禽類 (行動圏、ねぐら、チュウヒ営巣地、チュウヒ餌資源)</b>                      猛禽類 (行動圏、ねぐら) の調査地点及び調査経路を図 8.6.1-8(1)～(2)に示した。なお、猛禽類 (チュウヒ営巣地、チュウヒ餌資源) については、種の保全の観点から調査地点及び調査経路を示していない。</p>

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (4)

頁	区分	変更の概要及び理由
244	追記	<p>鳥類相調査に関し、調査方法を鳥類全般と水鳥に分け、より詳細に記述することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p244 「6.1.2 鳥類 (4) 調査方法」に文章を追記 (評価書 p. 252)</p> <p>1) 鳥類相 (鳥類全般、水鳥)</p> <p>a 鳥類全般</p> <p>ア ラインセンサス法</p> <p>干拓地の北部及び南部の鳥類相の違いが把握できるよう設定した 6 ルートと、干拓地と干拓地周辺の鳥類相の違いが把握できるよう設定した 3 ルートの合計 9 ルートを、時速 1.5km 以下の一定速度で歩行しながら出現種及び個体数を記録した。</p> <p>調査時間帯は、朝及び夕方 2 回とし、朝は日の出 20 分前より実施した。</p> <p>観察幅は 100m (片側 50m) としたが、それより外側に出現した種についても可能な限り記録した。</p> <p>イ 定点観察法</p> <p>干拓地及び周辺の耕作地に設定した 9 定点において出現種、雌雄、行動等について記録した。調査時間はラインセンサス終了後の午前中の 30 分間とした。</p> <p>ウ 任意観察法</p> <p>ラインセンサス法と定点観察法では把握できないエリアも含めて任意に踏査し、ラインセンサス法や定点観察法では記録できなかった種の記録に努めた。</p> <p>b 水鳥</p> <p>ア ラインセンサス法</p> <p>干潮時に干拓地周辺干潟の鳥類相が把握できるよう設定した経路を、車で移動しながら出現種等を記録した。</p> <p>調査時間帯は、干潮時刻の前後 1 時間及び満潮時 (干潮時調査の前後 4 時間) とした。</p> <p>イ 定点観察法</p> <p>落潮・張潮時に、干潟で採餌等の行動をとっているシギ・チドリ類を対象に、水鳥の出現状況に応じて設定した定点において、出現種及び行動を記録した。</p>
-	追記	<p>オオヨシキリについては、「6 陸生動物」でも取り扱うこととしたため、以下の文章を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (4) 調査方法」に文章を追記 (評価書 p. 252)</p> <p>2) オオヨシキリの繁殖状況調査</p> <p>オオヨシキリの繁殖状況とヨシの生育状況との関係を見るため、本種の渡来期である 5 月に干拓地内外のオオヨシキリのさえずり個体を記録し、50m×50m のコドラートを 6 区画設定した。その際、コドラート内のヨシの生育状況も記録した。なお、コドラートの設定にあたっては、干拓地北側の鍋田川と木曽川の合流部にあるヨシ原も含めた。</p> <p>その後、コドラート内において、本種の繁殖期である 6 月に繁殖行動の記録を、繁殖終了後の 9 月に巣の確認を行った。また、10 月に干拓地全域を対象として、干拓地全体におけるオオヨシキリの生息・分布状況を推定するため、ヨシ原の分布状況とヨシの生育状況を記録した。</p>

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (5)

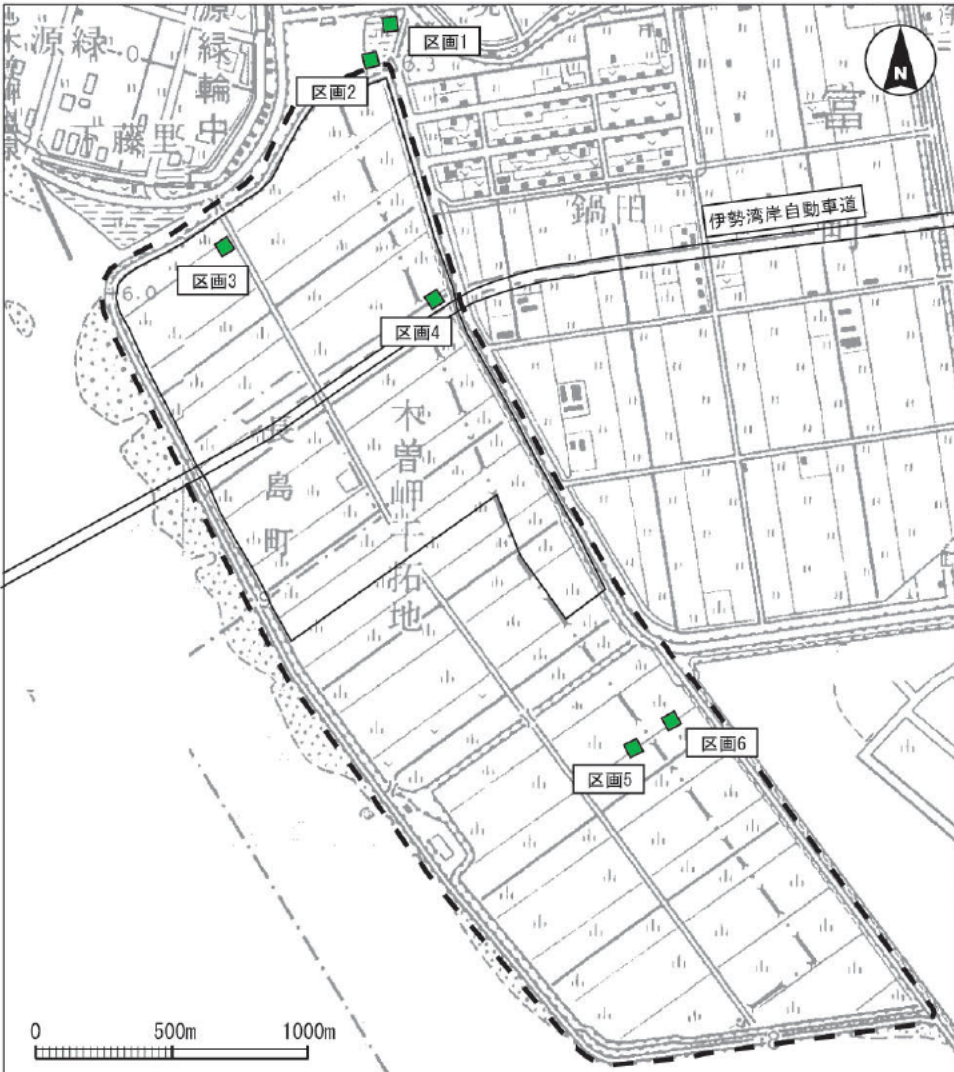
頁	区分	変更の概要及び理由
-	追記	<p>オオヨシキリについては、「6 陸生動物」でも取り扱うこととしたため、以下の図を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (2) 調査範囲及び調査経路・地点」にオオヨシキリの繁殖状況調査の範囲及び地点の図を追記 (評価書 p.249)</p>  <p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 調査範囲</li> <li>○ 事業実施区域</li> <li>■ コドラート設定地点</li> </ul>

図 8.6.1-7 オオヨシキリの繁殖状況調査の範囲及び地点

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (6)

頁	区分	変更の概要及び理由						
245	改訂	<p>確認種一覧に外来種等を追加したため、以下のとおり文章を改訂した。</p> <table border="1" data-bbox="395 293 1361 589"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="395 293 1361 331">準備書 p245 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の文章を改訂 (下線: 改訂)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="395 331 523 456">準備書</td> <td data-bbox="523 331 1361 456"> <p>1) 鳥類相 現地調査の結果、当干拓地では主に平地から低山地や河口・干潟等の水辺に生息する種を確認し、調査全体で 14 目 36 科 148 種の鳥類が確認された (鳥類確認種一覧は資料 8.6.1.2 参照)。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="395 456 523 589">評価書 (p. 254)</td> <td data-bbox="523 456 1361 589"> <p>1) 鳥類相 (鳥類全般、水鳥) <u>平成 14 年度から平成 15 年度までの</u>現地調査の結果、当干拓地では主に平地から低山地や河口・干潟等の水辺に生息する種を確認し、調査全体で <u>15 目 38 科 154 種</u>の鳥類が確認された。</p> </td> </tr> </table>	準備書 p245 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の文章を改訂 (下線: 改訂)		準備書	<p>1) 鳥類相 現地調査の結果、当干拓地では主に平地から低山地や河口・干潟等の水辺に生息する種を確認し、調査全体で 14 目 36 科 148 種の鳥類が確認された (鳥類確認種一覧は資料 8.6.1.2 参照)。</p>	評価書 (p. 254)	<p>1) 鳥類相 (鳥類全般、水鳥) <u>平成 14 年度から平成 15 年度までの</u>現地調査の結果、当干拓地では主に平地から低山地や河口・干潟等の水辺に生息する種を確認し、調査全体で <u>15 目 38 科 154 種</u>の鳥類が確認された。</p>
準備書 p245 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の文章を改訂 (下線: 改訂)								
準備書	<p>1) 鳥類相 現地調査の結果、当干拓地では主に平地から低山地や河口・干潟等の水辺に生息する種を確認し、調査全体で 14 目 36 科 148 種の鳥類が確認された (鳥類確認種一覧は資料 8.6.1.2 参照)。</p>							
評価書 (p. 254)	<p>1) 鳥類相 (鳥類全般、水鳥) <u>平成 14 年度から平成 15 年度までの</u>現地調査の結果、当干拓地では主に平地から低山地や河口・干潟等の水辺に生息する種を確認し、調査全体で <u>15 目 38 科 154 種</u>の鳥類が確認された。</p>							
-	追記	<p>オオヨシキリについては、「6 陸生動物」でも取り扱うこととしたため、以下の文章を追記した。</p> <table border="1" data-bbox="395 674 1394 1028"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="395 674 1394 712">「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に文章を追記 (評価書 p. 255)</td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="395 712 1394 1028"> <p>2) オオヨシキリ繁殖状況調査 平成 15 年度の調査の結果、オオヨシキリの営巣が確認されたのは、ヨシの生育密度が高く (約 80 本/㎡以上)、生育状況が良好で植被率の大きなヨシ原であった。一方、ヨシの生育密度が低く (約 80 本/㎡未満)、植被率が小さいヨシ原では、オオヨシキリの営巣は確認されなかった (図 8.6.1-9)。このことから、オオヨシキリの営巣環境としては、ヨシの生育密度が高く (約 80 本/㎡以上)、生育状況が良好で植被率が大きいヨシ原が必要であることがわかった。 また、図 8.6.1-10 から、干拓地内には、面積的には小さいが、ヨシ原が全域に点在することがわかった。しかし、干拓地内のヨシ原のほとんどは、生育密度が低く (約 80 本/㎡以下)、オオヨシキリが営巣可能と考えられるヨシ原はほとんど見られなかった。以上のことから、干拓地内のオオヨシキリの生息個体数は比較的少ないと考えられる。</p> </td> </tr> </table>	「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に文章を追記 (評価書 p. 255)		<p>2) オオヨシキリ繁殖状況調査 平成 15 年度の調査の結果、オオヨシキリの営巣が確認されたのは、ヨシの生育密度が高く (約 80 本/㎡以上)、生育状況が良好で植被率の大きなヨシ原であった。一方、ヨシの生育密度が低く (約 80 本/㎡未満)、植被率が小さいヨシ原では、オオヨシキリの営巣は確認されなかった (図 8.6.1-9)。このことから、オオヨシキリの営巣環境としては、ヨシの生育密度が高く (約 80 本/㎡以上)、生育状況が良好で植被率が大きいヨシ原が必要であることがわかった。 また、図 8.6.1-10 から、干拓地内には、面積的には小さいが、ヨシ原が全域に点在することがわかった。しかし、干拓地内のヨシ原のほとんどは、生育密度が低く (約 80 本/㎡以下)、オオヨシキリが営巣可能と考えられるヨシ原はほとんど見られなかった。以上のことから、干拓地内のオオヨシキリの生息個体数は比較的少ないと考えられる。</p>			
「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に文章を追記 (評価書 p. 255)								
<p>2) オオヨシキリ繁殖状況調査 平成 15 年度の調査の結果、オオヨシキリの営巣が確認されたのは、ヨシの生育密度が高く (約 80 本/㎡以上)、生育状況が良好で植被率の大きなヨシ原であった。一方、ヨシの生育密度が低く (約 80 本/㎡未満)、植被率が小さいヨシ原では、オオヨシキリの営巣は確認されなかった (図 8.6.1-9)。このことから、オオヨシキリの営巣環境としては、ヨシの生育密度が高く (約 80 本/㎡以上)、生育状況が良好で植被率が大きいヨシ原が必要であることがわかった。 また、図 8.6.1-10 から、干拓地内には、面積的には小さいが、ヨシ原が全域に点在することがわかった。しかし、干拓地内のヨシ原のほとんどは、生育密度が低く (約 80 本/㎡以下)、オオヨシキリが営巣可能と考えられるヨシ原はほとんど見られなかった。以上のことから、干拓地内のオオヨシキリの生息個体数は比較的少ないと考えられる。</p>								

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (7)

頁	区分 追記	変更の概要及び理由
-		<p>オオヨシキリについては、「6 陸生動物」でも取り扱うこととしたため、以下の図を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に図を追記 (評価書 p. 256)</p> <p>図 8.6.1-9 オオヨシキリの確認状況とコドラートのヨシの生育状況 (平成 15 年度)</p>

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (8)

頁	区 分	変更の概要及び理由																		
-	追 記	オオヨシキリについては、「6 陸生動物」でも取り扱うこととしたため、以下の図を追記した。																		
「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に図を追記 (評価書 p. 257)																				
<p><b>凡 例</b></p> <table border="0"> <tr> <td>● 調査地域</td> <td>平成14年度</td> <td>平成15年度</td> </tr> <tr> <td>○ 事業実施区域</td> <td>● 確認地点</td> <td>● 確認地点</td> </tr> <tr> <td></td> <td>● 確認範囲</td> <td>● 繁殖行動の確認地点</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>● 繁殖行動・巣の確認地点</td> </tr> <tr> <td>■ ヨシの生育密度が高く(80本/m<sup>2</sup>以上)、生育状況が良好なヨシ原</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>■ ヨシの生育密度が低く(80本/m<sup>2</sup>未満)、生育状況があまり良くないヨシ原 (平成15年10月)</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>*本図面は、平成15年度に実施したオオヨシキリの繁殖状況調査において記録した、ヨシ原の分布状況を示したものであるが、参考として、平成14年度及び平成15年度に実施した鳥類相(鳥類全般)調査において確認されたオオヨシキリの確認位置も示した。</p>			● 調査地域	平成14年度	平成15年度	○ 事業実施区域	● 確認地点	● 確認地点		● 確認範囲	● 繁殖行動の確認地点			● 繁殖行動・巣の確認地点	■ ヨシの生育密度が高く(80本/m <sup>2</sup> 以上)、生育状況が良好なヨシ原			■ ヨシの生育密度が低く(80本/m <sup>2</sup> 未満)、生育状況があまり良くないヨシ原 (平成15年10月)		
● 調査地域	平成14年度	平成15年度																		
○ 事業実施区域	● 確認地点	● 確認地点																		
	● 確認範囲	● 繁殖行動の確認地点																		
		● 繁殖行動・巣の確認地点																		
■ ヨシの生育密度が高く(80本/m <sup>2</sup> 以上)、生育状況が良好なヨシ原																				
■ ヨシの生育密度が低く(80本/m <sup>2</sup> 未満)、生育状況があまり良くないヨシ原 (平成15年10月)																				
図 8. 6. 1-10 オオヨシキリの確認状況及び繁殖状況並びにヨシの分布状況(平成 15 年度)																				

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(9)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
246	改訂	<p>調査結果をより詳細に記述することとし、以下のとおり文章を改訂した。</p> <p>準備書 p246 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の文章を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td> <p>2) 猛禽類調査</p> <p>a 行動圏調査</p> <p>平成 14 年～16 年度の 3 年間の猛禽類確認種一覧を表 8.6.1-8 に示した。現地調査の結果、調査全体で 1 目 2 科 12 種の猛禽類が確認された。確認種のうち、チュウヒ・ミサゴは留鳥であり、干拓地内を採餌場、ねぐらとして利用していることが確認された。特にチュウヒは 3 箇所で繁殖が確認された。ハヤブサ、オオタカ、ハイロチュウヒ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、ノスリは冬鳥であり、主に採餌場、ねぐらとしての利用が確認されている。また、サシバ、ハイタカ、ハチクマは出現数は少なく、渡り途中の一時的な出現と考えられる。</p> </td> </tr> <tr> <td>評価書 (p. 258)</td> <td> <p>3) 猛禽類調査</p> <p>a 行動圏調査</p> <p>平成 14 年度から平成 16 年度までの 3 年間の猛禽類調査における確認種の一覧を表 8.6.1-9 に示した。なお、確認状況には、同時期に実施した鳥類相調査の確認状況も含めている。</p> <p>現地調査の結果、1 目 2 科 12 種の猛禽類が確認された。確認種のうち、ミサゴ、オオタカ、ハヤブサ、チョウゲンボウは干拓地内及びその周辺で繁殖していない留鳥であり、干拓地内を採餌場、ねぐらとして利用していることが確認された。</p> <p>チュウヒは平成 14 年度、15 年度、16 年度とも 3 つがいの営巣が確認された。特に、平成 15 年度は 3 つがいの繁殖の成功が確認され、3 つがいの営巣地が特定された。営巣地は、3 箇所とも伊勢湾岸自動車道以南で確認され、そのうちの 1 箇所は事業実施区域の近傍に位置していた。本種の主要な採餌場は木曾岬干拓地内であり、その他鍋田干拓地も採餌場として利用していることが確認された。図 8.6.1-11 に 3 つがいが繁殖に成功し、3 つがいの営巣地が特定された平成 15 年度におけるチュウヒの行動圏及び採餌場を示した。</p> <p>ノスリ、ハイロチュウヒ、コチョウゲンボウは冬鳥であり、主に採餌場、ねぐらとしての利用が確認されている。また、ハチクマ、ハイタカ、サシバは出現数が少なく、渡り途中の一時的な出現と考えられ、ケアシノスリは稀な冬鳥と考えられる。</p> </td> </tr> </table>	準備書	<p>2) 猛禽類調査</p> <p>a 行動圏調査</p> <p>平成 14 年～16 年度の 3 年間の猛禽類確認種一覧を表 8.6.1-8 に示した。現地調査の結果、調査全体で 1 目 2 科 12 種の猛禽類が確認された。確認種のうち、チュウヒ・ミサゴは留鳥であり、干拓地内を採餌場、ねぐらとして利用していることが確認された。特にチュウヒは 3 箇所で繁殖が確認された。ハヤブサ、オオタカ、ハイロチュウヒ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、ノスリは冬鳥であり、主に採餌場、ねぐらとしての利用が確認されている。また、サシバ、ハイタカ、ハチクマは出現数は少なく、渡り途中の一時的な出現と考えられる。</p>	評価書 (p. 258)	<p>3) 猛禽類調査</p> <p>a 行動圏調査</p> <p>平成 14 年度から平成 16 年度までの 3 年間の猛禽類調査における確認種の一覧を表 8.6.1-9 に示した。なお、確認状況には、同時期に実施した鳥類相調査の確認状況も含めている。</p> <p>現地調査の結果、1 目 2 科 12 種の猛禽類が確認された。確認種のうち、ミサゴ、オオタカ、ハヤブサ、チョウゲンボウは干拓地内及びその周辺で繁殖していない留鳥であり、干拓地内を採餌場、ねぐらとして利用していることが確認された。</p> <p>チュウヒは平成 14 年度、15 年度、16 年度とも 3 つがいの営巣が確認された。特に、平成 15 年度は 3 つがいの繁殖の成功が確認され、3 つがいの営巣地が特定された。営巣地は、3 箇所とも伊勢湾岸自動車道以南で確認され、そのうちの 1 箇所は事業実施区域の近傍に位置していた。本種の主要な採餌場は木曾岬干拓地内であり、その他鍋田干拓地も採餌場として利用していることが確認された。図 8.6.1-11 に 3 つがいが繁殖に成功し、3 つがいの営巣地が特定された平成 15 年度におけるチュウヒの行動圏及び採餌場を示した。</p> <p>ノスリ、ハイロチュウヒ、コチョウゲンボウは冬鳥であり、主に採餌場、ねぐらとしての利用が確認されている。また、ハチクマ、ハイタカ、サシバは出現数が少なく、渡り途中の一時的な出現と考えられ、ケアシノスリは稀な冬鳥と考えられる。</p>																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
準備書	<p>2) 猛禽類調査</p> <p>a 行動圏調査</p> <p>平成 14 年～16 年度の 3 年間の猛禽類確認種一覧を表 8.6.1-8 に示した。現地調査の結果、調査全体で 1 目 2 科 12 種の猛禽類が確認された。確認種のうち、チュウヒ・ミサゴは留鳥であり、干拓地内を採餌場、ねぐらとして利用していることが確認された。特にチュウヒは 3 箇所で繁殖が確認された。ハヤブサ、オオタカ、ハイロチュウヒ、チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、ノスリは冬鳥であり、主に採餌場、ねぐらとしての利用が確認されている。また、サシバ、ハイタカ、ハチクマは出現数は少なく、渡り途中の一時的な出現と考えられる。</p>																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
評価書 (p. 258)	<p>3) 猛禽類調査</p> <p>a 行動圏調査</p> <p>平成 14 年度から平成 16 年度までの 3 年間の猛禽類調査における確認種の一覧を表 8.6.1-9 に示した。なお、確認状況には、同時期に実施した鳥類相調査の確認状況も含めている。</p> <p>現地調査の結果、1 目 2 科 12 種の猛禽類が確認された。確認種のうち、ミサゴ、オオタカ、ハヤブサ、チョウゲンボウは干拓地内及びその周辺で繁殖していない留鳥であり、干拓地内を採餌場、ねぐらとして利用していることが確認された。</p> <p>チュウヒは平成 14 年度、15 年度、16 年度とも 3 つがいの営巣が確認された。特に、平成 15 年度は 3 つがいの繁殖の成功が確認され、3 つがいの営巣地が特定された。営巣地は、3 箇所とも伊勢湾岸自動車道以南で確認され、そのうちの 1 箇所は事業実施区域の近傍に位置していた。本種の主要な採餌場は木曾岬干拓地内であり、その他鍋田干拓地も採餌場として利用していることが確認された。図 8.6.1-11 に 3 つがいが繁殖に成功し、3 つがいの営巣地が特定された平成 15 年度におけるチュウヒの行動圏及び採餌場を示した。</p> <p>ノスリ、ハイロチュウヒ、コチョウゲンボウは冬鳥であり、主に採餌場、ねぐらとしての利用が確認されている。また、ハチクマ、ハイタカ、サシバは出現数が少なく、渡り途中の一時的な出現と考えられ、ケアシノスリは稀な冬鳥と考えられる。</p>																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
246	改訂	<p>猛禽類確認状況について一部誤りがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p246 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の表を改訂 (下線: 改訂、取消線: 削除) (評価書 p. 258)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-9 猛禽類確認状況</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">科名</th> <th rowspan="2">種名</th> <th colspan="12">平成 14 年度</th> <th colspan="4">平成 15 年度</th> <th colspan="3">平成 16 年度</th> </tr> <tr> <th>4月</th><th>5月</th><th>6月</th><th>7月</th><th>8月</th><th>9月</th><th>10月</th><th>11月</th><th>12月</th><th>1月</th><th>2月</th><th>3月</th><th>4月</th><th>5月</th><th>6月</th><th>7月</th><th>8月</th><th>5月</th><th>6月</th><th>7月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="9">タカ</td> <td>ミサゴ</td> <td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td> </tr> <tr> <td>ハチクマ</td> <td></td><td></td><td>□</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>オオタカ</td> <td>□</td><td></td><td></td><td>○</td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td></td><td>○</td> </tr> <tr> <td>ハイタカ</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>ケアシノスリ</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>ノスリ</td> <td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>□</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>サシバ</td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>ハイロチュウヒ</td> <td>○</td><td>□</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>チュウヒ</td> <td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">ハヤブサ</td> <td>ハヤブサ</td> <td>○</td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td></td><td>○</td> </tr> <tr> <td>コチョウゲンボウ</td> <td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> <tr> <td>チョウゲンボウ</td> <td>□</td><td></td><td></td><td>□</td><td></td><td></td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td> </tr> <tr> <td>2科</td> <td>12種</td> <td>8種</td><td>4種</td><td>3種</td><td>3種</td><td>4種</td><td>5種</td><td>6種</td><td>10種</td><td>9種</td><td>8種</td><td>8種</td><td>8種</td><td>9種</td><td>2種</td><td>4種</td><td>4種</td><td>4種</td><td>3種</td><td>3種</td><td>4種</td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1. 「レ」については調査対象外とした  2. ○: 猛禽類調査で確認されたことを示す  3. □: 猛禽類調査では確認されなかったが、同時期に実施した鳥類相調査で確認されたことを示す。</p>	科名	種名	平成 14 年度												平成 15 年度				平成 16 年度			4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	5月	6月	7月	タカ	ミサゴ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハチクマ			□														○				オオタカ	□			○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	ハイタカ									○	○											ケアシノスリ									○												ノスリ	○							○	○	○	○	○	○	○	□						サシバ																	○				ハイロチュウヒ	○	□							○	○	○	○	○	○							チュウヒ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	ハヤブサ	ハヤブサ	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○	コチョウゲンボウ	○								○	○	○	○	○	○	○						チョウゲンボウ	□			□			○	○	○	○	○	○	○	○						○	2科	12種	8種	4種	3種	3種	4種	5種	6種	10種	9種	8種	8種	8種	9種	2種	4種	4種	4種	3種	3種	4種
科名	種名	平成 14 年度												平成 15 年度				平成 16 年度																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	5月	6月	7月																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
タカ	ミサゴ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
	ハチクマ			□														○																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
	オオタカ	□			○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
	ハイタカ									○	○																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
	ケアシノスリ									○																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
	ノスリ	○							○	○	○	○	○	○	○	□																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
	サシバ																	○																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
	ハイロチュウヒ	○	□							○	○	○	○	○	○																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
	チュウヒ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
ハヤブサ	ハヤブサ	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○		○																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
	コチョウゲンボウ	○								○	○	○	○	○	○	○																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
	チョウゲンボウ	□			□			○	○	○	○	○	○	○	○						○																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
2科	12種	8種	4種	3種	3種	4種	5種	6種	10種	9種	8種	8種	8種	9種	2種	4種	4種	4種	3種	3種	4種																																																																																																																																																																																																																																																																																																										

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(10)

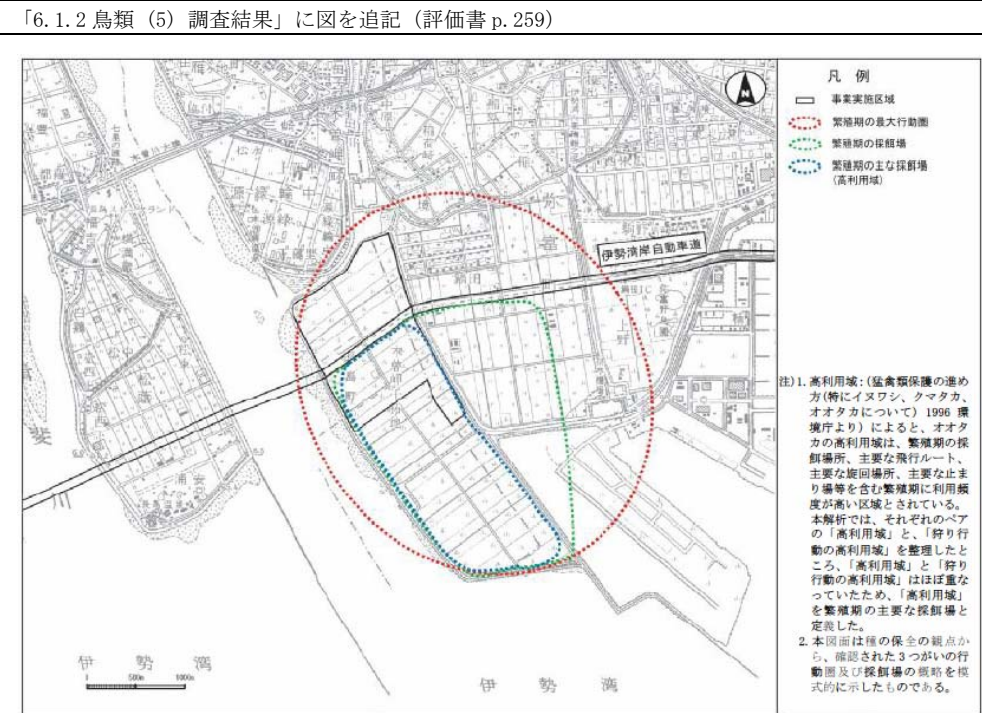
頁	区分	変更の概要及び理由				
-	追記	<p>チュウヒの行動圏等が不明であるとの指摘を受けたため、これを模式的に示すこととし、以下の図を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に図を追記 (評価書 p. 259)</p>  <p>凡例          □ 事業実施区域          ○ 繁殖期の最大行動圏          ● 繁殖期の採餌場          ● 繁殖期の主な採餌場 (高利用域)</p> <p>注1. 高利用域: (猛禽類保護の進め方(特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて) 1996 環境庁より) によると、オオタカの高利用域は、繁殖期の採餌場所、主要な飛行ルート、主要な旋回場所、主要な止まり場等を含む繁殖期に利用頻度が高い区域とされている。本解析では、それぞれのペアの「高利用域」と、「狩り行動の高利用域」と「狩り行動の高利用域」はほぼ重なっていたため、「高利用域」を繁殖期の主要な採餌場と定めた。</p> <p>2. 本図面は種の保全の観点から、確認された3つがいの行動圏及び採餌場の概略を模式的に示したものである。</p> <p>図 8.6.1-11 チュウヒの行動圏及び採餌場(平成 15 年度)</p>				
246	改訂	<p>調査結果をより詳細に記述することとし、以下のとおり文章を改訂した。</p> <p>準備書 p246 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の文章を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1" data-bbox="399 1131 1385 1948"> <tr> <td data-bbox="399 1131 518 1422">準備書</td> <td data-bbox="518 1131 1385 1422"> <p>2) 猛禽類調査 b ねぐら調査</p> <p>ねぐら入りを特定できた種は、ミサゴ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの計7種であった。ねぐら入りを特定できた種の個体数を、表 8.6.1-9 に示す。</p> <p>これらの種のうち、チュウヒ及びハイイロチュウヒは同じ草地内の比較的隣接した距離でねぐら入りしていた。その他の種は、主に電柱や電線に目視できない時間まで留まっていた。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="399 1422 518 1948">評価書 (p. 260)</td> <td data-bbox="518 1422 1385 1948"> <p>3) 猛禽類調査 b ねぐら調査</p> <p>平成 14 年度から平成 15 年度までの現地調査の結果、ねぐら入りを特定できた種は、ミサゴ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの計7種であった。ねぐら入りを特定できた種の個体数を表 8.6.1-10 に、また、ねぐらのおおよその位置と個体数の関係を表 8.6.1-11 に示した。</p> <p>ねぐら入りが確認された猛禽類のうち、合計欄に示した延べ個体数が多い種は、ミサゴ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、コチョウゲンボウの4種であった。このうち、ミサゴはほぼ年間を通して干拓地をねぐらとして利用しているが、月別の利用個体数はそれほど多くなく(表 8.6.1-10)、ねぐらの位置も干拓地に広く分布している(表 8.6.1-11)。チュウヒは、干拓地内での営巣が確認されており、年間を通して干拓地をねぐらとして利用しているが、平成 14 年度においては 10 月以降に利用個体数が増加し、主に干拓地南側の草地をねぐらとして利用していた(表 8.6.1-11)。ハイイロチュウヒ、コチョウゲンボウは、11 月ないしは 12 月より干拓地をねぐらとして利用するようになり(表 8.6.1-10)、平成 14 年度と平成 15 年度における両種の利用個体数を比較すると、両種とも平成 15 年度における利用個体数の方が多かった。ハイイロチュウヒは主に干拓地南側の草地を、コチョウゲンボウは主に干拓地北側の電柱等をねぐらとして利用していた。</p> </td> </tr> </table>	準備書	<p>2) 猛禽類調査 b ねぐら調査</p> <p>ねぐら入りを特定できた種は、ミサゴ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの計7種であった。ねぐら入りを特定できた種の個体数を、表 8.6.1-9 に示す。</p> <p>これらの種のうち、チュウヒ及びハイイロチュウヒは同じ草地内の比較的隣接した距離でねぐら入りしていた。その他の種は、主に電柱や電線に目視できない時間まで留まっていた。</p>	評価書 (p. 260)	<p>3) 猛禽類調査 b ねぐら調査</p> <p>平成 14 年度から平成 15 年度までの現地調査の結果、ねぐら入りを特定できた種は、ミサゴ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの計7種であった。ねぐら入りを特定できた種の個体数を表 8.6.1-10 に、また、ねぐらのおおよその位置と個体数の関係を表 8.6.1-11 に示した。</p> <p>ねぐら入りが確認された猛禽類のうち、合計欄に示した延べ個体数が多い種は、ミサゴ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、コチョウゲンボウの4種であった。このうち、ミサゴはほぼ年間を通して干拓地をねぐらとして利用しているが、月別の利用個体数はそれほど多くなく(表 8.6.1-10)、ねぐらの位置も干拓地に広く分布している(表 8.6.1-11)。チュウヒは、干拓地内での営巣が確認されており、年間を通して干拓地をねぐらとして利用しているが、平成 14 年度においては 10 月以降に利用個体数が増加し、主に干拓地南側の草地をねぐらとして利用していた(表 8.6.1-11)。ハイイロチュウヒ、コチョウゲンボウは、11 月ないしは 12 月より干拓地をねぐらとして利用するようになり(表 8.6.1-10)、平成 14 年度と平成 15 年度における両種の利用個体数を比較すると、両種とも平成 15 年度における利用個体数の方が多かった。ハイイロチュウヒは主に干拓地南側の草地を、コチョウゲンボウは主に干拓地北側の電柱等をねぐらとして利用していた。</p>
準備書	<p>2) 猛禽類調査 b ねぐら調査</p> <p>ねぐら入りを特定できた種は、ミサゴ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの計7種であった。ねぐら入りを特定できた種の個体数を、表 8.6.1-9 に示す。</p> <p>これらの種のうち、チュウヒ及びハイイロチュウヒは同じ草地内の比較的隣接した距離でねぐら入りしていた。その他の種は、主に電柱や電線に目視できない時間まで留まっていた。</p>					
評価書 (p. 260)	<p>3) 猛禽類調査 b ねぐら調査</p> <p>平成 14 年度から平成 15 年度までの現地調査の結果、ねぐら入りを特定できた種は、ミサゴ、ノスリ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、コチョウゲンボウ、チョウゲンボウの計7種であった。ねぐら入りを特定できた種の個体数を表 8.6.1-10 に、また、ねぐらのおおよその位置と個体数の関係を表 8.6.1-11 に示した。</p> <p>ねぐら入りが確認された猛禽類のうち、合計欄に示した延べ個体数が多い種は、ミサゴ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、コチョウゲンボウの4種であった。このうち、ミサゴはほぼ年間を通して干拓地をねぐらとして利用しているが、月別の利用個体数はそれほど多くなく(表 8.6.1-10)、ねぐらの位置も干拓地に広く分布している(表 8.6.1-11)。チュウヒは、干拓地内での営巣が確認されており、年間を通して干拓地をねぐらとして利用しているが、平成 14 年度においては 10 月以降に利用個体数が増加し、主に干拓地南側の草地をねぐらとして利用していた(表 8.6.1-11)。ハイイロチュウヒ、コチョウゲンボウは、11 月ないしは 12 月より干拓地をねぐらとして利用するようになり(表 8.6.1-10)、平成 14 年度と平成 15 年度における両種の利用個体数を比較すると、両種とも平成 15 年度における利用個体数の方が多かった。ハイイロチュウヒは主に干拓地南側の草地を、コチョウゲンボウは主に干拓地北側の電柱等をねぐらとして利用していた。</p>					



表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(11)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																																																																																																																																										
247	改訂	<p>ねぐら調査の結果について一部誤りがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p247 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」の表を改訂 (下線: 改訂、取消線: 削除) (評価書 p. 260)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-9 表 8.6.1-10 ねぐら調査の結果</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">種名</th> <th colspan="10">平成 14 年度</th> <th colspan="4">平成 15 年度</th> <th rowspan="2">合計</th> </tr> <tr> <th>6月</th><th>7月</th><th>8月</th><th>9月</th><th>10月</th><th>11月</th><th>12月</th><th>1月</th><th>2月</th><th>3月</th> <th>11月</th><th>12月</th><th>1月</th><th>2月</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ミサゴ</td> <td>-</td><td>-</td><td>1</td><td>6</td><td>9</td><td>-</td><td>5</td><td>-</td><td>1</td><td>5</td> <td>5</td><td>4</td><td>4</td><td>6</td> <td>46</td> </tr> <tr> <td>ノスリ</td> <td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>1</td> <td>-</td><td>1</td><td>1</td><td>-</td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>ハイイロ チュウヒ</td> <td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td><u>4</u> <del>3</del></td><td>2</td><td>-</td><td>2</td> <td><u>1</u> <del>1</del></td><td>9</td><td>10</td><td>17</td> <td><u>45</u> <del>44</del></td> </tr> <tr> <td>チュウヒ</td> <td>5</td><td>4</td><td>2</td><td>3</td><td>7</td><td>6</td><td>4</td><td>6</td><td>2</td><td>2</td> <td>13</td><td>7</td><td>9</td><td>5</td> <td>75</td> </tr> <tr> <td>ハヤブサ</td> <td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td> <td>-</td><td>-</td><td>1</td><td>-</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>コチョウ ゲンボウ</td> <td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>5</td><td>4</td><td>1</td><td>-</td><td>-</td> <td>-</td><td>1</td><td>11</td><td>12</td> <td>34</td> </tr> <tr> <td>チョウゲン ボウ</td> <td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td> <td>2</td><td>-</td><td>3</td><td>2</td> <td>7</td> </tr> <tr> <td>合計</td> <td>5</td><td>4</td><td>3</td><td>9</td><td>16</td><td>11</td><td><u>17</u> <del>16</del></td><td>9</td><td>3</td><td>10</td> <td>21</td><td>22</td><td>39</td><td>42</td> <td><u>211</u> <del>210</del></td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1. 「-」は確認なし 2. 表中の数字は、確認個体数を示す。</p>	種名	平成 14 年度										平成 15 年度				合計	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	11月	12月	1月	2月	ミサゴ	-	-	1	6	9	-	5	-	1	5	5	4	4	6	46	ノスリ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	3	ハイイロ チュウヒ	-	-	-	-	-	-	<u>4</u> <del>3</del>	2	-	2	<u>1</u> <del>1</del>	9	10	17	<u>45</u> <del>44</del>	チュウヒ	5	4	2	3	7	6	4	6	2	2	13	7	9	5	75	ハヤブサ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	コチョウ ゲンボウ	-	-	-	-	-	5	4	1	-	-	-	1	11	12	34	チョウゲン ボウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3	2	7	合計	5	4	3	9	16	11	<u>17</u> <del>16</del>	9	3	10	21	22	39	42	<u>211</u> <del>210</del>																																																												
種名	平成 14 年度										平成 15 年度				合計																																																																																																																																																																																																													
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	11月	12月	1月	2月																																																																																																																																																																																																														
ミサゴ	-	-	1	6	9	-	5	-	1	5	5	4	4	6	46																																																																																																																																																																																																													
ノスリ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	3																																																																																																																																																																																																													
ハイイロ チュウヒ	-	-	-	-	-	-	<u>4</u> <del>3</del>	2	-	2	<u>1</u> <del>1</del>	9	10	17	<u>45</u> <del>44</del>																																																																																																																																																																																																													
チュウヒ	5	4	2	3	7	6	4	6	2	2	13	7	9	5	75																																																																																																																																																																																																													
ハヤブサ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1																																																																																																																																																																																																													
コチョウ ゲンボウ	-	-	-	-	-	5	4	1	-	-	-	1	11	12	34																																																																																																																																																																																																													
チョウゲン ボウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3	2	7																																																																																																																																																																																																													
合計	5	4	3	9	16	11	<u>17</u> <del>16</del>	9	3	10	21	22	39	42	<u>211</u> <del>210</del>																																																																																																																																																																																																													
-	追記	<p>干拓地内をねぐらとして利用する猛禽類の主なねぐら位置を把握するため、以下の表を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に表を追記 (評価書 p. 261)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-11 ねぐら位置と個体数の関係</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">種別</th> <th colspan="4">平成14年6月</th> <th colspan="4">平成14年7月</th> <th colspan="4">平成14年8月</th> <th colspan="4">平成14年9月</th> <th colspan="4">平成14年10月</th> <th rowspan="2">合計</th> </tr> <tr> <th>北</th><th>中</th><th>南</th><th>東</th> <th>北</th><th>中</th><th>南</th><th>東</th> <th>北</th><th>中</th><th>南</th><th>東</th> <th>北</th><th>中</th><th>南</th><th>東</th> <th>北</th><th>中</th><th>南</th><th>東</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>種別</td> <td>北</td><td>中</td><td>南</td><td>東</td> <td>北</td><td>中</td><td>南</td><td>東</td> <td>北</td><td>中</td><td>南</td><td>東</td> <td>北</td><td>中</td><td>南</td><td>東</td> <td>北</td><td>中</td><td>南</td><td>東</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ミサゴ</td> <td>1</td><td>1</td><td>3</td><td>1</td> <td>1</td><td>1</td><td>2</td><td>1</td> <td>1</td><td>1</td><td>3</td><td>1</td> <td>1</td><td>1</td><td>3</td><td>1</td> <td>1</td><td>1</td><td>3</td><td>1</td> <td>46</td> </tr> <tr> <td>ノスリ</td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td>3</td> </tr> <tr> <td>ハイイロ チュウヒ</td> <td></td><td></td><td>1</td><td></td> <td></td><td></td><td>9</td><td></td> <td></td><td></td><td>1</td><td>1</td> <td></td><td></td><td>8</td><td></td> <td></td><td></td><td>7</td><td></td> <td>45</td> </tr> <tr> <td>チュウヒ</td> <td></td><td>2</td><td>11</td><td></td> <td></td><td>7</td><td>1</td><td></td> <td></td><td>8</td><td></td><td></td> <td></td><td>5</td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td>75</td> </tr> <tr> <td>ハヤブサ</td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>コチョウ ゲンボウ</td> <td></td><td></td><td></td><td>1</td> <td></td><td></td><td>8</td><td>3</td> <td></td><td>4</td><td>7</td><td>1</td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td>34</td> </tr> <tr> <td>チョウゲン ボウ</td> <td></td><td>2</td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td>2</td><td>1</td> <td></td><td>2</td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td> <td>7</td> </tr> </tbody> </table> <p>注) 1. 北: 伊勢湾岸自動車道より北側の事業実施区域 中: 伊勢湾岸自動車道と中央水路で挟まれた区域 東: 事業実施区域のうち、改定される区域 南: 事業実施区域のうち、改定されない区域 2. グラフの横の数字は確認個体数を示す。 3. 本表では、種の保全の観点から、ねぐらの正確な確認位置は示していない。</p>	種別	平成14年6月				平成14年7月				平成14年8月				平成14年9月				平成14年10月				合計	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	種別	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東		ミサゴ	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	3	1	46	ノスリ																					3	ハイイロ チュウヒ			1				9				1	1			8				7		45	チュウヒ		2	11			7	1			8				5							75	ハヤブサ																					1	コチョウ ゲンボウ				1			8	3		4	7	1									34	チョウゲン ボウ		2					2	1		2											7
種別	平成14年6月				平成14年7月				平成14年8月				平成14年9月				平成14年10月				合計																																																																																																																																																																																																							
	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東																																																																																																																																																																																																								
種別	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東	北	中	南	東																																																																																																																																																																																																								
ミサゴ	1	1	3	1	1	1	2	1	1	1	3	1	1	1	3	1	1	1	3	1	46																																																																																																																																																																																																							
ノスリ																					3																																																																																																																																																																																																							
ハイイロ チュウヒ			1				9				1	1			8				7		45																																																																																																																																																																																																							
チュウヒ		2	11			7	1			8				5							75																																																																																																																																																																																																							
ハヤブサ																					1																																																																																																																																																																																																							
コチョウ ゲンボウ				1			8	3		4	7	1									34																																																																																																																																																																																																							
チョウゲン ボウ		2					2	1		2											7																																																																																																																																																																																																							

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (12)

頁	区分	変更の概要及び理由						
247	改訂	<p>日本におけるチュウヒの他の繁殖地の事例を追加する等、チュウヒの営巣地について詳細に記述することとし、以下の文章を追記した。</p> <table border="1" data-bbox="395 309 1402 1077"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="395 309 1402 342">準備書 p247 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」を改訂 (下線: 改訂)</td> </tr> <tr> <td data-bbox="395 342 517 566">準備書</td> <td data-bbox="517 342 1402 566"> <p><b>2) 猛禽類調査</b></p> <p><b>c チュウヒ営巣地調査</b></p> <p>平成 14 年度に行われたチュウヒ営巣確認調査では、営巣地が 1 箇所、繁殖の可能性が高いと考えられた区域が 2 箇所確認された。また、平成 15 年度に行われたチュウヒ営巣地特定調査では、営巣地が 3 箇所確認され、繁殖状況の調査では、それぞれ雛も確認された。また、営巣地の周辺植生については、ヤマアワ及びヤマアワと多種の混生の割合が高い傾向がみられた。</p> </td> </tr> <tr> <td data-bbox="395 566 517 1077">評価書 (p. 262)</td> <td data-bbox="517 566 1402 1077"> <p><b>3) 猛禽類調査</b></p> <p><b>c チュウヒ営巣地調査</b></p> <p>平成 14 年度に行ったチュウヒ営巣地調査では、営巣地を 1 箇所、繁殖の可能性が高いと考えられた区域を 2 箇所確認した。また、平成 15 年度に行ったチュウヒ営巣地調査では、営巣地を 3 箇所確認し、繁殖状況の調査では、それぞれ雛も確認した。営巣地周辺の植生は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨシ等の高茎草本が主体であった。</p> <p>石川県河北潟干拓地、青森県仏沼干拓地、愛知県における繁殖地等、他の繁殖地では、チュウヒは、抽水状態のヨシ原を営巣地としている事例が多く見られた。この理由としては、抽水状態のヨシ原は、人や天敵となる哺乳類の侵入が困難であり、これらの影響を受けにくいことが考えられる。一方、木曽岬干拓地のチュウヒの営巣地は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨシ等の高茎草本が主体であり、他の繁殖地の事例と異なった環境で営巣している。これは、木曽岬干拓地は堤防の水路や柵により、外部との連続性がほぼ遮断されているため、人や天敵となる哺乳類の干拓地内への侵入が少なく、チュウヒがこれらの影響を受けにくいためであると考えられる。</p> <p>平成 15 年度に確認したチュウヒの 3 営巣地について、営巣地周辺の植生及び植生断面を図 8.6.1-12(1)～(3)に示す。</p> </td> </tr> </table>	準備書 p247 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」を改訂 (下線: 改訂)		準備書	<p><b>2) 猛禽類調査</b></p> <p><b>c チュウヒ営巣地調査</b></p> <p>平成 14 年度に行われたチュウヒ営巣確認調査では、営巣地が 1 箇所、繁殖の可能性が高いと考えられた区域が 2 箇所確認された。また、平成 15 年度に行われたチュウヒ営巣地特定調査では、営巣地が 3 箇所確認され、繁殖状況の調査では、それぞれ雛も確認された。また、営巣地の周辺植生については、ヤマアワ及びヤマアワと多種の混生の割合が高い傾向がみられた。</p>	評価書 (p. 262)	<p><b>3) 猛禽類調査</b></p> <p><b>c チュウヒ営巣地調査</b></p> <p>平成 14 年度に行ったチュウヒ営巣地調査では、営巣地を 1 箇所、繁殖の可能性が高いと考えられた区域を 2 箇所確認した。また、平成 15 年度に行ったチュウヒ営巣地調査では、営巣地を 3 箇所確認し、繁殖状況の調査では、それぞれ雛も確認した。営巣地周辺の植生は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨシ等の高茎草本が主体であった。</p> <p>石川県河北潟干拓地、青森県仏沼干拓地、愛知県における繁殖地等、他の繁殖地では、チュウヒは、抽水状態のヨシ原を営巣地としている事例が多く見られた。この理由としては、抽水状態のヨシ原は、人や天敵となる哺乳類の侵入が困難であり、これらの影響を受けにくいことが考えられる。一方、木曽岬干拓地のチュウヒの営巣地は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨシ等の高茎草本が主体であり、他の繁殖地の事例と異なった環境で営巣している。これは、木曽岬干拓地は堤防の水路や柵により、外部との連続性がほぼ遮断されているため、人や天敵となる哺乳類の干拓地内への侵入が少なく、チュウヒがこれらの影響を受けにくいためであると考えられる。</p> <p>平成 15 年度に確認したチュウヒの 3 営巣地について、営巣地周辺の植生及び植生断面を図 8.6.1-12(1)～(3)に示す。</p>
準備書 p247 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」を改訂 (下線: 改訂)								
準備書	<p><b>2) 猛禽類調査</b></p> <p><b>c チュウヒ営巣地調査</b></p> <p>平成 14 年度に行われたチュウヒ営巣確認調査では、営巣地が 1 箇所、繁殖の可能性が高いと考えられた区域が 2 箇所確認された。また、平成 15 年度に行われたチュウヒ営巣地特定調査では、営巣地が 3 箇所確認され、繁殖状況の調査では、それぞれ雛も確認された。また、営巣地の周辺植生については、ヤマアワ及びヤマアワと多種の混生の割合が高い傾向がみられた。</p>							
評価書 (p. 262)	<p><b>3) 猛禽類調査</b></p> <p><b>c チュウヒ営巣地調査</b></p> <p>平成 14 年度に行ったチュウヒ営巣地調査では、営巣地を 1 箇所、繁殖の可能性が高いと考えられた区域を 2 箇所確認した。また、平成 15 年度に行ったチュウヒ営巣地調査では、営巣地を 3 箇所確認し、繁殖状況の調査では、それぞれ雛も確認した。営巣地周辺の植生は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨシ等の高茎草本が主体であった。</p> <p>石川県河北潟干拓地、青森県仏沼干拓地、愛知県における繁殖地等、他の繁殖地では、チュウヒは、抽水状態のヨシ原を営巣地としている事例が多く見られた。この理由としては、抽水状態のヨシ原は、人や天敵となる哺乳類の侵入が困難であり、これらの影響を受けにくいことが考えられる。一方、木曽岬干拓地のチュウヒの営巣地は、ススキ、セイタカアワダチソウ、ヨシ等の高茎草本が主体であり、他の繁殖地の事例と異なった環境で営巣している。これは、木曽岬干拓地は堤防の水路や柵により、外部との連続性がほぼ遮断されているため、人や天敵となる哺乳類の干拓地内への侵入が少なく、チュウヒがこれらの影響を受けにくいためであると考えられる。</p> <p>平成 15 年度に確認したチュウヒの 3 営巣地について、営巣地周辺の植生及び植生断面を図 8.6.1-12(1)～(3)に示す。</p>							

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(13)

頁	区分	変更の概要及び理由																								
-	追記	<p>干拓地におけるチュウヒの営巣地付近の植生等を把握するため、以下の図を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に図を追記 (評価書 p. 263) (その 2~その 3 については評価書 p. 264~265 参照)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="width: 45%;"> <p>その 1 : 50m × 50m</p> </div> <div style="width: 45%;"> <p><b>凡例</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: yellow; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>M1</b> ススキ(高さ:約200cm,密度:約120本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: orange; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>S</b> セイタカアワダチソウ(高さ:約150cm,密度:約80本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: lightcoral; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>MC1</b> セイタカアワダチソウ(高さ:約80~140cm,密度:約60~80本/m<sup>2</sup>)とヤマアワ(高さ:約110~120cm,密度:約200本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: pink; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>MC2</b> 上層にススキ(高さ:約170cm,密度:約20本/m<sup>2</sup>),下層にセイタカアワダチソウ(高さ:約50cm,密度:約60本/m<sup>2</sup>)とヤマアワ(高さ:約50cm,密度:約200本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: lightgreen; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>MP1</b> 上層にヨシ(高さ:約200cm,密度:約80本/m<sup>2</sup>),下層にセイタカアワダチソウ(高さ:約100cm,密度:約60本/m<sup>2</sup>)が優占。下層にはセイタカアワダチソウのほか、ヤマアワが低密度で生育</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: lightgrey; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>C1</b> ヤマアワ(高さ:約140cm,密度:約400本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: lightpurple; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>C4</b> 上層にセイタカアワダチソウ(高さ:約160~200cm,密度:約10~40本/m<sup>2</sup>),下層にヤマアワ(高さ:約100~120cm,密度:約300~400本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: purple; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>C5</b> 上層にヨシ(高さ:約170cm,密度:約5本/m<sup>2</sup>),下層にヤマアワ(高さ:約80cm,密度:約400本/m<sup>2</sup>)が優占。下層にはヤマアワのほか、セイタカアワダチソウが低密度で生育</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: lightblue; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>CP3</b> 上層にヨシ(高さ:約200cm,密度:約60本/m<sup>2</sup>),下層にヤマアワ(高さ:約120cm,密度:約200本/m<sup>2</sup>)が優占。下層にはヤマアワのほか、セイタカアワダチソウが低密度で生育</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: cyan; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>P1</b> 上層にヨシ(高さ:約300cm,密度:約300本/m<sup>2</sup>)が優占</li> <li><span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: teal; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span> <b>P3</b> 上層にヨシ(高さ:約200cm,密度:約60本/m<sup>2</sup>),下層にはヤマアワ(高さ:約120cm,密度:約30本/m<sup>2</sup>)が優占。上層にはヨシのほか、セイタカアワダチソウが低密度で生育</li> </ul> <p>営巣地点 <span style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; background-color: pink; border-radius: 50%; border: 1px solid black; margin-right: 5px;"></span></p> </div> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>その 1 : 10m × 10m</p> <p>10m × 10m 植生断面図</p> </div> <div style="margin-top: 10px;"> <p>その 1 植被率 内円(10m × 10m)・外円(50m × 50m)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>群落</th> <th>内円(10m × 10m)</th> <th>外円(50m × 50m)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ススキ群落</td> <td>4%</td> <td>6%</td> </tr> <tr> <td>セイタカアワダチソウ群落</td> <td>14%</td> <td>14%</td> </tr> <tr> <td>セイタカアワダチソウ-ヤマアワ群落</td> <td>18%</td> <td>46%</td> </tr> <tr> <td>セイタカアワダチソウ-ヨシ群落</td> <td>8%</td> <td>60%</td> </tr> <tr> <td>ヤマアワ群落</td> <td>2%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ヤマアワ-ヨシ群落</td> <td>8%</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ヨシ群落</td> <td>1%</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> </div>	群落	内円(10m × 10m)	外円(50m × 50m)	ススキ群落	4%	6%	セイタカアワダチソウ群落	14%	14%	セイタカアワダチソウ-ヤマアワ群落	18%	46%	セイタカアワダチソウ-ヨシ群落	8%	60%	ヤマアワ群落	2%		ヤマアワ-ヨシ群落	8%		ヨシ群落	1%	
群落	内円(10m × 10m)	外円(50m × 50m)																								
ススキ群落	4%	6%																								
セイタカアワダチソウ群落	14%	14%																								
セイタカアワダチソウ-ヤマアワ群落	18%	46%																								
セイタカアワダチソウ-ヨシ群落	8%	60%																								
ヤマアワ群落	2%																									
ヤマアワ-ヨシ群落	8%																									
ヨシ群落	1%																									

図 8.6.1-12(1) 営巣地付近の植生及び植生断面(その 1)

(平成 15 年 6 月 23 日、9 月 12 日の調査結果より作図)

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(14)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																						
247	改訂	<p>調査結果をより詳細に記述することとし、以下のとおり文章を改訂し、図表を追記した。</p> <p>準備書 p247 「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」を改訂</p> <p>準備書 2) 猛禽類調査 d チュウヒ餌資源調査 回収されたペリットの内容物を解析した結果、チュウヒの餌資源は、鳥類が 8 割程度を占め、昆虫類や哺乳類はほとんど含まれていなかった。</p> <p>評価書 (p. 266) 3) 猛禽類調査 d チュウヒ餌資源調査 回収されたペリットの内容物を解析した結果を図 8.6.1-13 に示す。チュウヒ類の餌資源は、鳥類が 8 割程度(重量比)を占め、哺乳類や昆虫類はそれぞれ 1 割未満であった。一般に、チュウヒは、ハタネズミ等のネズミ類を餌生物としていることが知られているが、木曾岬干拓地に生息するチュウヒは、主に鳥類を餌生物としていることを確認した。 また、文献によりチュウヒの 1 日あたりの餌摂取量を推定し、表 8.6.1-12 に示した。</p> <div data-bbox="699 689 1155 1084" data-label="Figure"> <table border="1"> <caption>図 8.6.1-13 回収したペリットの内容物の解析結果</caption> <thead> <tr> <th>採取場所</th> <th>鳥類 (%)</th> <th>哺乳類 (%)</th> <th>昆虫類 (%)</th> <th>その他 (%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>営巣地+ねぐら</td> <td>80.1%</td> <td>7.9%</td> <td>7.6%</td> <td>4.4%</td> </tr> <tr> <td>営巣地</td> <td>84.0%</td> <td>1.8%</td> <td>14.2%</td> <td>6.2%</td> </tr> <tr> <td>ねぐら</td> <td>79.2%</td> <td>9.6%</td> <td>5.0%</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> </div> <p>*ねぐらから回収したペリットには、一部ハイロチュウヒのペリットが含まれていると考えられるため、営巣地とねぐらを分けて解析した。</p> <p>図 8.6.1-13 回収したペリットの内容物の解析結果 (平成 15 年 8 月 11 日、9 月 12 日、平成 16 年 1 月 13 日、2 月 10 日の調査結果より作図)</p> <p>表 8.6.1-12 チュウヒの 1 日あたりの餌摂取量</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">種名</th> <th rowspan="2">体重 (g)<sup>*1</sup></th> <th colspan="2">1 日あたりの餌摂取量 (g/日)<sup>*2</sup></th> <th rowspan="2">備考</th> </tr> <tr> <th>成鳥</th> <th>雛</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="2">チュウヒ</td> <td>雄: 550</td> <td>成鳥</td> <td>約 90</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>雌: 850</td> <td>雛</td> <td>約 140</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">ハイロチュウヒ</td> <td>雄: 370</td> <td>成鳥</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>雌: 546</td> <td>雛</td> <td>138±28</td> <td>(21 日～45 日齢)の 1 日の餌摂取量</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">アフリカチュウヒ</td> <td>雄: 430</td> <td>成鳥</td> <td>58±15</td> <td>産卵直前における雄の雌への給餌量</td> </tr> <tr> <td>雌: 570</td> <td>雛</td> <td>136±15</td> <td>(21 日～45 日齢)の 1 日の餌摂取量</td> </tr> </tbody> </table> <p>*1) チュウヒの体重については、有識者である中川富男氏からの聴き取りによる。ハイロチュウヒ、アフリカチュウヒの体重については、Harriers of the world, Simmons, R.E. (2000), Oxford University Press に記載されている値を採用した。 *2) アフリカチュウヒ及びハイロチュウヒの 1 日あたりの餌摂取量は Harriers of the world, Simmons, R.E. (2000), Oxford University Press に記載されている値であり、チュウヒ成鳥の 1 日あたりの餌摂取量はそれらの値を参考に体重から推定したものである。</p> <p>行動圏調査でチュウヒが捕獲対象とした鳥類及び採取したチュウヒ類のペリットから判明した鳥類は、マガモ、コガモ、キジバト、カワラヒワ等であった。また、現地調査で確認した鳥類のうち、聴き取り調査及び文献調査によってチュウヒの餌生物であることを確認した鳥類を抽出し、ペリット調査より判明した餌鳥類と併せて表 8.6.1-13 に示した。 聴き取り調査によると、その他にカエル類、魚類も捕食するとされている。</p>	採取場所	鳥類 (%)	哺乳類 (%)	昆虫類 (%)	その他 (%)	営巣地+ねぐら	80.1%	7.9%	7.6%	4.4%	営巣地	84.0%	1.8%	14.2%	6.2%	ねぐら	79.2%	9.6%	5.0%		種名	体重 (g) <sup>*1</sup>	1 日あたりの餌摂取量 (g/日) <sup>*2</sup>		備考	成鳥	雛	チュウヒ	雄: 550	成鳥	約 90	-	雌: 850	雛	約 140	-	ハイロチュウヒ	雄: 370	成鳥	-	-	雌: 546	雛	138±28	(21 日～45 日齢)の 1 日の餌摂取量	アフリカチュウヒ	雄: 430	成鳥	58±15	産卵直前における雄の雌への給餌量	雌: 570	雛	136±15	(21 日～45 日齢)の 1 日の餌摂取量
採取場所	鳥類 (%)	哺乳類 (%)	昆虫類 (%)	その他 (%)																																																				
営巣地+ねぐら	80.1%	7.9%	7.6%	4.4%																																																				
営巣地	84.0%	1.8%	14.2%	6.2%																																																				
ねぐら	79.2%	9.6%	5.0%																																																					
種名	体重 (g) <sup>*1</sup>	1 日あたりの餌摂取量 (g/日) <sup>*2</sup>		備考																																																				
		成鳥	雛																																																					
チュウヒ	雄: 550	成鳥	約 90	-																																																				
	雌: 850	雛	約 140	-																																																				
ハイロチュウヒ	雄: 370	成鳥	-	-																																																				
	雌: 546	雛	138±28	(21 日～45 日齢)の 1 日の餌摂取量																																																				
アフリカチュウヒ	雄: 430	成鳥	58±15	産卵直前における雄の雌への給餌量																																																				
	雌: 570	雛	136±15	(21 日～45 日齢)の 1 日の餌摂取量																																																				

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (15)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															
-	追記	<p>干拓地内で確認された鳥類のうち、チュウヒの餌鳥類の個体密度等を整理し、以下の表を追記した。</p> <p>「6.1.2 鳥類 (5) 調査結果」に表を追記 (評価書 p.267~268)</p> <p style="text-align: center;">表 8.6.1-13 チュウヒの餌鳥類</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th rowspan="2">科名</th> <th rowspan="2">種名<sup>*1</sup></th> <th colspan="3">選定根拠<sup>*2</sup></th> <th colspan="2">現存量(カルガモとケリは参考値)<sup>*3</sup></th> <th rowspan="2">個体密度最大値の確認年月</th> <th rowspan="2">渡りの区分</th> </tr> <tr> <th>現地</th> <th>聴き取り</th> <th>文献</th> <th>最小値</th> <th>最大値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="9">サギ カモ</td> <td>アオサギ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>+</td> <td>+</td> <td>1370</td> <td>H14.8 (留鳥)</td> </tr> <tr> <td>マガモ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>多い</td> <td>1200</td> <td>H15.3 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>カルガモ (成鳥)</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>+</td> <td>普通</td> <td>1163</td> <td>H14.4 留鳥</td> </tr> <tr> <td>カルガモ (雛)</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>普通</td> <td>-</td> <td>H15.4 留鳥</td> </tr> <tr> <td>コガモ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>普通</td> <td>330</td> <td>H15.3 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>オナガガモ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>+</td> <td>最大: 1,205 最小: 620</td> <td>H14.5 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>ホシハジロ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>普通</td> <td>最大: 939 最小: 678</td> <td>H15.1 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>キンクロハジロ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>+</td> <td>最大: 1,019 最小: 564</td> <td>H15.3 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>カモ類<sup>*6</sup></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>-</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="3">キジ</td> <td>ウズラ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td>0</td> <td>+</td> <td>112</td> <td>H15.12 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>キジ(成鳥)</td> <td></td> <td>○</td> <td>○</td> <td>0</td> <td>+</td> <td>996</td> <td>H15.3 留鳥</td> </tr> <tr> <td>キジ(雛)</td> <td></td> <td>◎</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>-</td> <td></td> </tr> <tr> <td rowspan="2">クイナ</td> <td>ヒクイナ(成鳥)</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>+</td> <td>81</td> <td>H15.3 旅鳥</td> </tr> <tr> <td>バン</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>+</td> <td>282 (202 n=1)</td> <td>H14.5 夏鳥</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">チドリ</td> <td>コチドリ</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>+</td> <td>39</td> <td>H15.7 夏鳥</td> </tr> <tr> <td>ケリ(雛)</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>+</td> <td>-</td> <td>H15.2 留鳥 H15.3 留鳥 H15.4 留鳥</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">ハト</td> <td>キジバト</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>+</td> <td>少</td> <td>248 (234.5 n=2)</td> <td>H14.9 留鳥</td> </tr> <tr> <td>カワラバト(ドバト)(成鳥)</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>少</td> <td>314</td> <td>H16.1 留鳥</td> </tr> <tr> <td>ハト類<sup>*6</sup></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>-</td> <td></td> </tr> <tr> <td>ヒバリ</td> <td>ヒバリ(雛)</td> <td></td> <td>◎</td> <td>○</td> <td>0</td> <td>少</td> <td>-</td> <td>H14.4 留鳥</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">ツバメ</td> <td>ショウドウツバメ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>多</td> <td>12 (12.5 n=24)</td> <td>H14.10 旅鳥</td> </tr> <tr> <td>ツバメ(雛)</td> <td></td> <td>◎</td> <td>○</td> <td></td> <td>多</td> <td>-</td> <td>H14.8 夏鳥</td> </tr> <tr> <td>イワツバメ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>+</td> <td>16</td> <td>H14.8 夏鳥</td> </tr> <tr> <td>セキレイ</td> <td>タヒバリ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>少</td> <td>23 (18.2 n=2)</td> <td>H15.11 冬鳥</td> </tr> <tr> <td>ヒヨドリ</td> <td>ヒヨドリ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td>0</td> <td>少</td> <td>86</td> <td>H15.10 留鳥</td> </tr> <tr> <td>ツグミ</td> <td>ツグミ(成鳥)</td> <td></td> <td>○</td> <td>○</td> <td></td> <td>少</td> <td>78 (66.8 n=98)</td> <td>H15.2 冬鳥</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">ウグイス</td> <td>オオヨシキリ(成鳥)</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>+</td> <td>31 (29.0 n=13)</td> <td>H14.7 夏鳥</td> </tr> <tr> <td>オオヨシキリ(雛)</td> <td></td> <td>◎</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>-</td> <td></td> </tr> <tr> <td>セッカ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td>0</td> <td>普通</td> <td>10 (10.4 n=2)</td> <td>H14.5 留鳥</td> </tr> <tr> <td>ホオジロ</td> <td>ホオジロ</td> <td></td> <td></td> <td>○</td> <td>0</td> <td>少</td> <td>23 (21.0 n=4)</td> <td>H16.3 留鳥</td> </tr> <tr> <td>アトリ</td> <td>カワラヒワ</td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td>0</td> <td>多</td> <td>20 (21.2 n=65)</td> <td>H14.10 留鳥</td> </tr> <tr> <td>ハタオリドリ</td> <td>スズメ(雛)</td> <td></td> <td>◎</td> <td>○</td> <td>0</td> <td>多</td> <td>-</td> <td>H15.8 留鳥</td> </tr> <tr> <td>ムクドリ</td> <td>ムクドリ</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>普通</td> <td>86</td> <td>H15.2 留鳥</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">カラス</td> <td>ハシボソガラス(成鳥)</td> <td></td> <td>○</td> <td></td> <td>0</td> <td>普通</td> <td>563</td> <td>H15.1 留鳥</td> </tr> <tr> <td>カラス類<sup>*6</sup></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>-</td> <td></td> </tr> <tr> <td>-</td> <td>スズメ大の小鳥<sup>*6</sup></td> <td>○</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>-</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>*1) 種名の後ろにある(成鳥)及び(雛)の記載については、聴き取り調査により得られた結果である。特に記載の無いものについては年齢が不明な種。</p> <p>*2) 現地：現地調査で実際にチュウヒが狩りを行ったことが観察された鳥類及び採取したペリットから種まで判明した鳥類 聴き取り：有識者からの聴き取り ◎：有識者から高頻度で捕獲すると助言を受けた鳥類 文献：「図鑑日本のワシタカ類 文一総合出版」に餌として捕獲された記録があるもの</p> <p>*3) 成鳥及び雛の両方が餌生物となる種の現存量については、各々の現存量が不明なため、まとめて示した。</p> <p>*4) 冬鳥、夏鳥、旅鳥については最大値を、留鳥、(留鳥)については最小値、最大値を示した。最大値については、確認された年月も示した。また、カルガモ、ケリについては、参考として、成鳥も含めた個体密度を示した。 0：確認個体なし +：確認個体密度3個体/10ha未満 少：確認個体密度3個体/10ha以上10個体/10ha未満 普通：確認個体密度10個体/10ha以上50個体/10ha未満 多：確認個体密度50個体/10ha以上</p> <p>*5) 鳥類の体重は野鳥便覧に記載されている平均値を採用したが、雛の体重まで記載されていないため、雛が餌生物となる鳥類の体重は「-」とした。オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロについては、平均値の記載が無いため、野鳥便覧(榎本佳樹 日本野鳥の会大阪支部 昭和16年)に記載されている最大値と最小値の両方を記載した。カワラバト(ドバト)については体重の記載が無く、キジについては平均値の記載が無いため、別の文献の値を採用した。それぞれ参考にした文献は以下の通りである。 キジ：森に棲む野鳥の生態学 由井正敏 創文 1998 カワラバト(ドバト)：ドバト害防除に対する基礎研究 (財)山階鳥類研究所 ( )内の数字は、有識者である中川富氏からのデータの平均値で、nはサンプル数を示す。</p> <p>*6) ペリットから羽根や骨が確認されているが、種名が不明なもの。</p>	科名	種名 <sup>*1</sup>	選定根拠 <sup>*2</sup>			現存量(カルガモとケリは参考値) <sup>*3</sup>		個体密度最大値の確認年月	渡りの区分	現地	聴き取り	文献	最小値	最大値	サギ カモ	アオサギ	○			+	+	1370	H14.8 (留鳥)	マガモ	○				多い	1200	H15.3 冬鳥	カルガモ (成鳥)	○			+	普通	1163	H14.4 留鳥	カルガモ (雛)		○		0	普通	-	H15.4 留鳥	コガモ	○			0	普通	330	H15.3 冬鳥	オナガガモ	○			0	+	最大: 1,205 最小: 620	H14.5 冬鳥	ホシハジロ	○			0	普通	最大: 939 最小: 678	H15.1 冬鳥	キンクロハジロ	○			0	+	最大: 1,019 最小: 564	H15.3 冬鳥	カモ類 <sup>*6</sup>	○					-		キジ	ウズラ			○	0	+	112	H15.12 冬鳥	キジ(成鳥)		○	○	0	+	996	H15.3 留鳥	キジ(雛)		◎				-		クイナ	ヒクイナ(成鳥)		○		0	+	81	H15.3 旅鳥	バン		○		0	+	282 (202 n=1)	H14.5 夏鳥	チドリ	コチドリ		○			+	39	H15.7 夏鳥	ケリ(雛)		○		0	+	-	H15.2 留鳥 H15.3 留鳥 H15.4 留鳥	ハト	キジバト	○			+	少	248 (234.5 n=2)	H14.9 留鳥	カワラバト(ドバト)(成鳥)		○		0	少	314	H16.1 留鳥	ハト類 <sup>*6</sup>	○					-		ヒバリ	ヒバリ(雛)		◎	○	0	少	-	H14.4 留鳥	ツバメ	ショウドウツバメ			○		多	12 (12.5 n=24)	H14.10 旅鳥	ツバメ(雛)		◎	○		多	-	H14.8 夏鳥	イワツバメ			○		+	16	H14.8 夏鳥	セキレイ	タヒバリ			○		少	23 (18.2 n=2)	H15.11 冬鳥	ヒヨドリ	ヒヨドリ			○	0	少	86	H15.10 留鳥	ツグミ	ツグミ(成鳥)		○	○		少	78 (66.8 n=98)	H15.2 冬鳥	ウグイス	オオヨシキリ(成鳥)		○			+	31 (29.0 n=13)	H14.7 夏鳥	オオヨシキリ(雛)		◎				-		セッカ			○	0	普通	10 (10.4 n=2)	H14.5 留鳥	ホオジロ	ホオジロ			○	0	少	23 (21.0 n=4)	H16.3 留鳥	アトリ	カワラヒワ	○			0	多	20 (21.2 n=65)	H14.10 留鳥	ハタオリドリ	スズメ(雛)		◎	○	0	多	-	H15.8 留鳥	ムクドリ	ムクドリ		○		0	普通	86	H15.2 留鳥	カラス	ハシボソガラス(成鳥)		○		0	普通	563	H15.1 留鳥	カラス類 <sup>*6</sup>	○					-		-	スズメ大の小鳥 <sup>*6</sup>	○					-	
科名	種名 <sup>*1</sup>	選定根拠 <sup>*2</sup>			現存量(カルガモとケリは参考値) <sup>*3</sup>		個体密度最大値の確認年月	渡りの区分																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
		現地	聴き取り	文献	最小値	最大値																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
サギ カモ	アオサギ	○			+	+	1370	H14.8 (留鳥)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	マガモ	○				多い	1200	H15.3 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	カルガモ (成鳥)	○			+	普通	1163	H14.4 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	カルガモ (雛)		○		0	普通	-	H15.4 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	コガモ	○			0	普通	330	H15.3 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	オナガガモ	○			0	+	最大: 1,205 最小: 620	H14.5 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	ホシハジロ	○			0	普通	最大: 939 最小: 678	H15.1 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	キンクロハジロ	○			0	+	最大: 1,019 最小: 564	H15.3 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	カモ類 <sup>*6</sup>	○					-																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
キジ	ウズラ			○	0	+	112	H15.12 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	キジ(成鳥)		○	○	0	+	996	H15.3 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	キジ(雛)		◎				-																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
クイナ	ヒクイナ(成鳥)		○		0	+	81	H15.3 旅鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	バン		○		0	+	282 (202 n=1)	H14.5 夏鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
チドリ	コチドリ		○			+	39	H15.7 夏鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	ケリ(雛)		○		0	+	-	H15.2 留鳥 H15.3 留鳥 H15.4 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ハト	キジバト	○			+	少	248 (234.5 n=2)	H14.9 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	カワラバト(ドバト)(成鳥)		○		0	少	314	H16.1 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	ハト類 <sup>*6</sup>	○					-																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
ヒバリ	ヒバリ(雛)		◎	○	0	少	-	H14.4 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ツバメ	ショウドウツバメ			○		多	12 (12.5 n=24)	H14.10 旅鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	ツバメ(雛)		◎	○		多	-	H14.8 夏鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	イワツバメ			○		+	16	H14.8 夏鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
セキレイ	タヒバリ			○		少	23 (18.2 n=2)	H15.11 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ヒヨドリ	ヒヨドリ			○	0	少	86	H15.10 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ツグミ	ツグミ(成鳥)		○	○		少	78 (66.8 n=98)	H15.2 冬鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ウグイス	オオヨシキリ(成鳥)		○			+	31 (29.0 n=13)	H14.7 夏鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	オオヨシキリ(雛)		◎				-																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
	セッカ			○	0	普通	10 (10.4 n=2)	H14.5 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ホオジロ	ホオジロ			○	0	少	23 (21.0 n=4)	H16.3 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
アトリ	カワラヒワ	○			0	多	20 (21.2 n=65)	H14.10 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ハタオリドリ	スズメ(雛)		◎	○	0	多	-	H15.8 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
ムクドリ	ムクドリ		○		0	普通	86	H15.2 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
カラス	ハシボソガラス(成鳥)		○		0	普通	563	H15.1 留鳥																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
	カラス類 <sup>*6</sup>	○					-																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
-	スズメ大の小鳥 <sup>*6</sup>	○					-																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (16)

頁	区分	変更の概要及び理由				
253	追記	<p>調査項目ごとに目的等を明示することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p253 「6.1.4 昆虫類 (1) 調査項目」に文章を追記 (評価書 p. 274)</p> <p><b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマ生息状況</b>                      平成 14 年度に実施した昆虫類相調査において愛知県レッドデータブックの絶滅危惧Ⅱ類に該当するアオヤンマ、三重県レッドデータブックの希少種等に該当するネアカヨシヤンマが確認された。一般に、アオヤンマは平地の湿地、ネアカヨシヤンマは樹林近くの湿地で生息することが知られているが、干拓地内には水路を含め湿地が点在し、局所的に樹林も確認されている。以上のことから、両種は干拓地内の湿地や水路に強く依存していると考えられた。そこで、干拓地内でのアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況を把握するため、平成 15 年度に調査を実施した。</p>				
253	追記	<p>重要な種の調査に関し、調査範囲を設定した根拠等を明示することとし、以下の文章を追記した。</p> <p>準備書 p253 「6.1.4 昆虫類 (2) 調査範囲及び調査経路・地点」に文章を追記 (評価書 p. 274)</p> <p><b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマ生息状況</b>                      アオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況調査範囲を図 8.6.1-18 に示した。                      調査範囲の設定にあたっては、平成 14 年度の結果を考慮し、干拓地全域について踏査を行った。その結果、干拓地内におけるアオヤンマの主な生息場所は、平成 14 年度に幼虫が確認された地点及びその周辺の水路であると考えられた。また、一般に、ネアカヨシヤンマは樹林近くの湿地で生息することが知られていることから、干拓地内におけるネアカヨシヤンマの主な生息場所は、排水機場の北にある樹林周辺の水路及び湿地であると考えられた。以上のことから、上記 2 箇所を調査範囲として設定した。</p>				
257	改訂	<p>調査方法をより正確に記述することとし、以下のとおり文章を改訂した。</p> <p>準備書 p257 「6.1.4 昆虫類 (4) 調査方法」を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td> <b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況</b>                      干拓地内でアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの 2 種について、干拓地内での生息状況を把握することを目的として実施した。                 </td> </tr> <tr> <td>評価書 (p. 279)</td> <td> <b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマ生息状況</b>                      干拓地内でのアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況を把握するため、6 月に調査範囲を 2 箇所設定した。                      その後、アオヤンマの成虫の出現が最盛期となる 6 月及び 7 月、ネアカヨシヤンマの成虫の出現が最盛期となる 7 月及び 8 月に成虫の任意採集調査を実施した。幼虫については、同定を確実にするため、両種の幼虫が終齢幼虫となる 3 月～4 月にできるだけ近い時期に採集することが望ましいことから、10 月及び 2 月に任意採集調査を実施した。                 </td> </tr> </table>	準備書	<b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況</b> 干拓地内でアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの 2 種について、干拓地内での生息状況を把握することを目的として実施した。	評価書 (p. 279)	<b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマ生息状況</b> 干拓地内でのアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況を把握するため、6 月に調査範囲を 2 箇所設定した。 その後、アオヤンマの成虫の出現が最盛期となる 6 月及び 7 月、ネアカヨシヤンマの成虫の出現が最盛期となる 7 月及び 8 月に成虫の任意採集調査を実施した。幼虫については、同定を確実にするため、両種の幼虫が終齢幼虫となる 3 月～4 月にできるだけ近い時期に採集することが望ましいことから、10 月及び 2 月に任意採集調査を実施した。
準備書	<b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況</b> 干拓地内でアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの 2 種について、干拓地内での生息状況を把握することを目的として実施した。					
評価書 (p. 279)	<b>2) アオヤンマ及びネアカヨシヤンマ生息状況</b> 干拓地内でのアオヤンマ及びネアカヨシヤンマの生息状況を把握するため、6 月に調査範囲を 2 箇所設定した。 その後、アオヤンマの成虫の出現が最盛期となる 6 月及び 7 月、ネアカヨシヤンマの成虫の出現が最盛期となる 7 月及び 8 月に成虫の任意採集調査を実施した。幼虫については、同定を確実にするため、両種の幼虫が終齢幼虫となる 3 月～4 月にできるだけ近い時期に採集することが望ましいことから、10 月及び 2 月に任意採集調査を実施した。					
257	改訂	<p>科数に誤りがあったため確認科数を改訂した。</p> <p>準備書 p257 「6.1.4 昆虫類 (5) 調査結果」の文章を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td> <b>1) 昆虫類相</b>                      全調査方法で 15 目 210 科 978 種が確認された (種まで同定できないものを含む)。目別の確認種数を表 8.6.1-16 に示した (確認種一覧表は資料 8.6.1.4 参照)。                 </td> </tr> <tr> <td>評価書 (p. 279)</td> <td> <b>2) 昆虫類相</b>                      平成 14 年度から平成 15 年度までの調査の結果、15 目 209 科 978 種の昆虫類が確認された (種まで同定できないものを含む)。目別の確認種数を表 8.6.1-20 に示した。                 </td> </tr> </table>	準備書	<b>1) 昆虫類相</b> 全調査方法で 15 目 210 科 978 種が確認された (種まで同定できないものを含む)。目別の確認種数を表 8.6.1-16 に示した (確認種一覧表は資料 8.6.1.4 参照)。	評価書 (p. 279)	<b>2) 昆虫類相</b> 平成 14 年度から平成 15 年度までの調査の結果、15 目 209 科 978 種の昆虫類が確認された (種まで同定できないものを含む)。目別の確認種数を表 8.6.1-20 に示した。
準備書	<b>1) 昆虫類相</b> 全調査方法で 15 目 210 科 978 種が確認された (種まで同定できないものを含む)。目別の確認種数を表 8.6.1-16 に示した (確認種一覧表は資料 8.6.1.4 参照)。					
評価書 (p. 279)	<b>2) 昆虫類相</b> 平成 14 年度から平成 15 年度までの調査の結果、15 目 209 科 978 種の昆虫類が確認された (種まで同定できないものを含む)。目別の確認種数を表 8.6.1-20 に示した。					

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(17)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																					
257	改訂	<p>科数及び比率に誤りがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p257 「6.1.4 昆虫類 (5) 調査結果」の表を改訂 (下線: 改訂、取消線: 削除) (評価書 p. 279)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-16 表 8.6.1-20 目別確認種数</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>No.</th> <th>目名</th> <th colspan="2">干拓地の確認種数 確認科数及び種数</th> <th>比率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>トビムシ</td><td>6 科</td><td>6 種</td><td>0.6%</td></tr> <tr><td>2</td><td>トンボ</td><td>6 科</td><td>18 種</td><td><u>1.9</u> <del>1.8</del>%</td></tr> <tr><td>3</td><td>ゴキブリ</td><td>1 科</td><td>2 種</td><td>0.2%</td></tr> <tr><td>4</td><td>カマキリ</td><td>1 科</td><td>5 種</td><td>0.5%</td></tr> <tr><td>5</td><td>シロアリ</td><td>1 科</td><td>2 種</td><td>0.2%</td></tr> <tr><td>6</td><td>バッタ</td><td>13 科</td><td>48 種</td><td>4.9%</td></tr> <tr><td>7</td><td>ハサミムシ</td><td>2 科</td><td>4 種</td><td>0.4%</td></tr> <tr><td>8</td><td>チャタテムシ</td><td><u>1</u> <del>2</del> 科</td><td>2 種</td><td>0.2%</td></tr> <tr><td>9</td><td>カメムシ</td><td>36 科</td><td>148 種</td><td>15.1%</td></tr> <tr><td>10</td><td>アミメカゲロウ</td><td>3 科</td><td>7 種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>11</td><td>コウチュウ</td><td>47 科</td><td>305 種</td><td>31.2%</td></tr> <tr><td>12</td><td>ハチ</td><td>21 科</td><td>86 種</td><td>8.8%</td></tr> <tr><td>13</td><td>ハエ</td><td>40 科</td><td>148 種</td><td>15.1%</td></tr> <tr><td>14</td><td>トビケラ</td><td>2 科</td><td>3 種</td><td>0.3%</td></tr> <tr><td>15</td><td>チョウ</td><td>29 科</td><td>194 種</td><td><u>19.9</u> <del>19.8</del>%</td></tr> <tr><td>合計</td><td>15 目</td><td>209 <del>210</del> 科</td><td>978 種</td><td>100.0%</td></tr> </tbody> </table>	No.	目名	干拓地の確認種数 確認科数及び種数		比率	1	トビムシ	6 科	6 種	0.6%	2	トンボ	6 科	18 種	<u>1.9</u> <del>1.8</del> %	3	ゴキブリ	1 科	2 種	0.2%	4	カマキリ	1 科	5 種	0.5%	5	シロアリ	1 科	2 種	0.2%	6	バッタ	13 科	48 種	4.9%	7	ハサミムシ	2 科	4 種	0.4%	8	チャタテムシ	<u>1</u> <del>2</del> 科	2 種	0.2%	9	カメムシ	36 科	148 種	15.1%	10	アミメカゲロウ	3 科	7 種	0.7%	11	コウチュウ	47 科	305 種	31.2%	12	ハチ	21 科	86 種	8.8%	13	ハエ	40 科	148 種	15.1%	14	トビケラ	2 科	3 種	0.3%	15	チョウ	29 科	194 種	<u>19.9</u> <del>19.8</del> %	合計	15 目	209 <del>210</del> 科	978 種	100.0%
No.	目名	干拓地の確認種数 確認科数及び種数		比率																																																																																			
1	トビムシ	6 科	6 種	0.6%																																																																																			
2	トンボ	6 科	18 種	<u>1.9</u> <del>1.8</del> %																																																																																			
3	ゴキブリ	1 科	2 種	0.2%																																																																																			
4	カマキリ	1 科	5 種	0.5%																																																																																			
5	シロアリ	1 科	2 種	0.2%																																																																																			
6	バッタ	13 科	48 種	4.9%																																																																																			
7	ハサミムシ	2 科	4 種	0.4%																																																																																			
8	チャタテムシ	<u>1</u> <del>2</del> 科	2 種	0.2%																																																																																			
9	カメムシ	36 科	148 種	15.1%																																																																																			
10	アミメカゲロウ	3 科	7 種	0.7%																																																																																			
11	コウチュウ	47 科	305 種	31.2%																																																																																			
12	ハチ	21 科	86 種	8.8%																																																																																			
13	ハエ	40 科	148 種	15.1%																																																																																			
14	トビケラ	2 科	3 種	0.3%																																																																																			
15	チョウ	29 科	194 種	<u>19.9</u> <del>19.8</del> %																																																																																			
合計	15 目	209 <del>210</del> 科	978 種	100.0%																																																																																			
262	改訂	<p>比率等に誤りがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p262 「6.1.5 クモ類 (5) 調査結果」の表を改訂 (下線: 改訂、取消線: 削除) (評価書 p. 284)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-18 表 8.6.1-22 科別確認種数</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>No.</th> <th>科名</th> <th>干拓地 確認種数</th> <th>比率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>ジグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>2</td><td>ガケジグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>3</td><td>ハグモ</td><td>3 種</td><td>3.0%</td></tr> <tr><td>4</td><td>ユウレイグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>5</td><td>ヒメグモ</td><td>11 種</td><td>10.9%</td></tr> <tr><td>6</td><td>ホラヒメグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>7</td><td>サラグモ</td><td>8 種</td><td>7.9%</td></tr> <tr><td>8</td><td>コガネグモ</td><td>15 種</td><td><u>14.8</u> <del>14.9</del>%</td></tr> <tr><td>9</td><td>アシナガグモ</td><td>8 種</td><td>7.9%</td></tr> <tr><td>10</td><td>タナグモ</td><td>5 種</td><td><u>4.9</u> <del>5.0</del>%</td></tr> <tr><td>11</td><td>キンダグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>12</td><td>コモリグモ</td><td>13 種</td><td>12.9%</td></tr> <tr><td>13</td><td>ササグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>14</td><td>フクログモ</td><td>8 種</td><td>7.9%</td></tr> <tr><td>15</td><td>シボグモ</td><td>1 種</td><td>1.0%</td></tr> <tr><td>16</td><td>ワシグモ</td><td>2 種</td><td>2.0%</td></tr> <tr><td>17</td><td>カニグモ</td><td>4 種</td><td><u>3.9</u> <del>4.0</del>%</td></tr> <tr><td>18</td><td>エビグモ</td><td>3 種</td><td>3.0%</td></tr> <tr><td>19</td><td>ハエトリグモ</td><td>14 種</td><td>13.9%</td></tr> <tr><td>合計</td><td>19 科</td><td>101 種</td><td>100.0%</td></tr> </tbody> </table>	No.	科名	干拓地 確認種数	比率	1	ジグモ	1 種	1.0%	2	ガケジグモ	1 種	1.0%	3	ハグモ	3 種	3.0%	4	ユウレイグモ	1 種	1.0%	5	ヒメグモ	11 種	10.9%	6	ホラヒメグモ	1 種	1.0%	7	サラグモ	8 種	7.9%	8	コガネグモ	15 種	<u>14.8</u> <del>14.9</del> %	9	アシナガグモ	8 種	7.9%	10	タナグモ	5 種	<u>4.9</u> <del>5.0</del> %	11	キンダグモ	1 種	1.0%	12	コモリグモ	13 種	12.9%	13	ササグモ	1 種	1.0%	14	フクログモ	8 種	7.9%	15	シボグモ	1 種	1.0%	16	ワシグモ	2 種	2.0%	17	カニグモ	4 種	<u>3.9</u> <del>4.0</del> %	18	エビグモ	3 種	3.0%	19	ハエトリグモ	14 種	13.9%	合計	19 科	101 種	100.0%	
No.	科名	干拓地 確認種数	比率																																																																																				
1	ジグモ	1 種	1.0%																																																																																				
2	ガケジグモ	1 種	1.0%																																																																																				
3	ハグモ	3 種	3.0%																																																																																				
4	ユウレイグモ	1 種	1.0%																																																																																				
5	ヒメグモ	11 種	10.9%																																																																																				
6	ホラヒメグモ	1 種	1.0%																																																																																				
7	サラグモ	8 種	7.9%																																																																																				
8	コガネグモ	15 種	<u>14.8</u> <del>14.9</del> %																																																																																				
9	アシナガグモ	8 種	7.9%																																																																																				
10	タナグモ	5 種	<u>4.9</u> <del>5.0</del> %																																																																																				
11	キンダグモ	1 種	1.0%																																																																																				
12	コモリグモ	13 種	12.9%																																																																																				
13	ササグモ	1 種	1.0%																																																																																				
14	フクログモ	8 種	7.9%																																																																																				
15	シボグモ	1 種	1.0%																																																																																				
16	ワシグモ	2 種	2.0%																																																																																				
17	カニグモ	4 種	<u>3.9</u> <del>4.0</del> %																																																																																				
18	エビグモ	3 種	3.0%																																																																																				
19	ハエトリグモ	14 種	13.9%																																																																																				
合計	19 科	101 種	100.0%																																																																																				

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(18)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																									
265	改訂	<p>比率等に誤りがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p265 「6.1.6 土壤動物 (5) 調査結果」の表を改訂 (下線: 改訂、取消線: 削除) (評価書 p. 287)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-20 表 8.6.1-24 目別確認種数</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>No.</th> <th>目 名</th> <th colspan="2">確認科数及び種数</th> <th>比率</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>ウズムシ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>2</td><td>マイマイ</td><td>4科</td><td>6種</td><td>4.2%</td></tr> <tr><td>3</td><td>フトミミズ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>4</td><td>ナガミミズ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>5</td><td>イトミミズ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>6</td><td>カニムシ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>7</td><td>ダニ</td><td>30科</td><td>30種</td><td>21.1%</td></tr> <tr><td>8</td><td>クモ</td><td>5科</td><td>9種</td><td><u>6.4</u> <del>6.9</del>%</td></tr> <tr><td>9</td><td>ワラジムシ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>10</td><td>ツムギヤスデ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>11</td><td>オビヤスデ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>12</td><td>イシムカデ</td><td>1科</td><td>2種</td><td>1.4%</td></tr> <tr><td>13</td><td>トビムシ</td><td>6科</td><td>6種</td><td>4.2%</td></tr> <tr><td>14</td><td>シロアリ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>15</td><td>カメムシ</td><td>3科</td><td>3種</td><td>2.1%</td></tr> <tr><td>16</td><td>コウチュウ</td><td>14科</td><td>48種</td><td>33.8%</td></tr> <tr><td>17</td><td>ハチ</td><td>2科</td><td>17種</td><td>12.0%</td></tr> <tr><td>18</td><td>ハエ</td><td>8科</td><td>11種</td><td><u>7.8</u> <del>7.7</del>%</td></tr> <tr><td>19</td><td>チョウ</td><td>1科</td><td>1種</td><td>0.7%</td></tr> <tr><td>合計</td><td>19目</td><td>83科</td><td>142種</td><td>100.0%</td></tr> </tbody> </table>	No.	目 名	確認科数及び種数		比率	1	ウズムシ	1科	1種	0.7%	2	マイマイ	4科	6種	4.2%	3	フトミミズ	1科	1種	0.7%	4	ナガミミズ	1科	1種	0.7%	5	イトミミズ	1科	1種	0.7%	6	カニムシ	1科	1種	0.7%	7	ダニ	30科	30種	21.1%	8	クモ	5科	9種	<u>6.4</u> <del>6.9</del> %	9	ワラジムシ	1科	1種	0.7%	10	ツムギヤスデ	1科	1種	0.7%	11	オビヤスデ	1科	1種	0.7%	12	イシムカデ	1科	2種	1.4%	13	トビムシ	6科	6種	4.2%	14	シロアリ	1科	1種	0.7%	15	カメムシ	3科	3種	2.1%	16	コウチュウ	14科	48種	33.8%	17	ハチ	2科	17種	12.0%	18	ハエ	8科	11種	<u>7.8</u> <del>7.7</del> %	19	チョウ	1科	1種	0.7%	合計	19目	83科	142種	100.0%
No.	目 名	確認科数及び種数		比率																																																																																																							
1	ウズムシ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
2	マイマイ	4科	6種	4.2%																																																																																																							
3	フトミミズ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
4	ナガミミズ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
5	イトミミズ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
6	カニムシ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
7	ダニ	30科	30種	21.1%																																																																																																							
8	クモ	5科	9種	<u>6.4</u> <del>6.9</del> %																																																																																																							
9	ワラジムシ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
10	ツムギヤスデ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
11	オビヤスデ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
12	イシムカデ	1科	2種	1.4%																																																																																																							
13	トビムシ	6科	6種	4.2%																																																																																																							
14	シロアリ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
15	カメムシ	3科	3種	2.1%																																																																																																							
16	コウチュウ	14科	48種	33.8%																																																																																																							
17	ハチ	2科	17種	12.0%																																																																																																							
18	ハエ	8科	11種	<u>7.8</u> <del>7.7</del> %																																																																																																							
19	チョウ	1科	1種	0.7%																																																																																																							
合計	19目	83科	142種	100.0%																																																																																																							



表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (19)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																																																																																																																																											
266	改訂	<p>鳥類に関し、重要な種の選定漏れがあったため、以下のとおり文章を改訂した。</p> <p>準備書 p266 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の文章を改訂 (下線:改訂)</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td> <p>(1) 陸生動物の重要な種</p> <p>調査結果から次に示す①～⑦により重要な種を選定したところ、表 8.6.1-21 に示すとおり、哺乳類 1 種、鳥類 34 種、昆虫類 5 種、クモ類 1 種が確認された。確認状況は表 8.6.1-22 に、確認地点図を図 8.6.1-15(1)～(10)に示した。なお、猛禽類については、種の保全の観点から確認位置図を記載していない。</p> </td> </tr> <tr> <td>評価書 (p. 288)</td> <td> <p>(1) 陸生動物の重要な種</p> <p>調査結果から次に示す①～⑦により重要な種を選定したところ、表 8.6.1-25 に示すとおり、哺乳類 1 種、鳥類 36 種、昆虫類 5 種、クモ類 1 種が確認された。重要な種の分布・特性と確認状況は表 8.6.1-26(1)～(7)に、確認地点を図 8.6.1-22 (1)～(10)に示した。なお、猛禽類については、種の保全の観点から確認位置は示していない。</p> </td> </tr> </table>	準備書	<p>(1) 陸生動物の重要な種</p> <p>調査結果から次に示す①～⑦により重要な種を選定したところ、表 8.6.1-21 に示すとおり、哺乳類 1 種、鳥類 34 種、昆虫類 5 種、クモ類 1 種が確認された。確認状況は表 8.6.1-22 に、確認地点図を図 8.6.1-15(1)～(10)に示した。なお、猛禽類については、種の保全の観点から確認位置図を記載していない。</p>	評価書 (p. 288)	<p>(1) 陸生動物の重要な種</p> <p>調査結果から次に示す①～⑦により重要な種を選定したところ、表 8.6.1-25 に示すとおり、哺乳類 1 種、鳥類 36 種、昆虫類 5 種、クモ類 1 種が確認された。重要な種の分布・特性と確認状況は表 8.6.1-26(1)～(7)に、確認地点を図 8.6.1-22 (1)～(10)に示した。なお、猛禽類については、種の保全の観点から確認位置は示していない。</p>																																																																																																																																																																																																																							
準備書	<p>(1) 陸生動物の重要な種</p> <p>調査結果から次に示す①～⑦により重要な種を選定したところ、表 8.6.1-21 に示すとおり、哺乳類 1 種、鳥類 34 種、昆虫類 5 種、クモ類 1 種が確認された。確認状況は表 8.6.1-22 に、確認地点図を図 8.6.1-15(1)～(10)に示した。なお、猛禽類については、種の保全の観点から確認位置図を記載していない。</p>																																																																																																																																																																																																																												
評価書 (p. 288)	<p>(1) 陸生動物の重要な種</p> <p>調査結果から次に示す①～⑦により重要な種を選定したところ、表 8.6.1-25 に示すとおり、哺乳類 1 種、鳥類 36 種、昆虫類 5 種、クモ類 1 種が確認された。重要な種の分布・特性と確認状況は表 8.6.1-26(1)～(7)に、確認地点を図 8.6.1-22 (1)～(10)に示した。なお、猛禽類については、種の保全の観点から確認位置は示していない。</p>																																																																																																																																																																																																																												
266	改訂	<p>鳥類に関し、重要な種の選定漏れがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p266 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂、取消線:削除) (評価書 p. 288)</p> <table border="1"> <caption>表 9.6.1-24 表 8.6.1-25 重要な陸生動物 (1/2)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>番号</th> <th>種名</th> <th>①天然記念物</th> <th>②国内希少野生動物種</th> <th>③レッドデータブック</th> <th>④レッドリスト</th> <th>⑤日本の希少な野生水生生物</th> <th>⑥三重県レッドデータブック</th> <th>⑦愛知県レッドデータブック</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>哺乳類</td> <td>1</td> <td>カヤネズミ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td rowspan="19">鳥類</td> <td>1</td> <td>チュウサギ</td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> <td></td> <td>希少</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>カワアイサ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>ミサゴ</td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>ハチクマ</td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>オオタカ</td> <td></td> <td>国内</td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td>危機</td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>ハイタカ</td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>サシバ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>78</td> <td>ハイロチュウヒ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>89</td> <td>チュウヒ</td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td>危機</td> <td>IB 類</td> </tr> <tr> <td>910</td> <td>ハヤブサ</td> <td></td> <td>国内</td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td>危機</td> <td>IB 類</td> </tr> <tr> <td>1411</td> <td>ウズラ</td> <td></td> <td></td> <td>不足</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>不足</td> </tr> <tr> <td>1412</td> <td>クイナ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>1413</td> <td>ヒクイナ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>1414</td> <td>タマシギ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>1415</td> <td>イカルチドリ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>1416</td> <td>シロチドリ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td></td> </tr> <tr> <td>1417</td> <td>オジロトウネン</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>1418</td> <td>ウズラシギ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>1419</td> <td>オバシギ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>1420</td> <td>アカアシシギ</td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td>2421</td> <td>タカブシギ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>22</td> <td>オグロシギ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	番号	種名	①天然記念物	②国内希少野生動物種	③レッドデータブック	④レッドリスト	⑤日本の希少な野生水生生物	⑥三重県レッドデータブック	⑦愛知県レッドデータブック	哺乳類	1	カヤネズミ							II 類	鳥類	1	チュウサギ			準絶		希少			2	カワアイサ							準絶	3	ミサゴ			準絶			希少	準絶	4	ハチクマ			準絶			希少	II 類	5	オオタカ		国内	II 類			危機	準絶	6	ハイタカ			準絶			希少	準絶	7	サシバ							II 類	78	ハイロチュウヒ							準絶	89	チュウヒ			II 類			危機	IB 類	910	ハヤブサ		国内	II 類			危機	IB 類	1411	ウズラ			不足				不足	1412	クイナ							準絶	1413	ヒクイナ							II 類	1414	タマシギ						希少	II 類	1415	イカルチドリ							準絶	1416	シロチドリ						希少		1417	オジロトウネン							準絶	1418	ウズラシギ							II 類	1419	オバシギ							準絶	1420	アカアシシギ			II 類			希少	準絶	2421	タカブシギ							II 類	22	オグロシギ							II 類
分類群	番号	種名	①天然記念物	②国内希少野生動物種	③レッドデータブック	④レッドリスト	⑤日本の希少な野生水生生物	⑥三重県レッドデータブック	⑦愛知県レッドデータブック																																																																																																																																																																																																																				
哺乳類	1	カヤネズミ							II 類																																																																																																																																																																																																																				
鳥類	1	チュウサギ			準絶		希少																																																																																																																																																																																																																						
	2	カワアイサ							準絶																																																																																																																																																																																																																				
	3	ミサゴ			準絶			希少	準絶																																																																																																																																																																																																																				
	4	ハチクマ			準絶			希少	II 類																																																																																																																																																																																																																				
	5	オオタカ		国内	II 類			危機	準絶																																																																																																																																																																																																																				
	6	ハイタカ			準絶			希少	準絶																																																																																																																																																																																																																				
	7	サシバ							II 類																																																																																																																																																																																																																				
	78	ハイロチュウヒ							準絶																																																																																																																																																																																																																				
	89	チュウヒ			II 類			危機	IB 類																																																																																																																																																																																																																				
	910	ハヤブサ		国内	II 類			危機	IB 類																																																																																																																																																																																																																				
	1411	ウズラ			不足				不足																																																																																																																																																																																																																				
	1412	クイナ							準絶																																																																																																																																																																																																																				
	1413	ヒクイナ							II 類																																																																																																																																																																																																																				
	1414	タマシギ						希少	II 類																																																																																																																																																																																																																				
	1415	イカルチドリ							準絶																																																																																																																																																																																																																				
	1416	シロチドリ						希少																																																																																																																																																																																																																					
	1417	オジロトウネン							準絶																																																																																																																																																																																																																				
	1418	ウズラシギ							II 類																																																																																																																																																																																																																				
	1419	オバシギ							準絶																																																																																																																																																																																																																				
1420	アカアシシギ			II 類			希少	準絶																																																																																																																																																																																																																					
2421	タカブシギ							II 類																																																																																																																																																																																																																					
22	オグロシギ							II 類																																																																																																																																																																																																																					

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (20)

頁	区分	変更の概要及び理由																																																																																																																																																																																																														
267	改訂	<p>鳥類に関し、重要な種の選定漏れがあったため、以下のとおり表を改訂した。</p> <p>準備書 p267 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂、取消線: 削除) (評価書 p. 289)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-24 表 8.6.1-25 重要な陸生動物 (2/2)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>番号</th> <th>種名</th> <th>①天然記念物</th> <th>②国内希少種</th> <th>③レッドブック</th> <th>④レッドリスト</th> <th>⑤日本の希少な水生生物</th> <th>⑥三重県レッドブック</th> <th>⑦愛知県レッドブック</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td></td> <td>2324</td> <td>ダイシャクシギ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2424</td> <td>ホウロクシギ</td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2523</td> <td>コシャクシギ</td> <td></td> <td>国際</td> <td>IA 類</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2624</td> <td>オオジシギ</td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>IA 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2725</td> <td>セイタカシギ</td> <td></td> <td></td> <td>IB 類</td> <td></td> <td>希少</td> <td>希少</td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2826</td> <td>ズグロカモメ</td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> <td></td> <td>危機</td> <td>希少</td> <td>IB 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>2927</td> <td>コアジサシ</td> <td></td> <td>国際</td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3028</td> <td>アオバズク</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3129</td> <td>サンショウクイ</td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3230</td> <td>クロツグミ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3331</td> <td>アカハラ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3432</td> <td>オオヨシキリ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>3533</td> <td>コサメビタキ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td></td> <td>3634</td> <td>ホオアカ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> <tr> <td rowspan="5">昆虫類</td> <td>1</td> <td>ネアカヨシヤンマ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>希少</td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>アオヤンマ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>コオイムシ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>ヤマトモンシデムシ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>オオツノハネカクシ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>II 類</td> </tr> <tr> <td>クモ類</td> <td>1</td> <td>コガネグモ</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td>準絶</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	番号	種名	①天然記念物	②国内希少種	③レッドブック	④レッドリスト	⑤日本の希少な水生生物	⑥三重県レッドブック	⑦愛知県レッドブック		2324	ダイシャクシギ						希少	準絶		2424	ホウロクシギ			II 類				II 類		2523	コシャクシギ		国際	IA 類				II 類		2624	オオジシギ			準絶				IA 類		2725	セイタカシギ			IB 類		希少	希少	II 類		2826	ズグロカモメ			II 類		危機	希少	IB 類		2927	コアジサシ		国際	II 類			希少	準絶		3028	アオバズク							準絶		3129	サンショウクイ			II 類				II 類		3230	クロツグミ						希少	II 類		3331	アカハラ							II 類		3432	オオヨシキリ						希少			3533	コサメビタキ							準絶		3634	ホオアカ							準絶	昆虫類	1	ネアカヨシヤンマ						希少	II 類	2	アオヤンマ							II 類	3	コオイムシ				準絶				4	ヤマトモンシデムシ							II 類	5	オオツノハネカクシ							II 類	クモ類	1	コガネグモ							準絶
分類群	番号	種名	①天然記念物	②国内希少種	③レッドブック	④レッドリスト	⑤日本の希少な水生生物	⑥三重県レッドブック	⑦愛知県レッドブック																																																																																																																																																																																																							
	2324	ダイシャクシギ						希少	準絶																																																																																																																																																																																																							
	2424	ホウロクシギ			II 類				II 類																																																																																																																																																																																																							
	2523	コシャクシギ		国際	IA 類				II 類																																																																																																																																																																																																							
	2624	オオジシギ			準絶				IA 類																																																																																																																																																																																																							
	2725	セイタカシギ			IB 類		希少	希少	II 類																																																																																																																																																																																																							
	2826	ズグロカモメ			II 類		危機	希少	IB 類																																																																																																																																																																																																							
	2927	コアジサシ		国際	II 類			希少	準絶																																																																																																																																																																																																							
	3028	アオバズク							準絶																																																																																																																																																																																																							
	3129	サンショウクイ			II 類				II 類																																																																																																																																																																																																							
	3230	クロツグミ						希少	II 類																																																																																																																																																																																																							
	3331	アカハラ							II 類																																																																																																																																																																																																							
	3432	オオヨシキリ						希少																																																																																																																																																																																																								
	3533	コサメビタキ							準絶																																																																																																																																																																																																							
	3634	ホオアカ							準絶																																																																																																																																																																																																							
昆虫類	1	ネアカヨシヤンマ						希少	II 類																																																																																																																																																																																																							
	2	アオヤンマ							II 類																																																																																																																																																																																																							
	3	コオイムシ				準絶																																																																																																																																																																																																										
	4	ヤマトモンシデムシ							II 類																																																																																																																																																																																																							
	5	オオツノハネカクシ							II 類																																																																																																																																																																																																							
クモ類	1	コガネグモ							準絶																																																																																																																																																																																																							
268	改訂	<p>調査結果の追記に伴い、以下の表について改訂した。</p> <p>準備書 p268 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <p>準備書</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>哺乳類</td> <td>カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)</td> <td>本種は本州の福島県以南、四国、九州に分布し、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑等に生息する。繁殖期はおもに春と秋の年 2 回。イネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣を作る。植物の種子やバッタ類等を捕食する。</td> <td>調査の結果、干拓地における本種の生息地の植生は、ヤマアワを含むイネ科草本であり、干拓地全域に広く分布していた。確認された 37 個の球果の巣材は全てヤマアワであり、事業実施区域内に 21 個、事業実施区域外に 16 個確認された。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 290)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性<sup>1)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>哺乳類</td> <td>カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)</td> <td>本種は本州の福島県以南、四国、九州に分布し、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑等に生息する。繁殖期は主に春と秋の年 2 回。イネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣を作る。植物の種子やバッタ類等を捕食する。</td> <td>調査の結果、干拓地における本種の生息地は、イネ科高草草本を含むチガヤ群落、ススキ・ハチジョウススキ群落等であり、これらの群落は、干拓地全域に広く分布していた。平成 14 年度調査、平成 15 年度調査を通して確認された 47 個の球果は、事業実施区域内に 30 個、事業実施区域外に 17 個であった。 本種の生息環境であるイネ科の高草草本を含む群落は、干拓地に広く分布しており、本種も干拓地内全域に生息していると考えられるが、乾燥化とともに、セイタカアワダチソウの生育面積が拡大し、その生息環境は狭小化しつづくと考えられる。</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	種名	種の分布・特性	確認状況	哺乳類	カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)	本種は本州の福島県以南、四国、九州に分布し、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑等に生息する。繁殖期はおもに春と秋の年 2 回。イネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣を作る。植物の種子やバッタ類等を捕食する。	調査の結果、干拓地における本種の生息地の植生は、ヤマアワを含むイネ科草本であり、干拓地全域に広く分布していた。確認された 37 個の球果の巣材は全てヤマアワであり、事業実施区域内に 21 個、事業実施区域外に 16 個確認された。	分類群	種名	種の分布・特性 <sup>1)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	哺乳類	カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)	本種は本州の福島県以南、四国、九州に分布し、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑等に生息する。繁殖期は主に春と秋の年 2 回。イネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣を作る。植物の種子やバッタ類等を捕食する。	調査の結果、干拓地における本種の生息地は、イネ科高草草本を含むチガヤ群落、ススキ・ハチジョウススキ群落等であり、これらの群落は、干拓地全域に広く分布していた。平成 14 年度調査、平成 15 年度調査を通して確認された 47 個の球果は、事業実施区域内に 30 個、事業実施区域外に 17 個であった。 本種の生息環境であるイネ科の高草草本を含む群落は、干拓地に広く分布しており、本種も干拓地内全域に生息していると考えられるが、乾燥化とともに、セイタカアワダチソウの生育面積が拡大し、その生息環境は狭小化しつづくと考えられる。																																																																																																																																																																																														
分類群	種名	種の分布・特性	確認状況																																																																																																																																																																																																													
哺乳類	カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)	本種は本州の福島県以南、四国、九州に分布し、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑等に生息する。繁殖期はおもに春と秋の年 2 回。イネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣を作る。植物の種子やバッタ類等を捕食する。	調査の結果、干拓地における本種の生息地の植生は、ヤマアワを含むイネ科草本であり、干拓地全域に広く分布していた。確認された 37 個の球果の巣材は全てヤマアワであり、事業実施区域内に 21 個、事業実施区域外に 16 個確認された。																																																																																																																																																																																																													
分類群	種名	種の分布・特性 <sup>1)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																																																																																																																																																																																																													
哺乳類	カヤネズミ (ネズミ目ネズミ科)	本種は本州の福島県以南、四国、九州に分布し、イネ科植物が優占する草地、河川敷、堤防、麦畑等に生息する。繁殖期は主に春と秋の年 2 回。イネ科植物の茎に、それらの葉を巧みに編んで球形の巣を作る。植物の種子やバッタ類等を捕食する。	調査の結果、干拓地における本種の生息地は、イネ科高草草本を含むチガヤ群落、ススキ・ハチジョウススキ群落等であり、これらの群落は、干拓地全域に広く分布していた。平成 14 年度調査、平成 15 年度調査を通して確認された 47 個の球果は、事業実施区域内に 30 個、事業実施区域外に 17 個であった。 本種の生息環境であるイネ科の高草草本を含む群落は、干拓地に広く分布しており、本種も干拓地内全域に生息していると考えられるが、乾燥化とともに、セイタカアワダチソウの生育面積が拡大し、その生息環境は狭小化しつづくと考えられる。																																																																																																																																																																																																													

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (21)

頁	区 分	変更の概要及び理由																								
268	改 訂	<p>鳥類については、全ての重要な種が以下に示したいずれかに該当したため、全ての重要な種について表の追記もしくは改訂を行った。(以下、鳥類に関しては、変更の理由及び概要について割愛した)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・種の分布・特性及び確認状況に一部誤った記述があるとの指摘を受けたため、複数の文献を参考に特性及び確認状況を見直し、記述を修正した。</li> <li>・文献を参考に、種の分布・特性に三重県における渡り区分を記述した。</li> <li>・調査結果から、現地における渡り区分が文献における渡り区分と異なると判断された種については、確認状況に現地における渡り区分についても記述した。</li> <li>・調査結果から、満潮時には堤防等を避難場所として利用していると判断されたものは、その旨記述した。</li> <li>・重要な種の選定漏れがあり、重要種が追加となった。</li> <li>・確認位置に誤りがあったため、確認状況を修正した。</li> <li>・調査結果をより詳細に記述した。</li> </ul>																								
		<p>準備書 p268 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>チュウサギ (コウノトリ 目サギ科)</td> <td>本種は平地の水田、湿地、大きな河川等に生息する。主に夏鳥として本州から九州に渡来し、4月～9月に繁殖する。また、北海道の一部でも観察例が増加している。西南日本や琉球諸島では越冬する個体もいる。樹木の中ほどの枝上に、粗雑な皿形の巣をつくる。川岸の竹林等に、カワウや他のサギ類とともに集団ねぐら(コロニー)を形成する。主に両生・爬虫類や、小魚、水生昆虫等を捕食する。</td> <td>干拓地東側の鍋田干拓地や源線輪中を中心とした広い範囲で確認されたが、干拓地内では上空通過の確認がほとんどであった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>チュウサギ (コウノトリ 目サギ科)</td> <td>本種は平地の水田、湿地、大きな河川等に生息する。主に夏鳥として本州から九州に渡来し、4月～9月に繁殖する。また、北海道の一部でも観察例が増加している。西南日本や琉球諸島では越冬する個体もいる。三重県には夏鳥として渡来する。樹木の中ほどの枝上に、粗雑な皿形の巣をつくる。川岸の竹林等に、カワウや他のサギ類とともに集団ねぐら(コロニー)を形成する。主に両生・爬虫類や、小魚、水生昆虫等を捕食する。</td> <td>春季から秋季にかけて干拓地東側の鍋田干拓地や源線輪中を中心とした広い範囲で確認されたが、干拓地内では上空通過の確認がほとんどであった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table>	表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)				分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	チュウサギ (コウノトリ 目サギ科)	本種は平地の水田、湿地、大きな河川等に生息する。主に夏鳥として本州から九州に渡来し、4月～9月に繁殖する。また、北海道の一部でも観察例が増加している。西南日本や琉球諸島では越冬する個体もいる。樹木の中ほどの枝上に、粗雑な皿形の巣をつくる。川岸の竹林等に、カワウや他のサギ類とともに集団ねぐら(コロニー)を形成する。主に両生・爬虫類や、小魚、水生昆虫等を捕食する。	干拓地東側の鍋田干拓地や源線輪中を中心とした広い範囲で確認されたが、干拓地内では上空通過の確認がほとんどであった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。	表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)				分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	チュウサギ (コウノトリ 目サギ科)	本種は平地の水田、湿地、大きな河川等に生息する。主に夏鳥として本州から九州に渡来し、4月～9月に繁殖する。また、北海道の一部でも観察例が増加している。西南日本や琉球諸島では越冬する個体もいる。三重県には夏鳥として渡来する。樹木の中ほどの枝上に、粗雑な皿形の巣をつくる。川岸の竹林等に、カワウや他のサギ類とともに集団ねぐら(コロニー)を形成する。主に両生・爬虫類や、小魚、水生昆虫等を捕食する。	春季から秋季にかけて干拓地東側の鍋田干拓地や源線輪中を中心とした広い範囲で確認されたが、干拓地内では上空通過の確認がほとんどであった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。
表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)																										
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	チュウサギ (コウノトリ 目サギ科)	本種は平地の水田、湿地、大きな河川等に生息する。主に夏鳥として本州から九州に渡来し、4月～9月に繁殖する。また、北海道の一部でも観察例が増加している。西南日本や琉球諸島では越冬する個体もいる。樹木の中ほどの枝上に、粗雑な皿形の巣をつくる。川岸の竹林等に、カワウや他のサギ類とともに集団ねぐら(コロニー)を形成する。主に両生・爬虫類や、小魚、水生昆虫等を捕食する。	干拓地東側の鍋田干拓地や源線輪中を中心とした広い範囲で確認されたが、干拓地内では上空通過の確認がほとんどであった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。																							
表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)																										
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	チュウサギ (コウノトリ 目サギ科)	本種は平地の水田、湿地、大きな河川等に生息する。主に夏鳥として本州から九州に渡来し、4月～9月に繁殖する。また、北海道の一部でも観察例が増加している。西南日本や琉球諸島では越冬する個体もいる。三重県には夏鳥として渡来する。樹木の中ほどの枝上に、粗雑な皿形の巣をつくる。川岸の竹林等に、カワウや他のサギ類とともに集団ねぐら(コロニー)を形成する。主に両生・爬虫類や、小魚、水生昆虫等を捕食する。	春季から秋季にかけて干拓地東側の鍋田干拓地や源線輪中を中心とした広い範囲で確認されたが、干拓地内では上空通過の確認がほとんどであった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。																							
268	改 訂	<p>〃</p> <p>準備書 p268 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>カワアイサ (カモ目 カモ科)</td> <td>本種は低地の河川、湖沼等の淡水域に生息する。主に冬鳥として日本のほぼ全土に渡来する。4月～6月が繁殖期だが、日本では北海道で少数が繁殖するのみである。果は地上の草むらの中か樹洞につくられる。水中に潜り、魚類を捕食する。</td> <td>冬季に干拓地の水路で確認され、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地及び干拓地周辺の水辺であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>カワアイサ (カモ目 カモ科)</td> <td>本種は低地の河川、湖沼等の淡水域に生息する。主に冬鳥として日本のほぼ全土に渡来する。4月～6月が繁殖期だが、日本では北海道で少数が繁殖するのみである。川や湖の岸辺の岩の隙間や水辺の樹洞に巣をつくることが多い。水中に潜り、魚類を捕食する。</td> <td>秋季に干拓地の水路で1個体が確認されたのみである。本種の生息環境及び確認状況から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 なお、一般的には冬鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を冬鳥(種)と判断した。</td> </tr> </tbody> </table>	表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)				分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	カワアイサ (カモ目 カモ科)	本種は低地の河川、湖沼等の淡水域に生息する。主に冬鳥として日本のほぼ全土に渡来する。4月～6月が繁殖期だが、日本では北海道で少数が繁殖するのみである。果は地上の草むらの中か樹洞につくられる。水中に潜り、魚類を捕食する。	冬季に干拓地の水路で確認され、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地及び干拓地周辺の水辺であると推定される。	表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)				分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	カワアイサ (カモ目 カモ科)	本種は低地の河川、湖沼等の淡水域に生息する。主に冬鳥として日本のほぼ全土に渡来する。4月～6月が繁殖期だが、日本では北海道で少数が繁殖するのみである。川や湖の岸辺の岩の隙間や水辺の樹洞に巣をつくることが多い。水中に潜り、魚類を捕食する。	秋季に干拓地の水路で1個体が確認されたのみである。本種の生息環境及び確認状況から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 なお、一般的には冬鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を冬鳥(種)と判断した。
表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)																										
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	カワアイサ (カモ目 カモ科)	本種は低地の河川、湖沼等の淡水域に生息する。主に冬鳥として日本のほぼ全土に渡来する。4月～6月が繁殖期だが、日本では北海道で少数が繁殖するのみである。果は地上の草むらの中か樹洞につくられる。水中に潜り、魚類を捕食する。	冬季に干拓地の水路で確認され、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地及び干拓地周辺の水辺であると推定される。																							
表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)																										
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	カワアイサ (カモ目 カモ科)	本種は低地の河川、湖沼等の淡水域に生息する。主に冬鳥として日本のほぼ全土に渡来する。4月～6月が繁殖期だが、日本では北海道で少数が繁殖するのみである。川や湖の岸辺の岩の隙間や水辺の樹洞に巣をつくることが多い。水中に潜り、魚類を捕食する。	秋季に干拓地の水路で1個体が確認されたのみである。本種の生息環境及び確認状況から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 なお、一般的には冬鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を冬鳥(種)と判断した。																							

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (22)

頁	区 分	変更の概要及び理由																
268	改 訂	<p>準備書 p268 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂)</p> <p>準備書</p> <table border="1" data-bbox="518 280 1380 616"> <caption>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ミサゴ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は全国の海岸、河口、湖沼等に生息する。留鳥として、北海道～沖縄で4月～7月に繁殖する。果は人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上につくられる。魚類を捕獲して常食とする。</td> <td>干拓地内の電柱上をねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用しているのが確認された。また、年間を通して利用しており、冬季には越冬のために渡来する個体も多く確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の樹木や電柱等であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 290)</p> <table border="1" data-bbox="518 627 1380 952"> <caption>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ミサゴ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は全国の海岸、河口、湖沼等に生息する。留鳥として、北海道～沖縄で4月～7月に繁殖する。三重県では留鳥とされている。果は人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上につくられる。魚類を捕獲して常食とする。</td> <td>干拓地内の電柱上をねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用しているのが確認された。ほぼ年間を通して干拓地内をねぐらとして利用しているが、月別の確認個体数はそれほど多くない。冬季には越冬のために渡来する個体も多く確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む樹木や電柱等を主にねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用している。 なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	ミサゴ (タカ目 タカ科)	本種は全国の海岸、河口、湖沼等に生息する。留鳥として、北海道～沖縄で4月～7月に繁殖する。果は人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上につくられる。魚類を捕獲して常食とする。	干拓地内の電柱上をねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用しているのが確認された。また、年間を通して利用しており、冬季には越冬のために渡来する個体も多く確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の樹木や電柱等であると推定される。	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	ミサゴ (タカ目 タカ科)	本種は全国の海岸、河口、湖沼等に生息する。留鳥として、北海道～沖縄で4月～7月に繁殖する。三重県では留鳥とされている。果は人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上につくられる。魚類を捕獲して常食とする。	干拓地内の電柱上をねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用しているのが確認された。ほぼ年間を通して干拓地内をねぐらとして利用しているが、月別の確認個体数はそれほど多くない。冬季には越冬のために渡来する個体も多く確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む樹木や電柱等を主にねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用している。 なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>															
鳥 類	ミサゴ (タカ目 タカ科)	本種は全国の海岸、河口、湖沼等に生息する。留鳥として、北海道～沖縄で4月～7月に繁殖する。果は人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上につくられる。魚類を捕獲して常食とする。	干拓地内の電柱上をねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用しているのが確認された。また、年間を通して利用しており、冬季には越冬のために渡来する個体も多く確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の樹木や電柱等であると推定される。															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>															
鳥 類	ミサゴ (タカ目 タカ科)	本種は全国の海岸、河口、湖沼等に生息する。留鳥として、北海道～沖縄で4月～7月に繁殖する。三重県では留鳥とされている。果は人気のない海岸の岩の上や岩棚、水辺に近い大きな木の上につくられる。魚類を捕獲して常食とする。	干拓地内の電柱上をねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用しているのが確認された。ほぼ年間を通して干拓地内をねぐらとして利用しているが、月別の確認個体数はそれほど多くない。冬季には越冬のために渡来する個体も多く確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む樹木や電柱等を主にねぐら・休息及び餌を食べる場所として利用している。 なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。															
268	改 訂	<p>準備書 p268 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂)</p> <p>準備書</p> <table border="1" data-bbox="518 1019 1380 1355"> <caption>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハチクマ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は標高 1500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息する。夏鳥として本州、佐渡、北海道に渡来し、5月下旬から9月に繁殖する。低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくる。秋の渡りの時には市街地の上空にも出現し、愛知県伊良湖岬、鹿児島県佐多岬等の渡りのコースでは、サシバとともに通過することで有名。ハチの幼虫や蛹を好んで食べ、クロスズメバチ等のジバチ類をとくに好む。</td> <td>干拓地上空を飛行する1個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 290)</p> <table border="1" data-bbox="518 1366 1380 1646"> <caption>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (1/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハチクマ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は標高 1500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息する。夏鳥として本州、佐渡、北海道に渡来し、5月下旬から9月に繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくる。秋の渡りの時には市街地の上空にも出現し、愛知県伊良湖岬では、サシバとともに通過することで有名。ハチの幼虫や蛹を好んで食べ、クロスズメバチ等のジバチ類をとくに好む。</td> <td>春季と夏季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。本種の生息環境及び確認状況から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 なお、三重県には夏鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	ハチクマ (タカ目 タカ科)	本種は標高 1500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息する。夏鳥として本州、佐渡、北海道に渡来し、5月下旬から9月に繁殖する。低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくる。秋の渡りの時には市街地の上空にも出現し、愛知県伊良湖岬、鹿児島県佐多岬等の渡りのコースでは、サシバとともに通過することで有名。ハチの幼虫や蛹を好んで食べ、クロスズメバチ等のジバチ類をとくに好む。	干拓地上空を飛行する1個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	ハチクマ (タカ目 タカ科)	本種は標高 1500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息する。夏鳥として本州、佐渡、北海道に渡来し、5月下旬から9月に繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくる。秋の渡りの時には市街地の上空にも出現し、愛知県伊良湖岬では、サシバとともに通過することで有名。ハチの幼虫や蛹を好んで食べ、クロスズメバチ等のジバチ類をとくに好む。	春季と夏季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。本種の生息環境及び確認状況から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 なお、三重県には夏鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>															
鳥 類	ハチクマ (タカ目 タカ科)	本種は標高 1500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息する。夏鳥として本州、佐渡、北海道に渡来し、5月下旬から9月に繁殖する。低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくる。秋の渡りの時には市街地の上空にも出現し、愛知県伊良湖岬、鹿児島県佐多岬等の渡りのコースでは、サシバとともに通過することで有名。ハチの幼虫や蛹を好んで食べ、クロスズメバチ等のジバチ類をとくに好む。	干拓地上空を飛行する1個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>															
鳥 類	ハチクマ (タカ目 タカ科)	本種は標高 1500m 以下の丘陵地や低山の山林に生息する。夏鳥として本州、佐渡、北海道に渡来し、5月下旬から9月に繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。低山帯の大木の枝上に、他の猛禽類の古巣を利用して皿形の巣をつくる。秋の渡りの時には市街地の上空にも出現し、愛知県伊良湖岬では、サシバとともに通過することで有名。ハチの幼虫や蛹を好んで食べ、クロスズメバチ等のジバチ類をとくに好む。	春季と夏季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。本種の生息環境及び確認状況から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 なお、三重県には夏鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。															

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要(23)

頁	区 分	変更の概要及び理由																								
268	改 訂	<p>//</p> <p>準備書 p268 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂)</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td colspan="3"> <p><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況(1/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>オオタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～6月に繁殖する。なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。冬季に確認されているが、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> <tr> <td>評価書 (p.291)</td> <td colspan="3"> <p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>オオタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～7月に繁殖する。<u>三重県では留鳥とされている。</u>なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。<u>ほほ年間を通して確認された。</u>本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田を主に採餌場として利用していると推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> </table>	準備書	<p><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況(1/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>オオタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～6月に繁殖する。なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。冬季に確認されているが、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	オオタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～6月に繁殖する。なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。冬季に確認されているが、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。	評価書 (p.291)	<p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>オオタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～7月に繁殖する。<u>三重県では留鳥とされている。</u>なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。<u>ほほ年間を通して確認された。</u>本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田を主に採餌場として利用していると推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	オオタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。</u> なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。 <u>ほほ年間を通して確認された。</u> 本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田を主に採餌場として利用していると推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>
準備書	<p><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況(1/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>オオタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～6月に繁殖する。なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。冬季に確認されているが、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	オオタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～6月に繁殖する。なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。冬季に確認されているが、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	オオタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～6月に繁殖する。なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。冬季に確認されているが、個体数は数個体程度であった。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。																							
評価書 (p.291)	<p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>オオタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～7月に繁殖する。<u>三重県では留鳥とされている。</u>なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。<u>ほほ年間を通して確認された。</u>本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田を主に採餌場として利用していると推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	オオタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。</u> なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。 <u>ほほ年間を通して確認された。</u> 本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田を主に採餌場として利用していると推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	オオタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林、丘陵地のアカマツ林やコナラとアカマツの混交林に生息する。留鳥として四国の一部と本州、北海道で2月～7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。</u> なお、秋から冬になると高地や山地のもの一部は低地や暖地に移動する。アカマツの大木等に厚みのある皿形の巣をつくる。小鳥、ハト、カモ、シギ、キジ等の中・大型の鳥類、ネズミ、ウサギ等を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地を採餌場として利用しているのが確認された。 <u>ほほ年間を通して確認された。</u> 本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田を主に採餌場として利用していると推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>																							
269	改 訂	<p>//</p> <p>準備書 p269 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線:改訂)</p> <table border="1"> <tr> <td>準備書</td> <td colspan="3"> <p><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハイタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。</td> <td>干拓地上空を飛翔する2個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。</td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> <tr> <td>評価書 (p.291)</td> <td colspan="3"> <p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハイタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。<u>三重県では留鳥とされている。</u>小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。</td> <td><u>秋季と冬季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。</u>以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> </table>	準備書	<p><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハイタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。</td> <td>干拓地上空を飛翔する2個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。</td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性	確認状況	鳥 類	ハイタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。	干拓地上空を飛翔する2個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。	評価書 (p.291)	<p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハイタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。<u>三重県では留鳥とされている。</u>小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。</td> <td><u>秋季と冬季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。</u>以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	ハイタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。 <u>三重県では留鳥とされている。</u> 小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。	<u>秋季と冬季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。</u> 以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u>
準備書	<p><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハイタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。</td> <td>干拓地上空を飛翔する2個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。</td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性	確認状況	鳥 類	ハイタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。	干拓地上空を飛翔する2個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。															
分類群	種 名	種の分布・特性	確認状況																							
鳥 類	ハイタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。	干拓地上空を飛翔する2個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。																							
評価書 (p.291)	<p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハイタカ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。<u>三重県では留鳥とされている。</u>小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。</td> <td><u>秋季と冬季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。</u>以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>			分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	ハイタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。 <u>三重県では留鳥とされている。</u> 小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。	<u>秋季と冬季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。</u> 以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u>															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	ハイタカ (タカ目 タカ科)	本種は平地から亜高山帯の林に生息する。留鳥として本州以北で5月ごろ繁殖し、高い木の枝上に巣を作る。 <u>三重県では留鳥とされている。</u> 小鳥、ネズミ、リス等を捕食する。	<u>秋季と冬季に干拓地上空を通過する計2個体が確認されたのみである。</u> 以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では留鳥とされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u>																							
-	追 記	<p>//</p> <p>準備書 p269 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を追記 (評価書 p.291)</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="4"> <p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>サシバ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は、低山から丘陵の林に生息する。夏鳥として青森県を除く東北地方以南に渡来し、4月から8月に繁殖する。三重県では夏鳥とされている。アカマツやスギの枝上に皿型の巣を作る。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫等を捕食する。</td> <td>春季と夏季に干拓地上空を通過飛翔する計7個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では夏鳥とされているが、現地調査結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table> </td> </tr> </table>	<p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>サシバ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は、低山から丘陵の林に生息する。夏鳥として青森県を除く東北地方以南に渡来し、4月から8月に繁殖する。三重県では夏鳥とされている。アカマツやスギの枝上に皿型の巣を作る。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫等を捕食する。</td> <td>春季と夏季に干拓地上空を通過飛翔する計7個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では夏鳥とされているが、現地調査結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>				分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	サシバ (タカ目 タカ科)	本種は、低山から丘陵の林に生息する。夏鳥として青森県を除く東北地方以南に渡来し、4月から8月に繁殖する。三重県では夏鳥とされている。アカマツやスギの枝上に皿型の巣を作る。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫等を捕食する。	春季と夏季に干拓地上空を通過飛翔する計7個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では夏鳥とされているが、現地調査結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u>												
<p><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況(2/7)</b></p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>サシバ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は、低山から丘陵の林に生息する。夏鳥として青森県を除く東北地方以南に渡来し、4月から8月に繁殖する。三重県では夏鳥とされている。アカマツやスギの枝上に皿型の巣を作る。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫等を捕食する。</td> <td>春季と夏季に干拓地上空を通過飛翔する計7個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では夏鳥とされているが、現地調査結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>				分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥 類	サシバ (タカ目 タカ科)	本種は、低山から丘陵の林に生息する。夏鳥として青森県を除く東北地方以南に渡来し、4月から8月に繁殖する。三重県では夏鳥とされている。アカマツやスギの枝上に皿型の巣を作る。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫等を捕食する。	春季と夏季に干拓地上空を通過飛翔する計7個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では夏鳥とされているが、現地調査結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u>															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																							
鳥 類	サシバ (タカ目 タカ科)	本種は、低山から丘陵の林に生息する。夏鳥として青森県を除く東北地方以南に渡来し、4月から8月に繁殖する。三重県では夏鳥とされている。アカマツやスギの枝上に皿型の巣を作る。ヘビ、トカゲ、カエル、昆虫等を捕食する。	春季と夏季に干拓地上空を通過飛翔する計7個体が確認されたのみである。以上の結果から、本種は干拓地及びその周辺を主な生息地としていないと推定される。 <u>なお、三重県では夏鳥とされているが、現地調査結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</u>																							

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (24)

頁	区分	変更の概要及び理由												
269	改訂	<p>準備書 p269 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <p>準備書</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</b></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%; text-align: center;">鳥類</td> <td style="width: 15%;">ハイロチュウヒ (タカ目 タカ科)</td> <td style="width: 45%;">本種は平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。冬鳥として渡来するが、飛来数は多くない。特に雄の成鳥の飛来は少ない。日本では繁殖しない。ヨーロッパでは 4 月下旬から 5 月下旬に産卵する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣を作る。ネズミ類、小鳥類、カエル類を捕食する。</td> <td style="width: 30%;">秋季から春季にかけて雌を中心に多数が確認され、冬季には雄も数個体確認された。また、ねぐら入りも確認された。以上の結果から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。</td> </tr> </table> <p>評価書 (p. 291)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</b></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th>確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>ハイロチュウヒ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。冬鳥として渡来するが、飛来数は多くない。特に雄の成鳥の飛来は少ない。日本では繁殖しない。<u>三重県には冬鳥として渡来する</u>。ネズミ類、小鳥類、カエル類を捕食する。</td> <td>秋季から春季にかけて雌を中心に多数が確認され、冬季には雄も数個体確認された。また、<u>主に干拓地の南側でねぐら入り</u>が確認された。以上の結果から、本種は事業実施区域を含む干拓地内及びその周辺の草地をねぐらとして利用している。</td> </tr> </tbody> </table>	鳥類	ハイロチュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。冬鳥として渡来するが、飛来数は多くない。特に雄の成鳥の飛来は少ない。日本では繁殖しない。ヨーロッパでは 4 月下旬から 5 月下旬に産卵する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣を作る。ネズミ類、小鳥類、カエル類を捕食する。	秋季から春季にかけて雌を中心に多数が確認され、冬季には雄も数個体確認された。また、ねぐら入りも確認された。以上の結果から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。	分類群	種名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥類	ハイロチュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。冬鳥として渡来するが、飛来数は多くない。特に雄の成鳥の飛来は少ない。日本では繁殖しない。 <u>三重県には冬鳥として渡来する</u> 。ネズミ類、小鳥類、カエル類を捕食する。	秋季から春季にかけて雌を中心に多数が確認され、冬季には雄も数個体確認された。また、 <u>主に干拓地の南側でねぐら入り</u> が確認された。以上の結果から、本種は事業実施区域を含む干拓地内及びその周辺の草地をねぐらとして利用している。
鳥類	ハイロチュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。冬鳥として渡来するが、飛来数は多くない。特に雄の成鳥の飛来は少ない。日本では繁殖しない。ヨーロッパでは 4 月下旬から 5 月下旬に産卵する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣を作る。ネズミ類、小鳥類、カエル類を捕食する。	秋季から春季にかけて雌を中心に多数が確認され、冬季には雄も数個体確認された。また、ねぐら入りも確認された。以上の結果から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。											
分類群	種名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>											
鳥類	ハイロチュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。冬鳥として渡来するが、飛来数は多くない。特に雄の成鳥の飛来は少ない。日本では繁殖しない。 <u>三重県には冬鳥として渡来する</u> 。ネズミ類、小鳥類、カエル類を捕食する。	秋季から春季にかけて雌を中心に多数が確認され、冬季には雄も数個体確認された。また、 <u>主に干拓地の南側でねぐら入り</u> が確認された。以上の結果から、本種は事業実施区域を含む干拓地内及びその周辺の草地をねぐらとして利用している。											
269	改訂	<p>準備書 p269 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <p>準備書</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</b></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 10%; text-align: center;">鳥類</td> <td style="width: 15%;">チュウヒ (タカ目 タカ科)</td> <td style="width: 45%;">本種は平地の広いヨシ原や草原に生息する。日本で確認されるもののうち、少数は北陸から北日本で繁殖するが、多くは冬鳥として渡来する。4 月～7 月に繁殖する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣をつくる。ネズミ、小鳥、カエル類、昆虫類等を捕食する。</td> <td style="width: 30%;">干拓地内全域を採餌の場として利用しているのが確認され、繁殖を示唆する行動 (ディスプレイ飛行や餌渡し等) や営巣も確認された。冬季においては、越冬のために多くの個体が渡来し、集団でねぐら入りするのも確認された。本種の生息環境及び確認状況から本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。</td> </tr> </table> <p>評価書 (p. 291)</p> <p style="text-align: center;"><b>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</b></p> <table border="1" style="width: 100%;"> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>チュウヒ (タカ目 タカ科)</td> <td>本種は平地の広いヨシ原や草原に生息する。日本で確認されるもののうち、少数は本州中部以北で繁殖し、繁殖地としては石川県河北潟干拓地、青森県仏沼干拓地、愛知県<u>の繁殖地等、数箇所が知られるのみである</u>。多くは冬鳥として渡来する。三重県には冬鳥として渡来する。4 月～7 月に繁殖する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣をつくる。ネズミ、小鳥、カエル類、昆虫類等を捕食する。</td> <td>干拓地内の全域を採餌場として利用しており、平成 14 年度、15 年度、16 年度とも 3 つがいの営巣が確認されている。3 つがいが繁殖に成功し、3 つがいの営巣地が特定された平成 15 年度において、行動圏解析を行ったところ、チュウヒ 3 つがいの主要な採餌場の面積に対して、約 50ha が消失するおそれがあると考えられる。 年間を通して多数が確認され、冬季においては、越冬のために多くの個体が渡来し、集団でねぐら入りするのも確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の繁殖期における主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地内及びその周辺の草地である。 なお、三重県には冬鳥として渡来するとされているが、<u>現地調査の結果に基づき調査地の渡り区分を留鳥と判断した</u>。</td> </tr> </tbody> </table>	鳥類	チュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広いヨシ原や草原に生息する。日本で確認されるもののうち、少数は北陸から北日本で繁殖するが、多くは冬鳥として渡来する。4 月～7 月に繁殖する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣をつくる。ネズミ、小鳥、カエル類、昆虫類等を捕食する。	干拓地内全域を採餌の場として利用しているのが確認され、繁殖を示唆する行動 (ディスプレイ飛行や餌渡し等) や営巣も確認された。冬季においては、越冬のために多くの個体が渡来し、集団でねぐら入りするのも確認された。本種の生息環境及び確認状況から本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。	分類群	種名	種の分布・特性	確認状況	鳥類	チュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広いヨシ原や草原に生息する。日本で確認されるもののうち、少数は本州中部以北で繁殖し、繁殖地としては石川県河北潟干拓地、青森県仏沼干拓地、愛知県 <u>の繁殖地等、数箇所が知られるのみである</u> 。多くは冬鳥として渡来する。三重県には冬鳥として渡来する。4 月～7 月に繁殖する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣をつくる。ネズミ、小鳥、カエル類、昆虫類等を捕食する。	干拓地内の全域を採餌場として利用しており、平成 14 年度、15 年度、16 年度とも 3 つがいの営巣が確認されている。3 つがいが繁殖に成功し、3 つがいの営巣地が特定された平成 15 年度において、行動圏解析を行ったところ、チュウヒ 3 つがいの主要な採餌場の面積に対して、約 50ha が消失するおそれがあると考えられる。 年間を通して多数が確認され、冬季においては、越冬のために多くの個体が渡来し、集団でねぐら入りするのも確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の繁殖期における主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地内及びその周辺の草地である。 なお、三重県には冬鳥として渡来するとされているが、 <u>現地調査の結果に基づき調査地の渡り区分を留鳥と判断した</u> 。
鳥類	チュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広いヨシ原や草原に生息する。日本で確認されるもののうち、少数は北陸から北日本で繁殖するが、多くは冬鳥として渡来する。4 月～7 月に繁殖する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣をつくる。ネズミ、小鳥、カエル類、昆虫類等を捕食する。	干拓地内全域を採餌の場として利用しているのが確認され、繁殖を示唆する行動 (ディスプレイ飛行や餌渡し等) や営巣も確認された。冬季においては、越冬のために多くの個体が渡来し、集団でねぐら入りするのも確認された。本種の生息環境及び確認状況から本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。											
分類群	種名	種の分布・特性	確認状況											
鳥類	チュウヒ (タカ目 タカ科)	本種は平地の広いヨシ原や草原に生息する。日本で確認されるもののうち、少数は本州中部以北で繁殖し、繁殖地としては石川県河北潟干拓地、青森県仏沼干拓地、愛知県 <u>の繁殖地等、数箇所が知られるのみである</u> 。多くは冬鳥として渡来する。三重県には冬鳥として渡来する。4 月～7 月に繁殖する。地上にヨシや枯れたススキ等の茎、イネ科の枯葉を用いて巣をつくる。ネズミ、小鳥、カエル類、昆虫類等を捕食する。	干拓地内の全域を採餌場として利用しており、平成 14 年度、15 年度、16 年度とも 3 つがいの営巣が確認されている。3 つがいが繁殖に成功し、3 つがいの営巣地が特定された平成 15 年度において、行動圏解析を行ったところ、チュウヒ 3 つがいの主要な採餌場の面積に対して、約 50ha が消失するおそれがあると考えられる。 年間を通して多数が確認され、冬季においては、越冬のために多くの個体が渡来し、集団でねぐら入りするのも確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の繁殖期における主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地内及びその周辺の草地である。 なお、三重県には冬鳥として渡来するとされているが、 <u>現地調査の結果に基づき調査地の渡り区分を留鳥と判断した</u> 。											

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (25)

頁	区 分	変更の概要及び理由																
269	改 訂	<p>準備書 p269 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <p>準備書</p> <table border="1" data-bbox="555 315 1358 539"> <caption>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>21</sup></th> <th>確認状況<sup>22</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハヤブサ (タカ目 ハヤブサ科)</td> <td>本種は海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野に生息する。留鳥として北海道～九州で2月頃から繁殖する。海岸や海岸に近い山地の断崖や急斜面の窪みの砂泥や草の根等をかきだして産座とする。ヒヨドリ等の中型の鳥類、まれにネズミやウサギも捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内を採餌場として利用しているのが主に確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 291)</p> <table border="1" data-bbox="555 600 1358 801"> <caption>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>21</sup></th> <th>確認状況<sup>22</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ハヤブサ (タカ目 ハヤブサ科)</td> <td>本種は海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野に生息する。留鳥として北海道～九州で2月頃から繁殖する。三重県には冬鳥として渡来する。海岸や海岸に近い山地の断崖や急斜面の窪みの砂泥や草の根等をかきだして産座とする。ヒヨドリ等の中型の鳥類、まれにネズミやウサギも捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内を採餌場として利用しているのが主に確認された。ほぼ年間を通して確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地を主に採餌場として利用していると推定される。 なお、三重県には冬鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>	鳥 類	ハヤブサ (タカ目 ハヤブサ科)	本種は海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野に生息する。留鳥として北海道～九州で2月頃から繁殖する。海岸や海岸に近い山地の断崖や急斜面の窪みの砂泥や草の根等をかきだして産座とする。ヒヨドリ等の中型の鳥類、まれにネズミやウサギも捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内を採餌場として利用しているのが主に確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>	鳥 類	ハヤブサ (タカ目 ハヤブサ科)	本種は海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野に生息する。留鳥として北海道～九州で2月頃から繁殖する。三重県には冬鳥として渡来する。海岸や海岸に近い山地の断崖や急斜面の窪みの砂泥や草の根等をかきだして産座とする。ヒヨドリ等の中型の鳥類、まれにネズミやウサギも捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内を採餌場として利用しているのが主に確認された。ほぼ年間を通して確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地を主に採餌場として利用していると推定される。 なお、三重県には冬鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>															
鳥 類	ハヤブサ (タカ目 ハヤブサ科)	本種は海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野に生息する。留鳥として北海道～九州で2月頃から繁殖する。海岸や海岸に近い山地の断崖や急斜面の窪みの砂泥や草の根等をかきだして産座とする。ヒヨドリ等の中型の鳥類、まれにネズミやウサギも捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内を採餌場として利用しているのが主に確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地であると推定される。															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>															
鳥 類	ハヤブサ (タカ目 ハヤブサ科)	本種は海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野に生息する。留鳥として北海道～九州で2月頃から繁殖する。三重県には冬鳥として渡来する。海岸や海岸に近い山地の断崖や急斜面の窪みの砂泥や草の根等をかきだして産座とする。ヒヨドリ等の中型の鳥類、まれにネズミやウサギも捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内を採餌場として利用しているのが主に確認された。ほぼ年間を通して確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種は事業実施区域を含む干拓地内の草地を主に採餌場として利用していると推定される。 なお、三重県には冬鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。															
269	改 訂	<p>準備書 p269 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <p>準備書</p> <table border="1" data-bbox="555 981 1358 1160"> <caption>表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (2/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>21</sup></th> <th>確認状況<sup>22</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ウズラ (キジ目 キジ科)</td> <td>本種は農耕地、原野、河川敷、荒地等丈の低い草地に生息する。夏鳥として北海道、本州中部以北に渡来し、4月～9月に繁殖する。なお、西南日本では越冬する。草むらの中、藪の根元に巣を作る。植物の種子、小果実、昆虫類、クモ類を捕食する。</td> <td>干拓地の事業実施区域外の草地で確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地の草地であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 292)</p> <table border="1" data-bbox="555 1220 1358 1384"> <caption>表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</caption> <thead> <tr> <th>分類群</th> <th>種 名</th> <th>種の分布・特性<sup>21</sup></th> <th>確認状況<sup>22</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥 類</td> <td>ウズラ (キジ目 キジ科)</td> <td>本種は農耕地、原野、河川敷、荒地等丈の低い草地に生息する。夏鳥として北海道、本州中部以北に渡来し、4月～9月に繁殖する。三重県には冬鳥として渡来する。なお、西南日本では越冬する。草むらの中、藪の根元に巣を作る。植物の種子、小果実、昆虫類、クモ類を捕食する。</td> <td>秋季から冬季にかけて干拓地の事業実施区域外の草地で確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地の草地であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table>	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>	鳥 類	ウズラ (キジ目 キジ科)	本種は農耕地、原野、河川敷、荒地等丈の低い草地に生息する。夏鳥として北海道、本州中部以北に渡来し、4月～9月に繁殖する。なお、西南日本では越冬する。草むらの中、藪の根元に巣を作る。植物の種子、小果実、昆虫類、クモ類を捕食する。	干拓地の事業実施区域外の草地で確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地の草地であると推定される。	分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>	鳥 類	ウズラ (キジ目 キジ科)	本種は農耕地、原野、河川敷、荒地等丈の低い草地に生息する。夏鳥として北海道、本州中部以北に渡来し、4月～9月に繁殖する。三重県には冬鳥として渡来する。なお、西南日本では越冬する。草むらの中、藪の根元に巣を作る。植物の種子、小果実、昆虫類、クモ類を捕食する。	秋季から冬季にかけて干拓地の事業実施区域外の草地で確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地の草地であると推定される。
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>															
鳥 類	ウズラ (キジ目 キジ科)	本種は農耕地、原野、河川敷、荒地等丈の低い草地に生息する。夏鳥として北海道、本州中部以北に渡来し、4月～9月に繁殖する。なお、西南日本では越冬する。草むらの中、藪の根元に巣を作る。植物の種子、小果実、昆虫類、クモ類を捕食する。	干拓地の事業実施区域外の草地で確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地の草地であると推定される。															
分類群	種 名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>															
鳥 類	ウズラ (キジ目 キジ科)	本種は農耕地、原野、河川敷、荒地等丈の低い草地に生息する。夏鳥として北海道、本州中部以北に渡来し、4月～9月に繁殖する。三重県には冬鳥として渡来する。なお、西南日本では越冬する。草むらの中、藪の根元に巣を作る。植物の種子、小果実、昆虫類、クモ類を捕食する。	秋季から冬季にかけて干拓地の事業実施区域外の草地で確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地の草地であると推定される。															

表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (26)

頁	区分	変更の概要及び理由																								
270	改訂	<p>準備書 p270 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>ヒクイナ (ツル目 クイナ科)</td> <td>本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。夏鳥として全国に渡来し、5月～8月、年1～2回繁殖する。湖沼、河川、水田の水辺やヨシ原等の湿地に、イネ科植物、ヨシ、スゲ類の葉や茎を利用して血形の巣をつくる。昆虫類、クモ類、カエル類、エビ、小魚、植物の種子を捕食する。</td> <td>事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地で数個体が確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 292)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性<sup>21</sup></th> <th>確認状況<sup>22</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>ヒクイナ (ツル目 クイナ科)</td> <td>本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。夏鳥として全国に渡来し、5月～8月、年1～2回繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。湖沼、河川、水田の水辺やヨシ原等の湿地に、イネ科植物、ヨシ、スゲ類の葉や茎を利用して血形の巣をつくる。昆虫類、クモ類、カエル類、エビ、小魚、植物の種子を捕食する。</td> <td>春季から秋季にかけて事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地で数個体が確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。 なお、三重県には夏鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。</td> </tr> </tbody> </table>	表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				分類群	種名	種の分布・特性	確認状況	鳥類	ヒクイナ (ツル目 クイナ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。夏鳥として全国に渡来し、5月～8月、年1～2回繁殖する。湖沼、河川、水田の水辺やヨシ原等の湿地に、イネ科植物、ヨシ、スゲ類の葉や茎を利用して血形の巣をつくる。昆虫類、クモ類、カエル類、エビ、小魚、植物の種子を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地で数個体が確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。	表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				分類群	種名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>	鳥類	ヒクイナ (ツル目 クイナ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。夏鳥として全国に渡来し、5月～8月、年1～2回繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。湖沼、河川、水田の水辺やヨシ原等の湿地に、イネ科植物、ヨシ、スゲ類の葉や茎を利用して血形の巣をつくる。昆虫類、クモ類、カエル類、エビ、小魚、植物の種子を捕食する。	春季から秋季にかけて事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地で数個体が確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。 なお、三重県には夏鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。
表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																										
分類群	種名	種の分布・特性	確認状況																							
鳥類	ヒクイナ (ツル目 クイナ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。夏鳥として全国に渡来し、5月～8月、年1～2回繁殖する。湖沼、河川、水田の水辺やヨシ原等の湿地に、イネ科植物、ヨシ、スゲ類の葉や茎を利用して血形の巣をつくる。昆虫類、クモ類、カエル類、エビ、小魚、植物の種子を捕食する。	事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地で数個体が確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。																							
表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																										
分類群	種名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>																							
鳥類	ヒクイナ (ツル目 クイナ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。夏鳥として全国に渡来し、5月～8月、年1～2回繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。湖沼、河川、水田の水辺やヨシ原等の湿地に、イネ科植物、ヨシ、スゲ類の葉や茎を利用して血形の巣をつくる。昆虫類、クモ類、カエル類、エビ、小魚、植物の種子を捕食する。	春季から秋季にかけて事業実施区域を含む干拓地内と干拓地東側の鍋田干拓地で数個体が確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、事業実施区域を含む干拓地内の草地や、干拓地周辺の水田であると推定される。 なお、三重県には夏鳥として渡来するとされているが、現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を旅鳥と判断した。																							
270	改訂	<p>準備書 p270 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性</th> <th>確認状況</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>タマシギ (チドリ目 タマシギ科)</td> <td>本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。留鳥として福島県以西の本州、四国、九州で4月～10月に繁殖する。湿地の突出部や草株の間の窪みに、草の葉等で血形の巣をつくる。植物の種子、バッタ、コオロギ等の昆虫類、甲殻類、貝類等を捕食する。</td> <td>干拓地東側の鍋田干拓地内及び西側の三重県長島町地内において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table> <p>評価書 (p. 292)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4">表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th>分類群</th> <th>種名</th> <th>種の分布・特性<sup>21</sup></th> <th>確認状況<sup>22</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>タマシギ (チドリ目 タマシギ科)</td> <td>本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。留鳥として福島県以西の本州、四国、九州で4月～10月に繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。湿地の突出部や草株の間の窪みに、草の葉等で血形の巣をつくる。植物の種子、バッタ、コオロギ等の昆虫類、甲殻類、貝類等を捕食する。</td> <td>春季から秋季にかけて干拓地東側の鍋田干拓地内及び西側の長島町地内等において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、干拓地周辺の水田であると推定される。</td> </tr> </tbody> </table>	表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				分類群	種名	種の分布・特性	確認状況	鳥類	タマシギ (チドリ目 タマシギ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。留鳥として福島県以西の本州、四国、九州で4月～10月に繁殖する。湿地の突出部や草株の間の窪みに、草の葉等で血形の巣をつくる。植物の種子、バッタ、コオロギ等の昆虫類、甲殻類、貝類等を捕食する。	干拓地東側の鍋田干拓地内及び西側の三重県長島町地内において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。	表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				分類群	種名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>	鳥類	タマシギ (チドリ目 タマシギ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。留鳥として福島県以西の本州、四国、九州で4月～10月に繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。湿地の突出部や草株の間の窪みに、草の葉等で血形の巣をつくる。植物の種子、バッタ、コオロギ等の昆虫類、甲殻類、貝類等を捕食する。	春季から秋季にかけて干拓地東側の鍋田干拓地内及び西側の長島町地内等において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、干拓地周辺の水田であると推定される。
表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																										
分類群	種名	種の分布・特性	確認状況																							
鳥類	タマシギ (チドリ目 タマシギ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。留鳥として福島県以西の本州、四国、九州で4月～10月に繁殖する。湿地の突出部や草株の間の窪みに、草の葉等で血形の巣をつくる。植物の種子、バッタ、コオロギ等の昆虫類、甲殻類、貝類等を捕食する。	干拓地東側の鍋田干拓地内及び西側の三重県長島町地内において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は干拓地周辺の水田であると推定される。																							
表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																										
分類群	種名	種の分布・特性 <sup>21</sup>	確認状況 <sup>22</sup>																							
鳥類	タマシギ (チドリ目 タマシギ科)	本種は湿地、沼地、湿地の多い河川敷や湖畔、水田等に生息する。留鳥として福島県以西の本州、四国、九州で4月～10月に繁殖する。三重県には夏鳥として渡来する。湿地の突出部や草株の間の窪みに、草の葉等で血形の巣をつくる。植物の種子、バッタ、コオロギ等の昆虫類、甲殻類、貝類等を捕食する。	春季から秋季にかけて干拓地東側の鍋田干拓地内及び西側の長島町地内等において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、干拓地周辺の水田であると推定される。																							



表 5-6 「第 8 章 環境影響評価の結果 6 陸生動物」に係る変更の概要 (27)

頁	区分	変更の概要及び理由																												
270	改訂	<p>準備書 p270 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4" data-bbox="400 277 1383 315">表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th data-bbox="400 315 517 344">準備書</th> <th data-bbox="517 315 633 344">分類群</th> <th data-bbox="633 315 1112 344">種名</th> <th data-bbox="1112 315 1383 344">種名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="400 344 517 555"></td> <td data-bbox="517 344 633 555">鳥類</td> <td data-bbox="633 344 1112 555">イカルチドリ (チドリ目チドリ科)</td> <td data-bbox="1112 344 1383 555">本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。礫の間の地上に窪みをつくり、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="400 555 517 824">評価書 (p. 292)</td> <td data-bbox="517 555 633 824">鳥類</td> <td data-bbox="633 555 1112 824">イカルチドリ (チドリ目チドリ科)</td> <td data-bbox="1112 555 1383 824">本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。<u>三重県では留鳥とされている。礫の間の地上に窪みをつくり、小石、貝殻、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</u></td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4" data-bbox="400 568 1383 607">表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th data-bbox="400 607 517 636">分類群</th> <th data-bbox="517 607 633 636">種名</th> <th data-bbox="633 607 1112 636">種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th data-bbox="1112 607 1383 636">確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="400 636 517 824">鳥類</td> <td data-bbox="517 636 633 824">イカルチドリ (チドリ目チドリ科)</td> <td data-bbox="633 636 1112 824">本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。<u>三重県では留鳥とされている。礫の間の地上に窪みをつくり、小石、貝殻、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</u></td> <td data-bbox="1112 636 1383 824"><u>春季から秋季にかけて干拓地東側の福田干拓地や源線輸中等で数個体が確認されているが、本種の分布・特性を考慮すると、本種の主な生息地は、本曾川の中流へ上流域であると推定される。</u> なお、三重県では留鳥とされているが、<u>現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>	表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				準備書	分類群	種名	種名		鳥類	イカルチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。礫の間の地上に窪みをつくり、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。	評価書 (p. 292)	鳥類	イカルチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。礫の間の地上に窪みをつくり、小石、貝殻、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</u>	表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				分類群	種名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥類	イカルチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。礫の間の地上に窪みをつくり、小石、貝殻、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</u>	<u>春季から秋季にかけて干拓地東側の福田干拓地や源線輸中等で数個体が確認されているが、本種の分布・特性を考慮すると、本種の主な生息地は、本曾川の中流へ上流域であると推定される。</u> なお、三重県では留鳥とされているが、 <u>現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>
表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																														
準備書	分類群	種名	種名																											
	鳥類	イカルチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。礫の間の地上に窪みをつくり、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。																											
評価書 (p. 292)	鳥類	イカルチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。礫の間の地上に窪みをつくり、小石、貝殻、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</u>																											
表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																														
分類群	種名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																											
鳥類	イカルチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は河原が発達した河川、特に大きい川の中流域の氾濫原や扇状地等の砂礫地に生息する。一般的には河口や川の下流、海岸にはほとんど飛来しない。留鳥として、本州から九州で3月~7月に繁殖する。 <u>三重県では留鳥とされている。礫の間の地上に窪みをつくり、小石、貝殻、植物の破片を敷いて巣をつくる。湖沼や河川の水辺の地上や、浅い水域で昆虫類を捕食する。</u>	<u>春季から秋季にかけて干拓地東側の福田干拓地や源線輸中等で数個体が確認されているが、本種の分布・特性を考慮すると、本種の主な生息地は、本曾川の中流へ上流域であると推定される。</u> なお、三重県では留鳥とされているが、 <u>現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>																											
270	改訂	<p>準備書 p270 「6.1.7 重要な陸生動物 (1) 陸生動物の重要な種」の表を改訂 (下線: 改訂)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4" data-bbox="400 920 1383 958">表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th data-bbox="400 958 517 987">準備書</th> <th data-bbox="517 958 633 987">分類群</th> <th data-bbox="633 958 1112 987">種名</th> <th data-bbox="1112 958 1383 987">種名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="400 987 517 1256"></td> <td data-bbox="517 987 633 1256">鳥類</td> <td data-bbox="633 987 1112 1256">シロチドリ (チドリ目チドリ科)</td> <td data-bbox="1112 987 1383 1256">本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</td> </tr> <tr> <td data-bbox="400 1256 517 1576">評価書 (p. 292)</td> <td data-bbox="517 1256 633 1576">鳥類</td> <td data-bbox="633 1256 1112 1576">シロチドリ (チドリ目チドリ科)</td> <td data-bbox="1112 1256 1383 1576">本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。<u>三重県では留鳥とされている。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</u></td> </tr> </tbody> </table> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="4" data-bbox="400 1270 1383 1308">表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)</th> </tr> <tr> <th data-bbox="400 1308 517 1337">分類群</th> <th data-bbox="517 1308 633 1337">種名</th> <th data-bbox="633 1308 1112 1337">種の分布・特性<sup>2)</sup></th> <th data-bbox="1112 1308 1383 1337">確認状況<sup>2)</sup></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td data-bbox="400 1337 517 1576">鳥類</td> <td data-bbox="517 1337 633 1576">シロチドリ (チドリ目チドリ科)</td> <td data-bbox="633 1337 1112 1576">本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。<u>三重県では留鳥とされている。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</u></td> <td data-bbox="1112 1337 1383 1576"><u>春季から秋季にかけて干拓地周辺の干潟や干拓地の堤防上において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、干拓地周辺の干潟であり、満潮時には堤防等を避難場所として利用している。</u> なお、三重県では留鳥とされているが、<u>現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u></td> </tr> </tbody> </table>	表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				準備書	分類群	種名	種名		鳥類	シロチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。	評価書 (p. 292)	鳥類	シロチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。 <u>三重県では留鳥とされている。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</u>	表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)				分類群	種名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>	鳥類	シロチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。 <u>三重県では留鳥とされている。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</u>	<u>春季から秋季にかけて干拓地周辺の干潟や干拓地の堤防上において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、干拓地周辺の干潟であり、満潮時には堤防等を避難場所として利用している。</u> なお、三重県では留鳥とされているが、 <u>現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>
表 8.6.1-22 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																														
準備書	分類群	種名	種名																											
	鳥類	シロチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。																											
評価書 (p. 292)	鳥類	シロチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。 <u>三重県では留鳥とされている。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</u>																											
表 8.6.1-26 重要な陸生動物の特性及び確認状況 (3/7)																														
分類群	種名	種の分布・特性 <sup>2)</sup>	確認状況 <sup>2)</sup>																											
鳥類	シロチドリ (チドリ目チドリ科)	本種は海岸の砂浜、河口の干潟、大きい河川の広々とした砂州に生息する。冬季は本州以南の砂浜や海岸の埋立地、干潟、河川敷、海岸近くの水田等で多く見られる。留鳥として北海道から南西諸島まで、3月~7月に繁殖するが、北日本では夏鳥として冬季には暖地に渡るものが多い。 <u>三重県では留鳥とされている。砂地の漂流物の間や疎らな草の間等の浅い窪みに、木片、小石、貝殻等を敷いて巣をつくる。昆虫、クモ類、ハマトビムシ等の甲殻類、ミミズやゴカイ類、小型の貝類等を捕食する。</u>	<u>春季から秋季にかけて干拓地周辺の干潟や干拓地の堤防上において確認された。本種の生息環境及び確認状況から、本種の主な生息地は、干拓地周辺の干潟であり、満潮時には堤防等を避難場所として利用している。</u> なお、三重県では留鳥とされているが、 <u>現地調査の結果に基づき調査地での渡り区分を(留鳥)と判断した。</u>																											